

「いのちの讃歌」

山本空外講義録

1.

「悪」とはなにかということは、まだ哲学者で説明し尽くした人はいない。

「善」とはなにかということもまだ完全には説いていない。

わたくしは哲学が専門の学者ですから、何十年も研究しているのですが、

正面から善とは何か、悪とは何かということを説明できた人はいない。

しかし、わかりやすくいえば、悪というのは自分勝手をするのはよくないということです。

2. P28 より

梅は梅なりに、桜は桜なりに、松は松なりに、柳は柳なりに、大自然のいのちを生きているじゃないですか。

松はいくら見事でも柳がつとまらないというわけにはいかない。

桜がどんなに華やかでも、梅がだめだというわけにはいかない。

それが桜が華やかだからといって梅がうらやんだところで、はじまらない。

うらやむということは、自分の値打ちを自分で捨てることです。うらやむことはない。

3. P29 より

科学のおかげを受けなくても、大自然のいのちを自分なりに全うしていくことができれば、それにこしたことはない。

いくら科学の原理を応用しても、自分自身がおしまいになったらだめです。

みんなに似たり寄ったり担って、大自然のいのちを自分なりに生きていくことができないと値打ちがない。それが第一です。

4. P29 より

エゴということが今頃いわれているけれども、

自分なりに全うするということは何もエゴイズムじゃない。

そんなエゴしか西洋人にはわからないんです。

本当の自分ということも知らない。

わたくしは西洋哲学思想史が専門ですが、西洋人のほとんどの方が本当の自分を知りません。

5. P29 より (続き)

自分のことを難しくいえば、主体性といいます。この主体概念というのを確立したのが
プロテーノス (204 ~ 270) が初めてです。

・ ・ 途中省略 ・ ・

それまでは自分というものがはっきりしていない。

プラトーン (BC427~347) でもアリストテレス (BC384 ~ 322) でもはっきりしていない。

プラトーンは「イデアの超越」を説いた。

アリストテレスは「エンテレケイアの内在」を説いた。

超越と内在を説いたのです。

6. P30 より

阿弥陀さまというと、このわたくしが死んでもそれは阿弥陀さまの働きであることに間違いない。

それを超越という。

わたくしが死んだから阿弥陀さまも死ぬというわけにはならない。

阿弥陀さまとは、大自然のいのちの根源をいう。

その阿弥陀さまのいのちから花も咲き、鳥も飛んでいる。

雨が降れば自分もその降った雨を飲める。

わたくしたちが寝ていても、心臓はまわっているのは阿弥陀さまのおかげです。

自分の力でまわすことはできない。

それを超越という。

7. P31 より

人間の値打ちは内の目的、何を目的で生きているかで決まる。

人間が持って生まれた、自分がさとらなければどうしようもないもの、

他人が代わりにさとれないものが人間のうちにある。

それを仏性という。仏というのは「覚 (さとる)」という意味です。

厳密には「覚った (さとった)」とインドの言葉では書いてある。

「サトッタ」というのは「わかった」ということです。

自分が何のために生まれて生きているのかがわかった。

他の人では代わりはできない、自分で初めて大自然のいのちを自分なりに全うしていくことができる。

それがわかることを、サトッタという。

8. P3 4 より

サトッタとは、大自然のいのちが、一人ひとりの心の底で一つになった。

つながった、合一したということです。

そうすると、大自然のいのちが自分なりに全うしていくことができるようになる。

人間は何のために生きているのかというと、そのために生きている。

その間に、お金が貯まっても、貯まらなくてもいい。

出世しても、出世しなくてもいい。

大きな家を建てても、建てられなくてもいい。

いい着物を着ても、着れなくてもいい。

そのようなことはどっちもいい。

・ ・ 途中省略 ・ ・ ・

肝心なことは、大自然のいのちが自分の心の中で接して一つになってくれればいいのです。

9. P35 より

外見はどうでもいい。内が大事です。

内とは、大自然のいのちを自分なりに全うしていくことです。

あの人はいい着物を着ているとって他人のことをとやかくいわない。

なぜかというと、羨ましがるとは、大事なことに気がついていないからです。

10. P36 より

他人のことに文句をいいだすと、どうでもいいこと時間と力を使って、

大事なことがみんなお留守になってくる。

大事なことは、みんな心掛けなければいけない。

どうでもいいことは、人それぞれに好きなようにさせておいたらどうですか。

大事なことをみんなが心掛けるようになると、どうでもいいことも自然によくなります。

ひとりでよくなる。大事な事をほっておくから見かけだけになる

11. P39 より

指一本だって世界中のお金や学問を集めてもできない。

そこに大自然の命が働いているから指が動く。
その力というか、それを書く文字の中へ出るとまじな字が書けて当たり前。
書けないほうがよっぽど不思議じゃありませんか。
これはなにも字だけじゃない。仕事は何でもそうです。それを自分なりに全うする。
書ける手を持っていて書かないのは、自分の責任じゃありませんか。
書くだけじゃない。
人のやることすべてがそうです。
それを何が邪魔するのかというと、格好のよい字を書こうとか、
或いは仕事ならどれほどたくさんのお礼がもらえろとか、日当はいくらになるとか、
そういうことを考えるとダメになる。

12. P41 より

わたくしはドイツ人やフランス人と同じように言葉が喋れて約3か年、
ドイツやフランスにいましたけれども、大事なことは、それだけでは、ほとんどわからない。
わたくしは今72才です。
日本に72年住んでいても、日本のことはみんなわかっちゃいない。
知らないことのほうが多い。
すべてわかるはずがない。
評論家なんかちょっとどこかへ行ってきて、わかったようなことを言う。
自分は大事なことがわかっていない、ということがわからない。
出発点がない。

13. P42 より

自分ほどわからないものはありません。
わたくしは、このわたくしがどういうものかということが、よくわからない。
今から死ぬまでにどういう事に出会って、そして今よりもどれほど深いことを考え出す
かわからない。
人間は、出会いによって生きている。

14. P42 より

善いことにつけ悪いことにつけ、
人間は出会うことで自分を掘り下げないといけないことがいくらかでも起こってくる。
だから出会ういかなることをも、自分なりに生かしていかないとはいけません。
それが南無阿弥陀仏の一行です。

15. P43 より

アミダとはインドの原語で計算できないという意味。

アは無で限りがない、ミタは量る。どこまでも深く自分の心がけひとつで掘りおこせる。そういうことです。

だからわたくしは、これから死ぬまでまだどういふことに出会うかわからない。

また死ということをやよいよ目の前にすると、こうして元気で生きている時とはまた違ったことをさとれます。

こうして死んでいく。

だから死ぬときは、死を拝んで死んでいく。

死ぬのはつまらないとか、情けないとか、どうしようと、へこたれるんじゃない。

死ぬ時には死を拝まないと、死に出会わないとさとれないことが自分なりにわからない。拝むとわかる。

ものは拝まないとわからない。

16. P43 より 続き

何故かという、拝まないと、自分の才覚だけでもものを決めるからです。

自分の才覚は問題にならない。

いくら偉いといつても所詮はだめです。

ノーベル賞をもらった方だって、ご自分の専門のことはよく知っておられるでしょうが、専門ではないことは、そうはいかない。

専門外のことで、それでも人間かというようなものです。

だから出発点が大切です。

自分の知っていることがいくら勲章をもらうほど立派な方でも、

自分の知識は全体でいうと何千万分の一でもない。

簡単にいえば自分は何ひとつきちんとわかっていない、ほんのちょっとしかわかっていない。

17. P43 より 続き

そのことを東洋の表現では「愚」という。

法然上人は「愚痴（ぐち）の法然坊」とおっしゃいました。

親鸞聖人が「愚禿（ぐとく）親鸞」といわれた。

伝教大師が「愚中の極愚」といわれたでしょう。

日本のまともな方はみんな自分のことを愚といわれた。

それは馬鹿という意味じゃない。

あのような方がたが馬鹿なはずがない。

自分の知っていることはほんの僅かで、知らないことがほとんど。

しかもその知らないことのおかげで今、わたくしは生きられている。
生きていなければ始まらないんだから、生きられていることほど大事なことはない。
だから生きられていることへ、手が合わせられる。
そうすると自分なりに大自然のいのちの根源が感応してくる。
感じを帯びてくる。これが大事です。

18. P43 より

今生きられているこの事実を拝まらずに偉そうにマルクスやなんか言っておって、
マルクスがわかったかという、わかった方はおられないくらいです。
・ ・ 途中省略 ・ ・ ・
マルクスはどういうことを考えていたかという、マルクスは自然価値は眼中になく、
人間の労働価値しか考えていない。
ところが労働価値だけでは、つまり何時間働いたというだけで、きちんとした仕事ができますか。
そうじゃないでしょう。
われわれは仕事をするには働かなくちゃいけないが、手も足も自然に動いている。
それから空気も吸わなければ、水も飲まなければ生きられないし、働きも出来ない。
太陽にも照らされなければね。
こういう自然価値が大切です。
マルクスは労働価値を説いても、自然価値に対してはさっぱりです。

19. P47 より

さとれないのは、どこか心に蓋をしているものがある。
つまり偉そうにしている。「愚」でない。
ちょっと本を読んだとか、少しばかり貯めたお金とか、建てた家とか、子供が社長にな
ったとか、
そういうことを鼻にかけている。
鼻にかけるとおしまいです。
そうすると、心にフタをすることになって、大自然のいのちは感応してきません。

20. P47～48 より

蓋をとると、大自然のいのちの根源に感応してくる。
蓋をとることと、感応してくることが、自分の中で一緒に起こってくる。
そういう喜びをさとらなければ、生きていてもつまらない。
本当に何にもならない。
人間はお金を貯める道具ではない、家を建てるために生きているのではない。
とにかくただ大自然のいのちを自分なりに全うしていく。それがナムアマミダブツで出来

る。

この感応、このいのちの根源との感応、いのちの根源に迫る感応を喜ぶのは、いのちの交響曲ともいえる無上のものです。

21. P48より

人の普通の喜びは、大事なことを落とした自分本位の喜びです。
人が建てることのできない大きな立派な家を建てたとか、
よその子が落第したが、うちの子は入学したとか、
自分の国は戦争に勝ったが、よその国は負けたとか、
一方で人を泣かせて自分が喜ぶ、そういう喜びしか知らなかったら、
それで人間としてどうかともなる。大自然のいのちには感応できません。

22. P48より

自分が大自然のいのちの根源を自分なりに全うして感応していくことは、人を泣かさずにできる。かえって、その喜びを皆さんと一緒にともどもによろこび合いましょうと、ともどもにできる喜びに重点を置く。人をうらやましがせたり泣かせたりしないと喜べないことばかりを追跡していると、知らないうちに手前勝手になる。

大事な一生、それも僅か百年も生きられない、その短い一生をできることなら、自他ともに、生きたいのちを両手をあわせて、別れた人も、生き残った人も手本にしたいような生き方をしたいものです。

23. P52より

わたくしが大学や大学院で講義したのを、学期末にテストをして答案を調べると、みんな違います。

答案の書き方をわざと間違えているんじゃない。

その含蓄が大事です。

自然（じねん）というのは、それをいう。

ひとつの花という、その一一（いちいち）が大事です。

一一というのは、このように一人ひとりちがうということです。

同じ原爆なら原爆に出会ってもサトリようが違う。

たとえば、雨が降るといのは一つです。

しかし雨が降ったその味わいは、一人ひとりみんな違います。

雨が降らなければ、庭木が枯れるというときの、庭を持っている人の味わい方と、

庭をもっておらんひとの味わい、それは、さとれといってもさとれない。

感じられません。

そこをいうのです。

サトリはこれだ、と決めたように思うのを迷いという。
だから仏教の話ひとつでも迷って聞いている方がたくさんおられる。
それではなんにもなりはしない。
サトリは死んで後だといっているようなたぐいのものです。
そうじゃない。
お経にはそういうことは書いていない。

24. P52 より

内面を掘り下げていくと、心の奥は大自然のいのちに接している。
つながっているからわれわれが寝ていても、心臓はまわっている。
自分がまわすことはできない。
お金をたくさん持っている人でも、そのお金の力でまわすことはできない。
われわれ一人ひとりのいのちの奥底が、奥といっても何も空間的な奥じゃない。
時間、空間というのは現象の形式であって、もう一つ奥にいのちが動いている。
絵や字を画くのもそのいのちの動きを画かなければ、本当の絵や字にはならない。
人間の仕事はみんなそうです。
それを光という。
光といっても、電気の光のようなのをいうのじゃない。

25. P55 より

仏さまというと、自分がサトルこととは別に、どこか西の方の遠くに、
という気がしますが、そうではない。
自分が迷っているときは、西の方の遠くです。
さってみればここです。
これは私が勝手にいうんじゃない。
「大経」（無量寿経）をまとめた「観無量寿経」に、極楽は「去此不遠（こしふおん）」
ここを去ること遠からずと書きます。
ここというのは娑婆（しゃば）です。
さすればここがお浄土です。
さとらないから、西の方の遠くだといっている。
サトレルのに、心にフタをするもの、煩惱がある。
損得というフタをしている。そうすると遠くです。
とても、ここどころじゃない。
ここには、身勝手しかない。
だから、身勝手をして、夫婦がいくら仲良くても、それでは値打ちがない。

損得の心のフタを取って本当に心の底から愛し合うというか、敬い慕い合うというか、
そういう親子や夫婦でなければ、相手は自分勝手をする道具にしかならない。
愛というのは、それを言う。
心のフタを取らなければ愛じゃない。
たいていの人はフタをしたままです。

26. P58より

仏さまのおサトリというのは決まっていない。
こういうことをサトルのだと決まっているとすると、とても難しいから死んで後のことだ
というようになる。
それは仏教でも何でも無い。
お経をちゃんと読んでいないひとの寝言みたいなものです。
仏教の仏、南無阿彌陀仏の仏はサトツタ（人）という意味です。
サトルというのは、自分がサトルことです。
だから、自分がさとらなければ、サトリとはどんなのか決め手がない。
サトツタ人の噂話では仏教の話とはいえないでしょう。

27. P59より

「般若心経」で無色無受相行識無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法・・・
と無がたくさん出てくるでしょう。
あの「ない」は、「大経」でいう「おのおの」です。
無だからナイ、ゴム消しで消したようにナイと思っておられるかもしれませんが、有りま
す。
有りますが一通りや二通りじゃない。
一人ひとりで皆違う。
同じひとでも貧乏な時とお金が出来た時とでは違う。
お金が出来たから欲をだしていいのかといたら、そうはいかない。
貧乏な時に経験したいろいろなこと、たとえばお金のある方から親切にして頂いたこと
を生かして、
自分なりに、やはり出来るだけはやらなければいけない、ということになる。
お金に余裕があればできないことはないでしょう。
それが「おのおの」です。
それを無という。

28. P61 より

「般若波羅蜜多心經」の一番初めに「觀自在菩薩行深般若波羅蜜多」とあるでしょう。
ふかい般若波羅蜜多において行を行ずる、行ずるということと、觀自在の自由自在とは離されない。

自由自在にならなければ行を行ずることができないからです。

行ずれば自由自在です。

西洋の文化は行ずることをせずに理屈でいう。

認識的だから自由という言葉はあるけれどもよく把握できない。

ただ自由自在といっているだけで喧嘩ばかりしている。

自由平等といって喧嘩しているだけです。

自由とは喧嘩する自由じゃありません。

自分が行ずることです。

29. P71 より

損得というのはその場だけの考え方、計算であって、
一生涯を広く考えると、得と思っただけが損になったり、損に思っただけが得になったりして、簡単に決められるものじゃない。

その時その時の考えで、得だ損だというだけであって、その時の考えがいつまで続くかは経ってみないとわからない。

30. P73.74 より

サトリの心の窓が開けない今までは、

これではいけない、あれではいけないと自分勝手に決めていた。

そういう得手勝手が、ひらかれた心の窓から阿弥陀さまの大海原のようなひろいのちの根源へ収まってしまう。

本来は広く考えないといけないのを狭く我が心の窓を閉めて、

手のひらに乗るぐらい小さく浅ましい料簡だけで考えるから自分勝手になるので、これを迷いという。

31. P74 より 続き

だからといって、自分の都合を中心にした考えを捨てよというわけじゃない。
自分中心の狭いきゅうくつな考えはもともと自分勝手なようですが、大事な考えです。
人間は欲がなかったら気が抜けたビールのようにになってしまう。
欲というもの、煩惱は大事です。
大事なこれを、本当に、自分のためにも、そして世のためにも生かすようにしなければ
いけない。その窓を自分勝手に閉めて浅ましく考えてしまう。それでダメなのです。
よどんで、腐ってしまう。そうすると、他人に嫌われる。
ですから、窓を大きく、ひーろく開けて、まともな事がいえるようにしないとイケない。
これさえ出来ればよい。

3 2. P74 より

今までいろいろ話してきたように、南無阿弥陀仏を喜ぶと、
一人ひとりがお釈迦さまのようにさとれる。
しかし、それはお釈迦さまのようであって、お釈迦さまと同じじゃない。
同じサトリでは何にもなりません。
それは二千五百年前のインドのことですから。
我々は前向きになって今日の時代にどう谷を渡り、
どのように山を越えていきいけるかが問題なのです。

3 3. P74 より続き

お釈迦さまの時代には問題でなかったことも今では問題になっている。
公害は、お釈迦さまの時には科学が進んでいませんから
今でいうような意味では問題になっていません。
で、今の時代にはどう心がけたらいいか。
科学が非常に進歩したため、月まで行けるようになったのはいい。
しかし、そう進んでいない方面がある。
進んでいないどころじゃない、かえって忘れていた方面もある。
心なんか無茶苦茶、ガタピシになっている。
今まではだいたいはい加減にバランスがとれていたが、
今は進む方はずっと進むが、遅れるどころじゃなくおしまいになりそうところもある。
それがゴチャゴチャになっている。それが現代の姿です。

3 4. P75 より 続き

昔は、田舎には田舎の良さがあったし、都会には都会の良さもあったけれども、
今では都会といったところで、東京だって人口の半分以上は田舎から来ている。
その上に、田舎は田舎で、テレビにしたって都会の真ん中で見ているのと同じものを見
ている。

子供も大人と同じテレビを見ているのですから、一面では子供らしい方面がなくなって
います。

子供は一番手本にしていい。学校に行くまでのあどけなさは、なんともいえない。

ちょっともひねくれてない。

それがだんだんとひねくれて、みんなにいじめられてりして、まともじゃなくなる。

そういう時代に、それをどうするといったところでテレビをやめるわけにもいかないし、
田舎にとどまって都会に出るのをやめるわけにもいかないから、ますますひどくなる。

それだからなおさら、わたくしども一人ひとりで、出来るだけの心がけと努力をしない
といけない。

政治が悪いとか、社会が間違っているとかいって、

まるで他人事のように文句をいっていたのでは、おしまいになる。共倒れになる。

だから簡単にいえば、一人ひとりの心がけそして努力をして、

谷も山も乗り越えていく自信を持たないといけない。

35. P77 より

わたくしの京都のお寺の近所のひとはみんな、農薬を一切使わない農業をやっています。

だから農業国デンマークの国王陛下が日本にお見えになった時に、

わたくしのお寺の附近の農業をやっている人が作ったカボチャやいろんなものを持って
帰られた。

・・・途中省略・・・

外へ出るとそういうものばかり頂くわけにはいかないが病気にならない。

どうしてでしょうか。

まあいえば、南無阿弥陀仏ナムアマミダブツと朝起きても、仕事しても、寝ている時でも、
夜中に目が覚めたときでもいいます。それだけです。

大自然のいのちを呼吸するというほど力強い生活力はない。

それを満足というのです。

36. P94 より

自分だけで今日があるのではない。

第一、わたくしはここへ招かれたことも、これを話すと時間がないので略しますが、
わたくしの生まれる前からのことです。

そのつながりだけです。

わたくしはただ頭で考えて口先で言っているのじゃない。

ことごとくそうです。

それで、お釈迦さま（BC466 ~ 386）がサトラレタというのは、それをサトラレタのです。

人間は目先のことで、例えば戦争に勝つと、おめでたいと言ってちょうちん行列をやってみたり、負けるとうろたえる。それは人間じゃない。犬や猫と変わりはない。

人間というのは、お釈迦さまのような人です。

お釈迦さまが初めて人間になられた。

だから、「釈迦牟尼仏」（しゃかむにぶつ）「ムニ」というのです。

インドのサンスクリット語で人間というのは「manusya」（マヌシャ）です。

「mn」で同じでしょう。この三番目の「n」は同じです。

アイウエオのアといってもウといっても、言語的には同じことです。

「muni」（ムニ）と「manusya」（マヌシャ）とは同じで、「考える」という意味です。

「考えるもの」ということです。

人間は考えなければなりません。

目先のことで、損とか得とか言っていたのでは、始まらない。

よく考えなければなりません。

37. P95より

みなさんは「縁起」（えんぎ）がいいとか悪いとかおっしゃる。

縁起とは「ヨッテオコル」と書いてあります。

目先のことでなく、この縁って起こるものがある。

・ ・ 途中省略 ・ ・

それで、縁起を考えなければ始まらないということをお釈迦さまが着想された。

二十九歳のとき初めて「ムニ」（muni）、人間として考えなければ、

人間じゃないと思われたから、王様をやめて出家なされた。

死ぬまで乞食坊さんです。

・ ・ 途中省略 ・ ・

それで、三十五歳で仏さまになられた。

覚ったということです。

厳密には「覚れた」という。

「ブツダ」（Buddha）というインドの言葉は、漢字で当てる場合は「覚」と当てますが、

「覚」の読み方は「さとれた」と読むのが正しい。

・ ・ 途中省略 ・ ・

お釈迦さまが初めて人間になられた。

「牟尼」（むに）です。

さとられた。

考えなければサトルことはできない。

考えても目先のことだけ考えて、顔色をかえて得とか損とか言って、
喜んだりちょうちん行列するかと思えば、またうろたえたり恨んだりしている。
それでは人間じゃない。それでは「牟尼」とは言わない。
だからお釈迦さまは生まれたときから二十九歳までは人間じゃない。
そこではじめて考え出されて、これではダメだ、
人間の恰好で生まれてきても値打ちはないと思い、
それで乞食坊さんになって六年たってさとられた。
わかれたのです。

38. P97 より

サトッタというのはわかったということです。
人間は何をするために生きているのかということがわかれた。
それから八十歳までずっと、
その縁起のサトリをみんなに勧めていただいたから、こうして仏教のもとができた。
しかし、お釈迦さまのサトリの内容はどういうことなのかというのは、すぐには決められない。
学者の間で意見が合わなかった。
戦争をすると、勝った国の文化は他に影響するでしょう。
今でも日本は、アメリカに負けたから、アメリカ文化の影響は決定的です。
それで、お釈迦さまの教えも、相手次第でどのようにもとられるということになるとい
けないから、その後ギリシャ文化の影響によって、わかりにくかった縁起の教えをズバ
「空」だとしたのです。
「空」とは「おかげ」という意味です。
目の前には見えないけれども、
うしろにつながりやこれからの実り方の方向にもつながる自然の働きです。

39. P103、104 より

わたくしは聖武天皇こそ世界一の天皇だと思います。
それは証拠があつていうのです。
今日、正倉院が残っているでしょう。
現在はだれでも見せてもらえるけれども、戦前はなかなか見られなかった。
でも、わたくしは、戦前に招待されていました。
中に入りますと、布だけでも何千枚と重ねてあります。
その一番上を今年拝見し、来年はその次を見せて頂くという具合にして拝観しております

した。

布の他に、今残っているもので聖武天皇が平常にお使いになっていた道具類がある。

今日、正倉院の宝は世界一です。

しかし、それらは日用品です。

あのような物を日常生活に用いておられた。

・ ・ 途中省略 ・ ・

世界で聖武天皇のような日常の生活をなさった方はおられない。

その証拠が正倉院です。

今、正倉院に残っているものは、世界一の宝です。

わたくしは世界の民族博物館を見て回っていますが、そんな所は他にはありません。

聖武天皇の皇后の光明皇后（701～760）は、書でも日本一です。

女子ではむろん、男子でも光明皇后ほどの字が書ける方は、

弘法大使（774～835）や良寛禅師（1758～1838）などという方がたは別として

他にはおられません。

「書は心画」と言います。

人間になるということは心の上でなれるのです。

40. P109、110より

いろは歌の元になっている「涅槃経（ねはんぎょう）」に

諸行無常（しょぎょうむじょう） 是生滅法（ぜしょうめつぽう）

生滅滅已（しょうめつめつち） 寂滅為樂（じゃくめついらく）

とあります。

諸行無常とは常がないということです。

こうして話をしていますが、わたくしも明日はもうわからない。

もう歳ですから、いつどういうことがあるかわかりません。

若いからといってもわからない。

常ということはない。いつかはこの世とお別れすることがある。

花が咲いて散っていく、これが生滅の法だということです。

生まれてきてめでたいといっても、また別れて悲しむこともある。

しかし、ただ生じた滅したというだけでなく、もうひとつその奥に命の根源がある。

それを「阿弥陀」というのです。

阿弥陀さまは、わたくしがこの世とお別れしても少しも変わらない。

太陽は照り、地球は回っております。だから、生滅を滅し終わって、寂滅を楽しむを為す、という。

目先だけのことで、ちょっと間に合わせにやっているだけでは本当の極楽ではない。

「寂滅」というのは、その生じたり滅したりするもと、奥があるということです。

さとるといふのはそのもとをさとる。
命の根源をさとる。
ですから東洋も西洋もない。
命の根源に二つはない。

4 2. P110 より 続き

それを、インドの原語では、「阿弥陀仏（あみだぶつ）」ということばであらわす。
また、西洋の言葉では「一者」とあらわします。
ギリシャ語で「ト・ヘン」という。
「ト」は中性の定冠詞、「ヘン」は数字の一、本来、中性も男性も女性もないのですが、
ギリシャ語やラテン語、ドイツ語やフランス語には性別がある。
勿論インドのいろんな言語にもあります。
それで中性ですから「一ナル者」といえますが、長いから「一者」という。

4 3. P111 より

人間は何も人を恨んだり、他人を自分の思いどおりにしようとしたり、
自分勝手なことばかり考える必要はない。
男子は男子、女子は女子です。
だから男子にできないことは女子がしてくださり、女子にできないことを男子がやって、
みんなで力を合わせて仲よく助け合って生きてらどうですか。
それを「一者」という。
西洋の「一者」という言葉を東洋では「平等」という。
平等というのには西洋にはない。

西洋には英語で「イクオリティー」(equality)ということだけです。
同じという意味です。
二と二を足したら四になります。
その四に平等という意味はない。

4 4. P112 より 続き

男子と女子では大違いです。
しかし、男子は男子にできることを女子のためにしてあげていいし、してあげなければ

なりません。

女子は男子にできにくいことをして、またしてほしいですね。

それが平等という意味です。

自分ができることを他人さまのためにも世の中のためにもすることが平等です。

他人がボーナスをもらったからといって、自分も同じように下さいというのは平等じゃない。

そんなことをいうからけんかになる。

西洋はずっと昔から宗教の戦争をやっている。

仏教には仏教戦争があったことはありません。

キリスト教は今でも、戦争をしている。マホメット教でもそうです。

イランとイラクの戦いはマホメット教の戦争です。

キリスト教はイギリスで、カトリックとプロテスタントとが殺し合いを今でもやっている。

それはなぜか。

同じということをいうからです。

同じということに固執すれば取り合いのけんかになります。

この世の中に同じものはないのですから。

45. P113 より

人間はおいしいものをいただいて休んでいても、

肝臓は精密検査をして体中に血液を循環させてくれている。

それで、今日もこうしてみなさんにお話ができる。

それは肝臓のおかげです。

それだけじゃないけれども、それもひとつです。

そういう肝臓がやる精密検査は、世界で一番の医師であってもできない。

・ ・ 途中省略 ・ ・

また、心の中の大事なところは、本当に清らかに澄みわたるようになっている。

起きているときは余りものを考えていない。

寝ている間が大事です。頭が本当に働く。

起きているときは、見たり聞いたりしているから、半分しか働かない。

こんなふうになんか働きののおかげが人間の体にはあります。

お金を一億円や二億円出してもできないことづくめで、われわれは生かされている。

それを阿弥陀さまという。

46. P114 より 続き

阿弥陀さまというと、木に彫ったりしているお姿をおもい、
阿弥陀さまに頼んでおけば死ぬと極楽へ迎えてくれるという気持ちをもたせているのは、
いいかげんな説明です。
そういうことはない。
あろうはずがない。
木や金属で造形している阿弥陀さまは彫った方の姿です。
子供が絵をかくと、子供らしい絵を画きます。
画いた方の程度の仏さましかかけるものではない。

47. P114 より 続き

仏像は、はじめはインドにもなかった、ギリシャ人が造ったのが始まりです。
お釈迦さまが亡くなられて六十年たつとギリシャ人がインドに攻めてきて勝ったでしょう。
アレクサンダー大王のインド遠征（BC326）です。
そのとき、インドにやってきたギリシャ人が、世界で初めて仏像を彫った。
その像をアポローン型仏像といいます。アポロは、ギリシャ人の神様です。
そのアポロを模してつくっているのが一番古い仏像です。
その他のものも、今日残っているのを見ると、みんなギリシャ人にそっくりの顔をしている。
だからギリシャ人がつくると自分の顔しかつくれない。
自分の気持ちでしかできない。
それをインド人がまねをしだすと、インド人のようになる。
また中国人がまねをすると中国人のような顔つきになります。
画いたり彫ったりした人自身の顔のようになる。
それでいいじゃないですか。みんな仏さまになれるんです。

48. P114 より 続き

一生懸命、ナムアミダブツと言って彫っているときは、阿弥陀さまになっている。
わたくしが字を書くときには、ナムアミダブツと言って書いている。

そのときには、阿弥陀さまが書いてくださっているのです。
わたくしが書いたのであれば値打ちがない。しれたものです。
わたくしはナムアミダブツと言って書かないときはない。
ナムアミダブツと念仏させていただいたら、阿弥陀さまが書いていなさる。
それが値打ちなのです。
永遠の値打ちは、阿弥陀さまにしてもらわないとできません。
それを芸術という。
お金を一億円だして絵を買われても値打ちはない。
ただ相場がそうなっているだけのことです。
本当の命の値打ちがない。
命の根源は阿弥陀さまですから、阿弥陀さまの字や絵になっていなければなりません。

49. P115 より

いまだに損とか得とか言って、自分勝手をしていて平和運動をやろうとしている人たちがいます。

いくら平和運動をしても、それでは、平和になるものではない。

平和になるには、自分がまず平和にならなければならない。

あの方のように生きたら平和になるという、そういう光が周囲の人びとを照らせば平和になります。

わたくしの話を聞いて、わたくしのような生き方をする方は、

だんだんふえているのですが、そうしないと見込みはない。

口先だけで平和をいい、何にもわからないでごまかしているのでは、

いつまでたっても平和にはなりません。

50. P117 より

仏さまは木で彫ってあります。

なにも木を拝むことはないと言う方がありますが、それはその方の程度です。

ナムアミダブツと申すひとに、仏さまの姿を彫らせてくれているのです。

ですから、彫った仏像がそのひとの力の程度をあらわす。

彫るときは、一刀三礼のナムアミダブツで彫るのです。

そうすると、そのものずばり、阿弥陀さまの形、命の形です。

そういう心の働きに頭を下げないような方もあります。

ただ、物を見ると何億円だという。お金に左右されているから安ければ粗末にする。

お金は大事です。

ところが、人間の命は何百億円でも何千億円でもできるものではない。

それで「阿弥陀」というのです。

「阿」とは「ない」という意味です。

「弥陀」は「計算する」です。

計算できても十億円どころじゃないということです。

阿弥陀さまはお金では買えない。

できないということです。

お金のことばかり考えていると人間にはなれない。

私どもの命とはそうじゃないですか。

5 1. P125 より

仏教は清浄のことしか考えていない。浄土といいますでしょう。

それは決して自分勝手にしないという心の浄土です。

清らかです。

悪かったら悪かったと、すまなかったらすまないことをしたというのです。

さっぱりとしているでしょう。

悪いことをしていいという意味じゃないけれど、人間ですから、そういうこともときどきあっても、

すみませんでしたといえればそれですみます。

清らかなのがいい。

隠したり自分勝手な理屈をつけない方がいい。

何でもないことですが、それができない。

5 2. P126 より

ある植物学者の博士が、千年前のはすの種をまいたら花が開いた。

わたくしは、大きなその花の写真を送っていただきました。

あの蓮華の種は千年前から生きていた。

そんなのを野菜として我われはいただいとる。

だから、殺生をしてはいけないというても、しなければ生きられない。

野菜だから死んでいるというわけじゃない。

5 3. P128 より

建暦二年（1212）に法然上人が亡くなられた。

亡くなられた年に本が出たということはその頃の世界の出版史上に例がない。

バイブルもまだ出版されておらない。

法然上人から二百年前に恵心僧都（えしんそうず）（942～1017）の『往生要集』が出たきりです。

法然上人が生きておられる間に出た本が一冊だけある。

『和語燈録（わごとうろく）』という本です。

かなまじりの版木刷りで一番古いのは、

法然上人の『和語燈録』ということだけ覚えておいて下さい。

日本語の本では最初の本です。

54. P135 より

仏教は一千年の間インドで発達しましたが、一千年で終わりです。

なぜ終わったのかといたら、

マホメット教徒（イスラム教）がインドに攻めてきた。

仏教では殺生をしてはいけませんが、戦争ですから向こうから攻めてきたら守らないといけない。

お互いに殺し合いになりますから、僧侶もお経もみんなインドからチベットへ疎開した。

だから、インドでは仏教がなくなりました。

しかし、仏教精神は残りました。

インド独立の父ガンジー（1869～1948）は、

不殺生という仏教精神を貫き断食一本でインドの独立を成功させた方です。

これは仏教精神だとガンジー自身がいておられます。

55. P143,144 より

自分の心が浄められると、花を見ても、鳥の鳴き声を聞いても何倍も深い味わいがある。

花をみて、花のいのちを楽しもうと思ったら、自分の心が浄らかでなかったらいけない。

そうでないと、これは何の花か、いい具合にできているなというぐらいしかわからない。

心が浄らかなひとは涙が出るほどありがたくなる。

花を見て泣く方さえいる。

それは花のいのちに触れて、何十倍もその美しさを感じることができるからです。

56. P144 より 続き

松山市に花に関しては日本で名高い学者がおられます。

その方は朝鮮半島の山に詳しい。

朝鮮半島には日本にない花がある。その花を見ていると本当に涙が出てくるといわれる。一週間でも山の奥に入って行って、花を見て泣けてくるというような喜びを、わたくしに一生懸命話して下さい。

同じ花を見ても、それほど心が通って心の底から浄らかな涙が出るほど感激する方もいる。これは自分の心で感じるんです。

この花は高い。ン万円とられたと関心しているひともいれば、

ン万円もしますかねえ、どこがそんなにいいのですかねという感激のしかたもありますが そうじゃない。

ン万円でも無料（ただ）でも、見ていると涙が出るくらいの感じ方がある。

いのちそのものに通じるのです。

阿弥陀さまの智慧や慈悲の中で、花のいのちと人間のいのちが同じように通っている。だから、心が浄らかになってくると、いくら儲かるかというようなことじゃなくなる。

57. P146 より

浄土とは土という字を書くけれど、土とは生活のことです。

土の中には何億という微生物がいる。

ですから、焼き物はいのちの形をあらわすようなものです。

だから、焼き物はその焼くひとの心の程度があらわれてくる。

心が浄らかであれば、目の覚めるような焼きものができる。

陶器は土ではありますが、いのちのかたまりです。

いのちそのものです。

浄土の土は、その土を使ってある。どこかにあるという場所じゃない。

自分のいのちが浄らかでないと浄土になりません。

土の意味もよくわからないのに浄土があるとかないとかいうが、浄土しかありません。

勝手にあるとかないとかいっているのは夢を見ておるようなものです。

58. P155 より

我々が生きられている、そのおかげは何千万年たっても何十億年たってもかわらない。

永遠そのものの働きで護られて生まれて生きている。

ですから、目の前にお金が見えたからといって、

その場限りのいいかげんなことをやっておったのでは、これはもう生きる価値がない。

それが智慧です。

さとしてわかってくる。

今、わたくしがナムアマダブツというとその顔が阿弥陀さまとなる。
ところがコン畜生というときには、角が立った顔になる。
同じ顔でもナムアマダブツと言う顔とコン畜生と言う顔は違う。
これを「空こそ色なれ」という。
心の中身こそが形になる。
心の中身がズバリ形になって現れる。
これは大事なことです。
これを「空即是色」と漢文で書いても、「空こそ色なれ」とは読めないが、
もとのインドの言葉には「空こそ色なれ」と書いてある。

59. P155 より

空というのはおかげ、損得なしということで、目の前に出てこない。
今まで気が付かなかったけれども、この話を聞いて下さって、今は今の感じで受け取って下さる。
また来月になれば、この話を思い出されます。
すると、みなさんの一人ひとりの生活の経験として、また、かかわりとして感じ方が違ってくる。
家族のだれかが入院しておって、今日明日にもあぶないという病気になったと仮定すると、その今日の感じ方、気持ちが違ってきます。
そういう出会いや事件によって生きていく。
今こうして聞いておられるときには今の雰囲気聞いておられる。
私どもは来月どういうことが起こるかわからぬ。
家庭にも友達の間でも、また国にしてもわからない。
そういうときに感じ方が違ってくる。
この心の中身こそが形をとってくる。
決まったものじゃないということです。
それが「空こそ色なれ」です。

60. P156 より

我々は遅かれ早かれどうしてもこの世とお別れする時がありますけれど、
そのとき、この授戒をみなさんがどのように受けとるのか、
その受けとり方によって受戒がどれだけの力になるかわかりません。
うろたえる方もあるけれども、うろたえずにすむこともできる。
みんなに「お世話になったね」といってお別れできる方と、
うろたえて、どうでもいいことを苦し、とうとう最後は心が乱れたまま往くひとがある。

別れるときには、どうしても形にとられる。
集まった友人や親戚が、授戒の話をあのときに聞いたけれども、
本当に有難い授戒会（じゅかいえ）だったね、というようなお別れができないとも限り
ません。

私たちはそのような心もちになれるように生かされておる。

そのことが「空こそ色なれ」です。

だから一通りの意味じゃない。

『般若心経』はそのことを訴えている。

空といえば決まったことのように思い、阿弥陀さまというと、どこかにおられると思う
方もいる。

けれども、そんな阿弥陀さまはおられない。

だから、アミタ、計算できないという。

61. P167より

自分が生きているのは、生きられるおかげがあるからで、

それが大自然のいのちのつながりの中でまもられている。

ひとつまちがえても我われは生きることができない。

お金で間に合うことはいくらでもあるが、お金で計算できないことで我われは生かされ
ている。 今日一日を生かされているそのようなおかげに感じを深めだすと、こころのサ
トリが深まってくる。 ひとさまにちょっと親切に道を教えて下さっても、ありがとうと
いわないと気が済みません。 おかげを感じずる心があるからです。

ところが、人生そのものが道ですから、どっちを向いて生きていくのが永遠の生き方か
という、それをじかに感ずるいのちそのものを南無阿弥陀仏というのです。

62. P171より

唐の善導大師、今から千三百年前の方です。

昨年にその千三百年の遠忌（おんき）が終わったところです。

法然上人と善導大師とは年代でいうと五百年違うのですが、

法然上人は善導大師に夢の中でお会いになっておられる。

そんなことはないという方もいるが、ないといっても事実あるのですから仕方ない。

千年前の蓮の種でも、まけば立派な花が咲くのです。

千年前のそんな古い種が芽を出して花が咲くものかとおもいますが、立派に咲くじゃな
いですか。

植物の種ひとつとってもいのちが続いている。
わたくしもご回向（えこう）を頼まれて、ご回向していると、とうの昔に亡くなられた方にお会いする。

ナムアミダブツとお念仏するとそういうことがある。

そんなことはあるはずはない。

死んだひとに、生きている者が会うことはないと思われるかもしれませんが。

たびたびじゃないですが、実際に追善を頼まれて、仏前で回向していますと、その亡くなった方に会うことができる。

あるのだから仕方ない。

わたくしが自ら経験している。

だから、ここで申し上げることは理屈を説明しているのじゃない。

63. P173 より

聖武天皇は、世界一の天皇であることに間違いはない。

聖武天皇のような生活をした方は、世界の王さまの中にいない。

それはただ、わたくしが考えていっているのじゃない。

聖武天皇が平常に使われていた道具類が正倉院御物として残されていますが、それらを見ただけでわかります。

世界中のどの王さまの物より比較にならないくらい素晴らしい。世界一の宝です。

アメリカは、前の戦争で、日本の都市を無差別に爆撃して、

何の罪もないたくさんの人たちを困らせた。

ああいうやり方はじつにけしからぬ。

日本も真珠湾を奇襲攻撃しましたが、だれが考えてもあれでいいというひとはいない。

けしからぬことをあげればお互いにいくらでもあるが、

正倉院を爆撃したり、奈良や京都のお寺を全焼させたりしてはいけない。

あれはオッペンハイマー（John Robert Oppenheimer 1904~1967）という理論物理学者が、日本だけでなく世界の宝だから爆撃してはならぬと軍にいったからです。

それで軍はその通りにした。そんな国はアメリカぐらいです。

それで、その世界一の宝というのは何か。

法隆寺の木造建築にしても世界一です。

京都の名刹といわれる寺院でもみんなそうなのですけど、その中の第一番目は正倉院です。

そこには聖武天皇の日用品を集めてあります。

あのようなものを実際に使って生活しておられた。

今だから、我われが見せてもらっているけれど、見せるために作られたものじゃない。

64. P177、178より

中国の書物と日本の書物とどこが違うのかといいますと、
中国は天台の方でございますから、一心三観というようなことをいう。
一つだけれども三つを観る。
三つというのは「空（くう）・仮（け）・中（ちゅう）」といって、
空が問題になってくるのですが、「空こそ色なれ」と申したように仮です。
わたくしがこういう姿をしておるのは仮の姿です。
今、観誠中（かんかいちゅう）で、お話をしているからこういう姿をしている。
午後からの剃度色（ていどしき）のときにはまた別の姿をします。
しかし、わたくしに変わりはありません。
わたくしがお湯に入るとき、このままでは入れません。（笑）
いくら剃度色でまた変わった服装をしても、お湯に入るときは、お湯に入る姿がありません。（笑）だから決まったものじゃない。
仮（かり）です。それを仮（け）という。私がお湯に入っても、夜休ませていただいても、わたくしに変わりないですから、それが空です。
「空こそ色なれ」です。
寝ているからわたくしがおらぬのじゃない。寝ているときの方が大事です。

65. P179より

わたくしは中国からインドの文献までみんな読んでいますけれども、
あたりまえのことしか言っておらぬ。
サトツタひとは、あたりまえのこと、自然のことしか考えない。
さとらないと、自分勝手なことになる。いくら学者になっても、自分勝手なことを言う方が少なくない。それでも通らないことはない。
なぜかというと、本当のことを知らないひとの方が多いですから何を言っても通りはする。でも、そういうものじゃない。百人に一人、千人に一人しか知らなくてもです。

66. P179より続き

本当は日本の文献も大事ですが、そのもとになる中国にしても、
また西洋との関係がなければ『般若心経』もできていなかった。
『般若心経』のものは『般若経』といって六百巻ある。
禅宗でよく「大般若」といって、繰るようにして経文を広げなさるのがあるでしょう。

広げても読めるわけじゃないけれど、あれは転読といって、一通り読んだという作法をしておられるのです。

私は真読しております。

『般若経』を読めば、ギリシャ語がよく出てきます。

わたくしはギリシャ語で学位を得たくらいですから、読むとすぐに気がつく。

このように仏教のなかに、西洋も影響している。

それからバイブルでも『旧約聖書』で一番光っているのは

「空の空」すなわち「一切は空である」という文章です。

これはヘブライ語で書いてある。

一切は空であるというのは、まるで禅宗の言葉みたいですがけれども『旧約聖書』にある。

古い（ふるい）約束ですね。

『新約聖書』は新しい約束です。こちらは実に読みやすいギリシャ語です。

67. P 180より続き

日本語訳だけを読んでバイブルが本当にわかるはずがない。

なぜかというと日本人は「隣人を愛せよ」といっても、愛するとはどういうことかわからぬでしょう。

プラトーン（BC427 ~ 347）は愛という言葉に、エロスというギリシャ語を使っている。

アリストテレース（BC384 ~ 322）は、フィロソフィのフィリア哲学ということばのもとになっている言葉を使っている。

ギリシャ語で書いてある「新約聖書」にはアガペーが使っています。

エロス、フィリア、アガペーとみんな違います。

どれでも日本語では愛です。

だから、もとの言葉を知らぬと、どういう愛か愛の中身がわからぬ。

わたくしはそういうものをいちいち原典で読んで問題にしている。

だから、どこが違うのかがわかる。

68. P 180より続き

『新約聖書』の中で一番光っている文章はどんなのがあるかということ、

「天国は汝らのうちにある」という言葉です。

「エントス ウモン」とギリシャ語でいう

(entos umon meaning “withinyou”).

エントスというのは、うちにという意味です。

みなさんの一人ひとりのこのころのうちに天国はあると書いてある。

それが一番光る言葉です。

それじゃ仏教と同じじゃないか。

みなさんの一人ひとりの中に仏さまがある。

仏さまの子供になれる。

さとれる仏性があること。

一番大事なことです。

だから仏教とキリスト教とは大違いのようであるけれども、肝心なところになるとつながっている。

それが仮（け）です。

69. P 180より続き

仮のところだけとってもわからない。

仮（かり）だから中身が空です。

空が仮（け）。

だから、どこまでが空、どこまで仮（け）といっても、もうひとつ中（ちゅう）というのがある。

「なか」と書いてあるから真ん中のような気がします。

だから、たいていの方がそのように受けとっていますが、そうじゃない。

「中」という言葉は、ギリシャでも使うし、仏教でも大事です。

龍樹菩薩（りゅうじゅぼさつ）というインド仏教でトップの方（Nagarjuna 150~250）があらわされた『中論』が仏教で一番大切は本です。

お釈迦さまのおっしゃる縁起とは空だと書いてある。

「中」というのは真ん中という意味じゃない。

どういう意味かというと「最高」ということです。

70. P 181より続き

ところが、西洋の大学で「中」を説くとき、

アリストテレースのいう「中」を両極端の真ん中くらいに考えて、アリストテレースともあろう方が、

まあいい加減なことを言ったということになっておった。
それが二千年以上たって、二十世紀の現代、
マリー・ルイス・コンフィティック女史が博士論文を書いたのを見ると、
最高という意味であるとなっている。
このところを世界ではじめて発見した。
アリストテレスの『ニコマコス倫理学』という大きな本で、
たった一か所使っている最高という意味が、はじめて見出されたのです。
それは博士論文として1923年に出版された。
アリストテレスの本は西洋のどの大学でも読まれている本なのに、
それまではだれにもわからなかった。
というように『般若心経』をみんな読んでいるのに誰にも本当のところはわからない。
昨日も言いましたが、「空こそ色なれ」ということを今までに言った方はない。
それがわからぬとおおかた駄目です。
「空こそ色なれ」みんな空なのです。
仮というのは色です。
だから、その二つは「中」といって、どこまでが仮といっていられない。
最高のものです。

71. P183より

信楽焼で有名な滋賀県の焼物の町のお寺さんへ戦争が終わって、
二、三年してからお話に行ったことがある。
若い住職さんなのによくお念仏なさる。わたくしもそのころは年寄りじゃなかった。(笑)
前の住職さんは、もう死んでしまわれて三十八年になるから、いまから三十五、六年前
のことです。
ちょうどわたくしの歳の半分近くでした。
それで、そのころ三十歳足らずの住職さんがよくお念仏されるので、そう申し上げると、
「いいえ、私は大学時代はひとつも念仏しなかった」と言われる。
お父さんが亡くなられたからこの若い住職さんがあとをつがれたけれども、
お父さんが亡くなるときに、お医者さんから亡くなられたと言われたものですから、
みなさんで最後のお別れをして、悲しんでいた。
ところが、あっ、お父さんが生きているち、だれかが気がついた。
それで、生きかえったお父さんが言われるに、
「長く世話になったから、知恩院の大殿で『阿弥陀経』をあげておつとめをしておった。
ところが寺の方がどうなっておるのか気になったものだから帰ってきてもたら
みんな悲しそうにしている。それでもどってきた」
と言われる。(笑)
そういう方もある。

72. P183より続き

ですからね、自分が知らないからといって、いい加減な判断をするもんじゃない。
知らないひとは、自分の程度で勝手なことを言う。
聞いておってもばからしくなって相手にもならぬから、そうですか、そうですか、
と言っておらぬことには、いちいち相手になっていると時間をとってしょうがない。(笑)
どなたがどう言われても、そうですかと言って相手にせぬことにしておく。(笑)
相手にする値打ちがない。
自分の知っておることだけで、いろいろ物事の判断はしにくいということだけは
考えないといけません。
それで、引導にしても知らないことがたくさんある。
だから、知っているひとからいろいろ教えてもらわないとわかりません。
それで引導という。
そうすると開通してくる。
開いて通じてきます。
道がつく。
知らないことでも知っているひとから聞けばわかります。

73. P188より

人間でも、松の木でも、本当にわかることはできません。
松というのはだれにもわかるように思いますが、わからぬ。
私は笠置を案内されたのですが、全山細い道がついていますから横道に入ると帰れませ
ん。
やはりえらい松だなあと思った。
この部屋（四十五畳）に入りきらぬくらいの大きな岩の上に松が繁っている。
全山そうです。ほかの草や花だとそんなことはできません。
松は根を大きな岩のずっと中へ、どうして伸ばしたのかと思えるほど実に深く入り込ん
でいる。
そうして風が吹いても耐えられるように力を入れて、
とうとうこんな（両手を広げて示される）大木になった。
だから、言葉を聞いたことがあるからわかっているような気がしますが、
それはわかっているうちに入らない。

わからぬということもわからない。

ですから、人間というのは、わからないことがわかれば、やっぱりわかっている（笑）サトレタということになる。

わたくしが昨日から話しているから、少しはサトレタでしょう（笑）

いやあ、そんなのは聞いたことがないということもありますから、聞いてみないとわかりはしません。（笑）

74. P 1 89 より

ほんの一角だけ松という名前を知っておって全部わかったような気になっているのは、仮にわかったといううちに入っておらぬ。

わからぬということもわからぬようになる。（笑）

だから何もならぬ生き方をたいていの人はしている。

それでは生きていうちに入らない。

せっかく大自然のいのちに護られて生きているのですから、我われは、もう少しまじめにやらなければなりません。

75. P 1 89 より続き

仏とは、人間が人間になるということです。

サトレタというのは、わからないことがわかってくるようになることです。

法とは松でも法です。南無阿弥陀仏も法です。

みんな目で見、耳で聞こえることですが、さとりますと、その法が生きてくる。

倍にも何倍にも自分に語りかけてくる、こちらも話しかけられるようになる。

そうすると、サトツタ人と相手、つまり松を相手にするとき、

あるいは自分の声を相手にするときも同じことです。

僧とは、つながりということです。みんなつながっている。

インドのもとの言葉でサンガ（samgha）といいますが、サンガは組合のような意味にも使います。

ひとが大勢集まってひとつのつながりを持つでしょう。

それで今、みなさんは、仏さまとわたくしとお寺ともつながっている。

唯物論者の中には、わけもわからないで仏さまを拝めるかというような気持ちを持っている方もおられますが、お気の毒です。

76. P190より続き

また、仏さまというときに、本堂におまつりしてあるお木像、それも仏さまですが、大自然のいのちそのものが阿弥陀さまであり、仏さまです。だから、目の前で拝める。僧といってもこういうわたくしのような姿をしておればソウですがね（笑）それもそうなんだけれども、すべてのものにつながり合っているということです。松一本にしても、松が勝手に生えているのとは違う。風に耐え、雨のおかげもあって、根が生えて、そして太陽にも照らされて大きくなるのですから、大自然のいのちそのものが松の成長につながる。ですから、仏・法・僧と、三つは三つですけれども、一つです。ひとつつながりです。それがわかるのは、自分がサトレタ者、覚者にならないといけません。しかし、サトレルと何でもわかったように思うけれども違う。わからないことばかりです。

77. P204より

「南無阿弥陀仏」のナムは、南無と書かずに支那の那を書くこともある。漢字はどう書いてもいい。ローマ字で書いてもいい。ナムとは、インドの原語で曲がるという意味です。屈曲です。まっすぐなものが曲がる。頭を下げるということです。何に頭を下げるかで人間の値打ちが決まる。何に頭を下げるかというと、阿弥陀さまに頭を下げる。それはまず、阿弥陀さまのおかげで生まれてきて、生きられているからです。亡くなっても、この世とお別れしても、阿弥陀さまのところより他に行くところはありません。阿弥陀さまの慈悲のふところの中でなければ、われわれは生きられないし、死ねない。その生死（しょうじ）、生きて死んでいく生死の原点、根本が阿弥陀さまです。だから、阿弥陀さまに頭を下げていく。阿弥陀さまに生かされて、手を合わせて毎日を送れば仏（ぶつ）、ほとけさまです。そういうひとをさとれたひとという。ナムアマミダブツはそういう意味です。

78. P204 より続き

それじゃその意味でいいんじゃないか、無理にナムアミダブツと言わなくてもいいんじゃないか、

そう理屈を言う方がいます。

また、たくさんナムアミダブツを言う必要がない、

死ぬときに一遍だけ言えばいいなどと言う人もいます。

それは理屈です。

みなさん、生きている間、損だ得だ、多いとか少ないとか言っておったら

阿弥陀の弥陀と同じで計算することです。

しかし、阿がつけば計算できないとなる。

計算するから迷う。

自分勝手になる。

そうするとせっかく子供を育てても親との間に争いが起こったり、別れることになるし、別れなくても何か悲惨な生き方を一生しなければいけないことになる。

簡単にいえば不幸です。

だから、夫婦でナムアミダブツと言ひ、親子でナムアミダブツと言う。

まあお隣から見ても、親子、夫婦そろっていつもご家族でお念仏なさるなあと言われる。

あのように生きられればこの上ないというように自然に受けとれてくる。

毎日大ゲンカしているのと大違いです。

そういうように近所の人びとでも心の影響を受けていく。

それを往生という。

みんながそこへ行くような心のことです。

南無阿弥陀仏とはそういう意味です。

79. P219 より

何ひとついのちのないものはない。

何もないと思っておられる土の塊ひとつ握ってみても何億という微生物が生きている。

それはいのちのかたまりです。

それだから花が咲くのであって、そういう土じゃないと咲かない。

焼き物でも、その土で焼いているからいのちの味わいがある。

世界中で日本ほど焼き物を好む民族はありません。

本当に日本は恵まれている。

どうしてそういう民族性ができたのか理由はいろいろあるでしょうが、本当にありがたいことです。

80. P219 より続き

それで衆生の中には、土も花も鳥もみんな入る。我われは無論のことです。
だから人間同士が殺し合うことはもうやめなければなりません。
今まではしなくてもいい戦争をやってきた。
日本だけです、徳川時代の三百年、戦争せずに済ましているのは。
あの時代に三百年間です。
それが明治になってから何回戦争をやりましたか。
お調子に乗って西洋のまねをし、勝手なことを言って、本当にろくでもないことをした。
徳川家康公（1542～1616）は、十八才から七十四才で亡くなるまで
一日も念仏を欠かさず生涯をおくられた。
日本がこの三百年間平和に暮らせたのは念仏のおかげです。
それを他のいらぬことばかりとりあげて、奥さんが多いだの子供が多いだのと、
それはまあ嘘じゃないのだけれど、そんなことどうでもいい。
家康公は本当に念仏をした。
家康公の値打ちはそれ以外にない。

81. P221 より続き

日本が廃れたのは、念仏が廃れたからです。
徳川時代三百年の間には、インドでさえイギリスの植民地になっている。
日本がお調子にのっていたらとうにやられています。
その証拠に、秀吉公が朝鮮征伐をするときに、九州の一角を鉄砲と取り替えている。
そうして、表向きはキリスト教を禁止してキリスト教をいじめたように言ってますが、
いじめる前に鉄砲を取っている。
歴史の表面では、自分のやっていることはみんな正しいとしている。
歴史の表面には本当のことが少なく、嘘が多い。
しかし、本当もうそもない。
家康公の値打ちは念仏をしたことだけです。
これが秀吉公か信長公だったらそんなことはしていないでしょう。
わたくしが考えていっておるのではない。
東京・芝の増上寺という東京で一番大きな寺には、空襲で焼けるところをまぬがれたものがある。

寺の縁起です。

お釈迦さまがさとられたことを縁起というけれども、寺の由来をずっと説明したのも縁起といいます。

それにはわたくしがいまお話したことが詳しく説明されています。

わたくしはそれを読んでいますからお話するのです。

82. P 2 2 3 より

悪いということはひとつもしないほうが善いにきまっている。

わかりきったことです。

ですから善いといえば、行じなければならぬにきまっている。

それが自然ということです。ただ、それをしないで横着しているだけです。

だから、教えたとか、教えないからという問題じゃない。

自然なら、悪いことはしない、善いことはするというのはあたりまえです。

学校に行こうが行くまいが、そうするのが自然です。

それを学校へ行った方がとんでもないことをする。(笑)

そうすると、もう学校の値打ちがない。その責任は教授にある。

教える方が手本を示せばそういうことはありえません。

自分は口先だけで言っておいて、やることは反対で自分勝手にやっておる。

それがいけない。

自分で言うことを自分自身が信じていない。

ちょうどお説教を上手にしても、

そのお寺さんが手本にできるとは限らない方もなかにはおりますから。(笑)

口先だけじゃなにもならない。これはあたりまえのことです。

83. P 2 2 3 より続き

それじゃ、どうしたらあたりまえのことが自然にできるかといえば、

きのう最初にお話した自浄其意（じじょうごい）、つまり、自分のところを浄める、それ以外にありません。

ところにたまったへドロに穴を開けることしかない。

そうすれば、自然のいのちのひかりが照らしてくれる。

だから、花を見ていても、鳥の声を聞いていても自然のいのちに感応できはじめる。

その楽しみは、いのちの楽しみですから、普通の楽しみとは比較にならないものがある。

本当にこのころのそこまで感じて、うれし涙がおさえられないような、

おかげをさとるころの深まりが感じられてくる。
おかげをさとるころの深まりが感じられるその中で、
自分ができるだけ仕事を喜んで力いっぱいさせていただく、
そのころさえ決まったらいい。
たとえお礼が少なかっていい。(笑)
お礼だけ考えれば、だれでも多い方に行きます。
しかし、少ないからといっていいかげんに、というようなことでは、みんなが困ります。
それはマイナスです。

84. P232 より

「貪(とん)」とは貪欲(とんよく)のこと、むさぼりです、
「瞋(しん)」とは瞋恚(しんに)、腹をたてること、
「痴(ち)」は愚痴(ぐち)のことでありまして、
昔からこれらを「貪瞋痴(とんじんち)」と簡単にっております。
西洋では、この貪欲にあたる言葉は意思といいます。
瞋恚というのは感情、
また愚痴といわずに知識といいます。
これを簡単にいうときは、「知情意」ですが中身は同じことです。
取り組み方が違う。
西洋の考え方は人間中心です。
ごくざっとするとギリシャ以来、今日までずっとそうです。

85. P232 より続き

しかし、東洋の文化は人間を無視しているかというところじゃない。
なかにはそういうふうにとる方がありますが、それは取り違いです。
つまり、「自然」です。これは「ジネン」と読みます。
「シゼン」と読まないことはないけれども、仏教では自然をいつでも「ジネン」と読みます。
中身は同じです。
けれども、どちらかというところ、「シゼン」と読むときには、自然の外側をいうとき、
自然科学というようなときには、全くそうとしかいいようがないほどです。
ですから、「ジネン」とは、外側も内側も離れずに通じていることを意味している。
それを「一如(いちによ)」といいます。
また、「内外」と書いて、「ナイゲ」と読みます。

それを一如に考える。

86. P 2 3 3より続き

「如」というのは、如来さまの如、そのとおりのことです。
そのとおりは、本当は内も外もないことをいいます。
外側だけを見ているのは一方的で、内側から離れていてはなんにもなりません。
いま、わたくしが話すこと、これが声になったり、字に書けば手が動きますけれども、
みんな、わたくしのところでこういう声を出している。
声だけが勝手に飛び出しているわけでも、手が勝手に動いているのでもない。
また、字を書くにしても自分のところで書くように、やっぱり本当はころひとつで決まってくる。
内側というところ、外側とは物のことです。
唯物論も悪いことはないですけども、外側の方を主に考える。
ひとだって、見かけの器量さえ良ければいいと考える方もあります。
器量がよければよいほどいいのですけれども、外側だけよければいいという方はいませんでしょう。
ところが、ころというのはいくら簡単に取り組みませんから、外側で間に合わせをする。
そうすると、自然科学のように、進歩しているようですが、ひとつも進化ができていない。
進歩すればするほどわるいことがたくさん出てくる。
今日は、科学が進歩して、コンピューターなどで昔はなかなかわからなかったことがわかってきましたが、それだけ被害も大きい。
自然を破壊するようなことになったらおおごとです。
いずれ取り返しがつかないことになる。

87. P 2 3 3より続き

**原子力の研究でも、廃棄物の処理に困ることになる。捨てる場所がない。
だから、外側の見かけだけの進歩はいくら進んでも、それによって内側が破壊される。
それを公害というのですが、公だけじゃない、一人ひとりまでおしまいになっていきます。
教育でもそうです。
昔は考えられなかったようなことをみんなしている。
ですからどうしても内と外を一緒に考えないと本当に取り返しのつかないことになりま
す。**

88. P 2 3 4 より続き

そういう立場で取り組まないと、「知情意」というような、人間中心の考え方だけでは駄目になる。

人間の知識とか意思という人間中心の考え方から、

大自然中心へと考え方を転じなければならない。

自然の外側なら、人間の知恵である程度わかったような気がします、

本当は少しもわかっていません。

内側がわからなくて外側がわかるはずがない。

わかったような気がするだけですから智慧じゃない。それは愚痴です。

だから、感情といっても、自分の気に障るとすぐ怒ったり、怒鳴ったりして顔色を変える。

またそれで威張っている。

その程度のことです。

それで、貪欲といっても、ハイカラに言えばまあ意思ですが、つまり欲のことです。

思ったようになるほど人間は欲を出す。

欲というのは、おかしいでしょう。

お金が貯まればたまるほど欲しがり、地位でも得られるとさらにその上へときりが無い。

それで次は思うようにならないとどうするか、むかっばらをたてて怒る。

思うようになって、ならなくても承知しない。

それじゃいけません。

89. P 2 3 4 より続き

人間のために自然界があるわけじゃない。

やっぱり鳥も飛んだり、花も咲いたり、小さな虫にいたるまでみんないないと生きられない。人間の邪魔になるものは、虫が捕ってくれたりします。

ときにはヘビに咬まれたりしますが、それはこちらの注意が足りないだけで、

そういうヘビもいないと我われ人間が生きられない関係にある。

みんなが幸せに生きられるようになっているのだから、力を合わせていけば、

本当にこれほど楽しい世界はないと思います。

90. P 2 3 6 より

今の日本のような国は世界にない。

水を一杯飲むにも、日本ならどんな山に登っても湧き水を飲んで害はない。

同じ自然といっても、他の国ぐにの自然とは、それぞれ味わいが違う。
月を見るのに、出る月は同じでも国によって違うでしょう。
わたくしはしばらくフランスのパリで勉強しておったときがありますが、
わたくしが月を見て感じることに、フランス人が同じ月を見て感じることは違う。
彼らは、私たちが月を見て感じることはひとつも感じていない。
月ひとつ眺めてもこころの感じ方が違う。

91. P236より続き

日本でも人間はたくさんいますから、やっぱり人それぞれ感じ方が違います。
子供と早く別れたり、主人を災難に遭ったりした方がお月さんを眺めるのと、
一切そういうことがなく、幸せでいうことのない方が眺めなさるときとは、
同じ日本人でも感じ方が違います。
月を見て涙が出る方があります。
同じように涙が出るかという出せない方、出ない方もあります。
その一人ひとりのこころを、みなさんも自分でサトッテいていただきたいものです。
ひとはどうでもいい、じぶんだけよければいいというこころがある限りはだめです。
それでは人間の値打ちはない。
かえってそんな方はいないほうがいいくらいです。
やはり、あの方をお手本にしてみたいとか、お話してみたい、聞いてみたいとか、
お互いが頭の下がる関係に生きていけば、この世の中、何倍も何十倍も違ってきます。

お金をいくらたくさんもっていてもできないような生き方が、できていくようになるので
す。

お金は大事ですけれども人間の幸せはお金じゃ決められない。
こころで決められるものを我われはさとしていかなければならない。
そうするとお金のほうも値打ちができてくる。

92. P239より

わたくしは昭和九年（1934）に、目を患いまして、医師から治らないだろうといわれてお
りました。けれども、時がたつにつれ治ってきました。

これは、お医者さまにお薬を出していただいたこともありますが、それだけじゃない。
お医者さまは丁寧に治療してくださったけれども、
結局、わたくしが南無阿弥陀仏ナムアマダブツといって

視力を失ったことを全く苦しなくなったからです。
いのちの親である阿弥陀さまに任せきった。
そうするとところが安らぐのです。

93. P 2 4 1 より

病気が治るために念仏をするわけじゃないけれども、
こころの安静が病気をしたときに一番大事なのです。
お医者さまのせつかくの手術も、こころの安静がないと効果がなくなることになる。
そうするとお医者さまに申し訳ないじゃないですか。
こんなことを話しておったらきりがなくらいです。
結局、一番大事なことは、じぶんのこころが余計な四苦八苦をしないことです。
こころが動揺すると、それがみんな身体に影響してくる。
一番大事な薬はナムアマダブツです。
だから、新興宗教も何もない。
わたくしは何百とある新興宗教をみんな知っていますが、
いま、お話している南無阿弥陀仏には比べようありません。
ところが、南無阿弥陀仏のお話を、人間はどうせ凡人だから悪いこともする、
それを助けてくださるのが阿弥陀さまのお慈悲だからといって、悪いことを平気でする
ひとがある。そういう受けとり方もあるから一概にはいえませんが、
そのように受け取るのは自分勝手というものです。

94. P 2 4 7 より

この世とお別れしても阿弥陀さまと一緒にであるというこの根本は変わりはない。
死ねばおしまいだと思っている方もありますが、それはその方の程度です。
自然の外側だけしか見ていないからそう考えるのです。
内側から見ると、みんな阿弥陀さまです。内というのは、生かされているおかげのこと
です。
おかげのほうから見ると、阿弥陀さまでないものはひとつもありません。
そうすると、「仏法僧」の三宝はいのちの根本ですから、
三宝を誇る（そしる）ことは、自分自身を自ら誇る（そしる）ことになる。
これを『十善戒経』では、不邪見戒（ふじゃけんかい）といいます。
仏も神もあったもんじゃないというような邪（よこしま）なものを見かたや考えはいけ
ないという意味です。
仏とはサトレルこころです。
みんなが仏になれるのに、人間は自分勝手をしているから迷うだけのことです。

他人のことを誇る（そしる）ような人は嫌われますし、争いのもとです。

いわんや今日、戦争が始まったらおしまいですから、誇ることだけは絶対にしてはいけない。

どうかみなさん、ナムアミダブツで世界一の人間の生き方ができるのですから、自分のいのちを大事にして、世の中のためになるような生き方をぜひしていただきたい。

2. P 2 5 1 より

みんな人間として生まれてきて、我われは今、進化の最高の極致に立っている。

もうこれから何千年たっても、これ以上進化しようがない。

人間以上のものは出ません。

天人といっても人間ですし、菩薩、仏も人間です。

サトレタ人のことを仏というだけのことであって、人間には違いない。

さとれなければ人間といっても名前や形だけのことであって、

こころは動物と大差ない、ということになる。

それでは進化した値打ちがない。

何のために太陽が照っているのか、地球が回っているのか。

自分勝手に、自分さえよければいいということで、

つまらぬけんかをさせるために地球が回っているわけじゃありません。

物好きで地球が何億年も回っているのじゃない。

回ってくれなければ、地球上の生きものの進化はありえなかったのです。

自分勝手なけんかを動物の延長線上で続けるために太陽が照らしておるのじゃない。

そんなことを考えているのは人間じゃない、人間の値打ちはない。

96. P 2 5 2 より続き

自分が社長になるために他人を騙したり、賄賂をもらうためにごまかしたり、

入学試験までお金で自分勝手する方がいる。そんなことのために地球が回っているのじゃない。

木が繁ってくれるので、木が出してくれる酸素を吸って我われは生きていける。

海の藻が酸素を出して、我われが生きる上で大切な役割をはたしてくれている。

それなのに自分勝手に、他人はどうでもいいとか、

思うようにならないときにはボタンを押して原子爆弾や水素爆弾で殺してやると考えた
り、その用意ばかりしているのは人間じゃない。

ここまで人間は進化させてもらって、学問も進んできたのだから、

戦争は一切しない、できないと腹に決めたらどうですか。

もう決めなければならないときにきています。
そして、お金のある方はない方に、知恵のある方はない方を助け、
元気な人は病弱は方に手を貸してあげるというように、
みんなが助け合っていけば、いうことはない。

97. P 252より続き

今日の世界各国の軍備費の半分を、未開発国の人たちを助けるということに使うならば、
餓死するひとはいない。

みんなが楽しく生きられるのは何でもないことじゃないですか。

自分さえ威張っていらればいいという生き方をするのは人間ではない証拠です。

他人はどうでもいいではすまないけれども、どうしようもないから、

まず、自分からお釈迦さまを手本にして生きていくのです。

手本にする方はたくさんあります。授戒会（じゅかいえ）は、

中国の妙楽大師（みょうらくたいし）の『十二門戒儀』（じゅうにもんかいぎ）を手本
にして あらましをお話させていただくのですが、法然上人や聖岡（しょうがい）上人の
お書きになったものを参考にして、そしてナムアマダブツで一生懸命お話させていただ
いているわけです。しかし、ただ授戒会という行事をしたから、それで終わりというこ
とではありません。授戒によって、みんなが幸せになり、世界もそれで平和への道が決
まる という方向に向かっていくことができれば、わたくしは生きがいがあると思います。
それを広い願い、広願といいます。

98. P 253より続き

授戒で開けたところは、どういう方向に進むのか。

「法界（ほっかい）の一切衆生（しゅじょう）に回施（えせ）し」回って施すのです。

法界とは大宇宙、自然界です。

「この法界の、いまだ苦を離れざるものには、願わくば苦を離れしめ、

いまだ樂を得ざるものには、願わくば樂を得せしめ、

いまだ菩提心を起こさざるものには、願わくば菩提心を起こさしめ、

いまだ断悪修善（だんあくしゅうぜん）一悪を断って善を修める一せざるものには、
願わくば断悪修善せしめ、

いまだ法界を知らざるものには、願わくば仏法を知らしめ、

いまだ利生（りしょう）せざるものには、願わくば早く利生せしめん」。

利生とは、先ほども説明いたしました利益衆生のことです。

大勢の人びとのためになることをすることですから、一人が得をすればいいということ
じゃない。

99. P 254より

自行化他（じぎょうけた）といって、自分が行していく。
損得を離れて、自分ができることを力いっぱい尽していく。
そうすると他人もそのような気持ちになっていくから、人さまをも化していく。
教化（きょうけ）ができるようになる。
なにも偉そうに教えるのじゃない。自然にそうなるのです。
わたくしがこんなに一生懸命になっているから、以前に大学で教えた学生のなかには、
社会に出て損得を考えずに自分の仕事に没頭している者がたくさんいます。
数えたらきりが無い。
それで、世の中は沈没せずに済んでいる。
今、新聞に出ているような方ばかりだったら、とっくに日本はつぶれています。
つぶれないのは、新聞に出ないような方たちが一生懸命尽くされているからです。

100. P 255より続き

わたくしはこの歳になってさえ一生懸命にそれを訴えておる。
歳からいえば老人ホームに行っておってもいい。（笑）
おかしいことはない。
八十何歳の方はいくらでもいます。
それをこうやっておるのですから、少しは聞いてもらおう（笑）
なにも物好きで言ってるのじゃないですよ、本当に（笑）それが広願（こうがん）です。
我われはもっと広い願いを持たなければなりません。
狭苦しい自分勝手な願いのために、この地球が回っているのじゃない。
大宇宙はみんながつながりあって地球を回している。
そんななかで、お釈迦さまのような方が出てこられるのを待って、地球は回っている。
ですから、我われもお釈迦さまを手本として生きていかなければ相済まない。

101. P 255～257より

今この本堂にあるあの六曲半双の屏風にわたくしが書きました
善導大師の『六時礼賛』の一句も簡単にいったら広願です。
哀愍覆護我（あいみんふごが） 令法種増長（りょうぼうしゅぞうじょう）

此世及後生（しせぎゅうごしょう） 願佛常懽受（がんぶつじょうしょうじゅ）
願共諸衆生（がんでしよしゅじょう）往生安樂國（おうじょうあんらくこく）
あんなに大きく書いてあるのだから、みんな読めそうなものだけど（笑）
大きく書いたからといって読めない。（笑）
不思議ですね（笑）

102. P 255～257より続き

まず最初に、「哀愍覆護我（あいみんふごが）」と書いてある。
自分がさとらなければはじまらないので、自分が目先の損得で自分勝手にしないように
護ってください、とたのんでいる。
誰にか、阿弥陀さまにです。
それにはどうしたらいいか、「令法種増長（りょうぼうしゅぞうじょう）」です。
法の種、つまり南無阿弥陀仏ナムアミダブツの種をみなさんのところにまかなければ、
こころの花が開いても実は結ばない。まかない種は芽が出ない。
こころがヘドロでおおわれて右へも左へもいかないから、
わけのわからないことを自分勝手にしだす。
それをやめて、ナムアミダブツと、阿弥陀さまの智慧や慈悲の種をこころにまいていく。
法種をして増長せしめる。増長というのは、だんだんに広まって長続きをしていくこと
です。
難行苦行して十年もかかるのではない。
ナムアミダブツで一発です。
ナムアミダブツで阿弥陀さまと一緒にやらせてもらおう。
そうすると、こころにたまったヘドロに穴があいて、
いのちの根源である阿弥陀さまの智慧や慈悲の光に照らされる。
だから、わたくしは昨夜もお話しましたように、泥水の中から白い蓮華の花が咲くのと同様に、
ヘドロの中からサトりの花が開いてくる。
それは死んでからじゃない。

103. P 255～257より続き

「此世及後生（しせぎゅうごしょう）」、
後生大事というようにこの世は無論、後の世にもつながって永遠に、
今から極楽に往生していくのです。

「願佛常懽受（がんぶつじょうしょうじゅ）」

願わくば仏、常に摂受（しょうじゅ）したまえ、です。

仏とは阿弥陀さまです。いのちの親さまです。常にであって、死んでからじゃない。

今日から、朝も昼も夜中でも、常に摂受（しょうじゅ）したまえ、です。

つまり阿弥陀さまの慈悲の懷の中で、一緒に日暮らしをさせてください、と願うのです。

しかし、自分ひとりそうならばいいのかというとそうじゃない。

「願共諸衆生（がんでしよしゅじょう）往生安樂國（おうじょうあんらくこく）」

です。願わくば、もろもろの衆生とともに、みんなと一緒に安樂國に往生せん、です。

往生とは死ぬことじゃない。

安樂國とは極樂のことです。

彼岸というのと同じように、極樂のことを安樂國といいます。

もとのインドの言葉では、スクハーヴァティー（sukhavati）といって、

はじめは安樂と訳していたのを『阿弥陀經』から極樂と訳し出しました。

阿弥陀さまに一切をまかせているのだから、こっちが四苦八苦しなくていい。

安樂です。つまり彼岸の生活、阿弥陀さまと一緒に生活させてくださいということです。

104. P258より

これから世界平和というと、空を生きるしかない。

空とはおかげという意味です。私どもの心臓は、自分でまわしているのじゃない。

寝ていても回っていてくれる。

この生きられるおかげがわからなければ、世界は平和にならないでしょう。

大切ないのちをみんなで守って大事にしていこう、みんなが助け合って生きていこう、というのが空を生きることです。

けんかや争いばかりしては何のために生きているのかわかりません。

それで願わくば、できることなら、もろもろの衆生とともに、みんなと一緒に、力を合わせるのです。

それを安樂國ともいって極樂のことですから、

そこで本当にサトリの花を咲かせていきましょう、ということです。

105. P267より

この一月にわたくしの寺で御忌法会（ぎよきほうえ）を執行したとき、大変喜んで話を聞いて、これからわたくしの話をテープにとらせて欲しいと言っていた檀家の方が、その翌日急死されました。

これはほんの一例です。

いつまでも生きられるのか本当にわからぬ。

わからないままに、人間は損とか得とか、自分勝手な事を言ったりして、何もならない一生を送っている。

106. P 267より続き

先日、アメリカのレーガン大統領が日本にこられた時に、中曽根総理がさし上げなされたおみやげの一つに、わたくしが染筆もして焼いた茶碗があります。

そのことを雑誌の記事にしたいからと取材を申し込んできた方がありました。

断った。

そうでなくても忙しいのに、そんな雑事に煩わされるのはかなわん。

わたくしはいつまで生きられるかわからない。

しておかないといけない仕事は山ほどあるのだから、そんなことで邪魔されるのがかなわん。そうすることが、わたくしの生活にプラスになると思ってくださるのかもしれませんが、関係ない。ナムアミダブツの清らかな永遠の幸せにくらべたら、自分の焼いた茶碗が、アメリカの大統領のみやげになったことなど問題するにあたらぬ。

念仏をする方にもそれがわかっていない方が多い。

それではせっかくの念仏がもったいない。

「ナムアミダブツ」と念仏を称えるときは、地位や名誉のある方もみなさんも平等なのです。

「平等」という言葉は西洋にはないので、「同じ」イコール (equal) という言葉を「平等」と訳した。

フランス革命 (1789 ~ 99) の人権宣言の第一条に

「人は生まれながら自由で平等な権利をもつ」とあり、その時「同じ」と「平等」を混同してしまった。

これが根本的なまちがいです。

今日、社会が乱れているのも、家庭が荒れているのも、すべてここに原因がある。

107. P 268より続き

平等とは、ナムアミダブツと、みなさんの心が阿弥陀さまの智慧と慈悲により、自然の命の根源と一つに収まったことです。

天皇がそうなられても、みなさんがそうなられても平等です。

王さまも、お金持ちも、私たちも、心の上では平等に最高の生活ができる。

今日、平等ほど大事なことはない。

自然界は平等です。

大木でも、小さな苗木でも、自分に必要なだけ夜露は浴びられる。

どんな大木でも枯れるときがあり、小さな木でもより永く命を保つことができます。

みなさんが一回呼吸するのも、大金持ちが一回呼吸するのも同じで、

貧乏だからお金持ちの半分しか空気を吸ったらいかぬということはない。

外側のみかけでは、お金持ちになったり総理大臣になったら素敵です。

しかし、内はちがう。外側がいくらすばらしくても、内側がぼろぼろでは何もならない。

外だけに気を取られている生き方は、いくらお金持ちになっても、出世できても、

それだけで人間としての値打ちがあるわけじゃない。

108. P 270より

「水の滴り微なりと雖（いえど）も、ようやく大器に盈（み）つ」

水が一滴したたるといのは、それだけのものなのか。

ナムアミダブツと一度いうのは、本当にとり立てて言うほどのことがないと思うが、

それは外から思うからであって、内は最高に平等です。

一遍いうても百篇言っても。

一生涯ずっといっても、死ぬときだけいっても平等です。

それじゃ死ぬ時だけでいいんじゃないかということになるが、それは外から言うことです。外から言うと、そういう計算ができるが、内から言えば、死ぬ時に一遍だけ言っても平等なら、そんなに値打ちのあるものなら寝ても醒めても二十四時間いわずにおられないということになる。わたくしはそうなってから六十年です。

字を書いている時も、ナムアミダブツと称えているからこのような字が書けるのです。

これはわたくしが書いたのではない、阿弥陀さまがお書き下さったのです。だから、いいのです。

109. P 270より続き

阿弥陀さまの平等の慈悲というでしょう。

慈と悲をわけていえば、抜苦与楽ということになる。

これはインド第一の学者である龍樹菩薩（150 ~ 250）が『大智度論（だいちどろん）』の中でいっております。

「摩訶般若波羅蜜多」という大きな智慧で彼岸に至ったということです。

大きな智慧というのは、サトリの智慧であって内をサトルことです。

「至った」とは彼岸へ渡ったということで、そこは平等で最高ののだから、みんな外をウロウロしないで内へ入ったらいい。

文化が進み、科学技術が発達して宇宙時代になったといっても、それは外側だけのことであり、機械は進んでも人間は進んでいない。機会の僕（しもべ）になってしまっている。

機会に振り回されているから、やり方が機械的になってしまい、子供が親を殺したり、関係のない方を巻き添えにするようなこともやる。ノーベル賞をもらうような方が世の中をまぜ返す。

そんな方がたを教科書でほめたりするから、子供が機械的になる。

110. P 271 より続き

世の中が進んだといっても、弘法大師（774 ~ 835）のような字が書ける方はいません。弘法大使は、内側はみんな最高だということを押さえたからあのような字がお書きになれた。

字は自分の命の形が現われたものですから、機械的な人間に字が書けるはずがない。

大師の字を見ているだけで即身成仏ができるといいます。

死んでから仏になるのではなく、今、そのまま仏になる。

仏とはサトルことです。サトルということは外側がない。

外には計算しかない。内には無だけで、無というのは、上下がない平等ということです。だから最高である。

男子が上で、女子が下ということもない。

女子がおられなければ、お釈迦さまも法然上人もお生まれになれなかったのですから。

111. P 272 より続き

外側だけで生きていると、どうしても抜苦与楽できない。

四苦八苦しなればいけなくなる。

四苦八苦してお金を儲けても、出世しても何にもならない。

四苦八苦しな、極楽の楽しみに生きていくこと、それが平等の慈悲です。

阿弥陀さまとは、どういう方かといえ、平等の慈悲に決まっています。

これは法然上人がお決めになった。

112. P272より続き

『般若心経』は六百巻ある『大般若波羅蜜多経』の中から、
心臓にあたる部分を取り出したのです。
サンスクリットの「般若心経」原本では、
無色無受無想無識といって、色、受、想、行、識がすべて無だという。
無眼界、無意識界、無無明・・・とみな無だといっています。
無とは、平等のことです。
外ではなく、内のことです。
内の平等に立たないと対立する。
外を考えるから、自分は貧乏だとか、下っ端だからとか、
歳を取ってるからとかいうことになってしまう。
例えば、走りっこした場合、若い人の方が速いが、
それは外からみて走るのが速いということであって、内をみるとさっぱりです。
若い人に、わたくしのようなことはできない。
内をみると、貧乏でも、年寄りでも最高を生きることができる。それが極楽です。
彼岸とは、それをいう。

113. P273より

「彼岸に至った」というが、死んでから往くとはっていない。
死んでから極楽へ往くというのは仏教ではない。
法然上人（1133～1212）は、
主著『選択本願念仏集（せんちやくほんがねんぶつしゅう）』の第十六章で、
「速やかに生死（しょうじ）を離れんと欲（おも）わば」と言っておられる。
「はなれる」というのは、無と同じことで、外の計算から離れるということです。
多い、少ない、損だ、得だということから離れる。
外だけに気をとられて、計算して生きているのを迷いといいます。
損得がないということではありません。
わたくしでも十万円と百万円と、どちらでも取りなさいといわれれば、百万円をとりま
すよ。外だけを考えると多い方がいいのですけれども、人生は外だけではない。
内ではどなたでも、老若男女、地位、身分を問わず、最高に生きることができる。
外も立派であり、内にも価値があると、鬼に金棒です。
その鬼に金棒の生活が、きょうからみなさんはできる。

ナムアミダブツとって、阿弥陀さまといっしょになることによって、そうなる。
今、ナムアミダブツとすぐ言えますね。一息でいえます。

114. P274より

お釈迦さま（BC466～386）がお生まれになる前のインドの文化は世界の最高峰だった。
そういうところへお生まれになったお釈迦さまは、六年かかってサトリをお開きになられた。インドの世界最高の文化に、お釈迦さまがまとめをつけられた。

それを縁起といいます、それがナムアミダブツと一息でいえる言葉になった。

お釈迦さまがお亡くなりになって百年あまり後、アショカ王（在位 BC271～232）が、
仏教でもって政治をなさったので、一時的に仏教は栄えたが、王が亡くなると衰退してしまっただ。 仏教の政治的な力はなくなったが、仏教そのものは大切だからと学者が
まとめました。それが『摩訶般若波羅密多心経』であり、『浄土三部経』です。

その後、仏教は中国に伝わり、善導大使（613～681）がお釈迦さまの教えを広められま
した。出世してもしなくても、若くして死んでも、命を永らえても、

最高の楽しみを毎日生きていける人間になれるという手本を示された。

善導大師のお寺を光明寺といいます、大師はそこに大仏さまを建立なさった。

その大仏をお手本にして、日本でも東大寺に大仏さまを建立した。聖武天皇のときです。

115. P279より

唐の百丈禪師（ひやくじょうぜんじ）（720～814）が、

『百丈清規（ひやくじょうしんぎ）』という本をお書きになりました。

禪宗で座禪をするときの規則を書いた本ですが、

「魚は昼夜、常に醒む（さむ）、木を刻して形を象り（かたちどり）、
これを打つは昏惰（こんだ）を戒める（いましめる）所為（ゆえん）なり」
と申しておられます。

魚はいつでもパッチリ目を開いている。居眠りしない。

人間も一服してはいけない。

ナムアミダブツを一服すると身体中の血がにごる。

「常に醒む」人は、相手がけんかをしかけてきたからといってやり返すのではない。

「コン畜生」と思ったら、何万円何千万円の損かわかりません。

「コン」ナムアミダブツと、こころを転換する。

116. P280より続き

インドの龍樹菩薩の『大智度論』には貪・瞋・痴（どん・じん・ち）の三つが悪いと書いてある。すなわち欲を出すこと、腹を立てること、愚痴をこぼすことが悪いというのです。

欲を出すと、半分しかものになりません。

信用されると、こちらから何も要求しないでも必要なものは集まってくる。

わたくしは頼まなくても、いろいろして下さる方が、全国に何人おられるかわかりません。そんな欲のないことを言っていたら、世の中は生きていけないという方がいるが、欲を出すと半分か、三分の一しかものになりません。

欲を出さなかったら、腹を立てることもないから健康です。

だから仕事ができ、他人も信用して下さいます。

魚でさえ、つねに醒めているのだから、人間たる者、損得ぐらいのことで、けんかをしてはいけません。損だ、得だというのは、外だけを考えるからで、外では十万円取るより、百万円取った方がよいが、内に入ると逆になります。

百万円取ったばかりに、あいつは欲の深い奴だと他人が信用しなくなる。

自分勝手をすれば、その時は得でもあとで損になる。

腹を立てると、他人が損をしてもかまわないという気持ちになる。

そうすると、癌になったり、事故を起こしたり、しくじったりします。

どんな時でも腹を立ててはいけません。「コン畜生」と言いたくなったら、「ナムアミダブツ」と申すのです。

117. P288より

わたくしは、西洋人が、自分をどう考えているかということを哲学的に解くために、東大に哲学科に入り、カント（1724～1804）の研究をしました。

『カント及びドイツ哲学における認識主観の意義』というのが卒業論文で、博士論文には、古代末期のプロテーノス（204～270）をとり上げました。

わたくしとみなさんではちがうでしょう。脈の打ち方も一人ひとり異なる。

しかしどんな脈を打つ人でも、一つの太陽のもとに、

同じ空気を吸って、生きられる命の根源は一つです。

そこを考えたのが、プロテーノスです。

彼はその命の根源を「一者（ト・ヘン）」と言った。

わたくしは、仏教では阿弥陀さまというのを、

なぜギリシャでは一者（to hen）ということかを問題にした。

阿弥陀さまと一者はどこでつながっているのか、どこで見方が分かれるのかということをおさえられれば、同じところでは手が握れます。

ただ西洋人の真似をするだけでなく、
西洋人のいいところとは手を取りあっていかなければならない。
西洋のことを何も学ぼうとせず、ただ仏教がいいといっても片手落ちで、
仏教と西洋の根本がどこでつながるのかをはっきりさせる必要があります。

118. P289 より続き

西洋でも、一者とは一番大切なことであり、
プロテーノスは私たちの生きられる命の根源はひとつということをおさえている。
プロテーノスはプラトーン学派といわれていますが、
プラトーン（BC 427～347）が最後に書いた本は『ノモイ』という本です。
法律と訳されていますが法則のことです。
法律とか法則は一人ひとり別のものではなく共通したものです。
西洋は共通しているところをとらえるのが上手だから科学が進歩する。
これに対して東洋では、先ほど読み上げましたように「別相には無限の戒あり」と、
一人ひとりちがうことをおさえていく。

119. P 291 より

お釈迦さまがお生まれになったのは、インド大陸の北、
今はネパールの一部になっている小さな国です。
お釈迦さまがその国の王さまになっておられると、生きていた五十年くらいはあがめられても、やがて忘れられてしまいます。
お釈迦さまは王さまにならず、乞食坊さんになって修行を積みサトリを開かれたので、
今でも私たちの中で生きておられます。
このように損得は、一部だけをつまみだして考えるとそのときは得のようだが、
後でかえって損になってしまう。
それには損得をいわないことです。
心臓が働いてくれて、必要なだけ空気が吸えて、生きられるおかげに頭を下げることで
す。それがナムアマダブツです。
それさえ決まると、後は損得を考えなくても自然に一番得なようになってくる。
お釈迦さまは乞食坊さんになられたが、中身が一番得でしょう。
小さい国の王さまになっておられたら、今は名前さえ残っていないでしょう。

120. P 291より続き

法然上人は十八歳の時に、日本一の学者の地位を約束されたが、

自分は出世のために出家したのではないとお断りになられた。

自分が阿弥陀さまのおかげで生きられるということをお願いと思われたのです。

彼岸というのは、お金がいくらあっても無くても、男子でも女子でも、青年でも老人でも、だれでも物にかきまわされるのではなく、心の上で世界一だと思えることです。

みかけは誰よりも幸せそうな方でも、「自分ほど不幸な者はない」と泣いている場合があります。どんなに学問があっても早く死んでしまう方もあります。

生きていられるということありがたい。

目が見える、手が動いて字が書ける、掃除ができる、炊事ができることは、もったいないと思ったらいい。

百億円だしても目と手を買うことはできない。

わたくしの命は五億円や十億円でできるものじゃないからわたくしはお金に頭を下げることがない。何に頭を下げるのかということで人間が決まってきます。

わたくしはナムアマダブツと阿弥陀さまだけに頭を下げます。

仏とは、わかったとかサトツタということで、計算ができないとわかった、自分が何億円どころではないとわかったということです。

121. P 292より続き

今、物が豊かになっていますが、家庭も学校も荒れています。

どうしたらよくなるかといえば、日本人の心に還るしかない。

明治になって西洋文化が流れ込んで、本来の心が弾圧され、

すべて西洋のものをよしとする風潮になってしまった。

科学は進み、物は豊かになったが、人の心が荒れはててしまったのでは何にもならない。

本来の日本人の心に還るにはナムアマダブツしかありません。

とにかく一息でいえることばは、世界中にナムアマダブツしかない。

この世に別れるときも、最後の息はナムアマダブツです。

これで極楽へ往けます。ナムアマダブツと心を開いてさえいれば、阿弥陀さまのような心になれる。

阿弥陀さまは命の根源だから永遠です。

122. P 293より

日本はどんなことがあっても戦争をしてはいけない。

でも、それを他人（ひと）に言っても駄目です。

けんかになってしまいます。

自分が南無阿弥陀仏と阿弥陀さまになる以外、方法はない。

十年も主人や姑さんにいじめられてきたのに、自分がナムアミダブツと申すようになると、主人や姑さんの方から詫びてこられ、今、極楽のような生活を送っている婦人がおられます。こんな例は他にも多くある。

わたくしの影響を受けた方が、またその周りに輪を広げていってください。

今日、ここにおいでのみなさんが、損だ得だでけんかしないで、

ナムアミダブツでいこうと覚悟を決めてくだされば日本は大丈夫です。

これだけ大勢の方が周囲に影響を与えてくださったら、もう心配ない。

123. P 293より続き

彼岸というのは春と秋の二回、お寺にお詣りにくることだけではありません。

他人はともかく自分は極楽の心で、世の中の役に立たせてもらおうと

決心した通りにいきていくことです。

それはナムアミダブツという杖さえつければできるのだから、ついたらどうですか。

一人ひとりが極楽の生活、彼岸の生活をするようになってくださればいうことはありません。一人がそうなるということは、その方のまわりの十人がそうなることです。

みなさん、とにかくナムアミダブツしかない。

損だ、得だ、コン畜生といたいところを、すべてナムアミダブツと他は相手にせず、頭を下げるのは命の根源である阿弥陀さまだけです。

そうすれば自分の仕事、自分の持ち分だけは、満点にできる。こういう生活を彼岸という。つまりめんどりで一生を台なしにするようなことなく、

損だ得だと腹を立てたり、けんかをしたりすることなく、

みんな助け合って楽しく毎日極楽のような暮らしが南無阿弥陀仏ひとつでできる。

実際にわたくしがそうになっているからいうのです。

わたくしだけではない。他に数えきれないほどそんな方がおられる。

どうか、みなさん、せっかく生まれてきたのだから、自分の命を大切に、

今日は今日、明日は明日で、自分の力いっぱい仕事ができる。

つまり満点の生活がナムアミダブツと命の杖をついていればできる。

彼岸とはただ単にお寺に詣るというだけでなく、
お一人おひとりが、「お寺に詣ってよかった。きょうから腹を決められた」と
念仏の生活に入られることを期待してお別れします。

124. P297より

お釈迦さま（BC466～386）のおさとりにつながる生活を全うできれば、
人間としての生きがいも実るという涅槃のお話をいたします。
世界一のお金持ちになっても、人間がお金を貯めるために生まれてきたとは考えられま
せん。なぜかというと、世界中のお金をみんなそこに集めても、
そのお金で見えないものを見えるように出来ないし、
手が動かないのを上げることはできない。
心臓がとまりかけているのをまわすことも出来ない。それらは、お金では出来ない。
我われが活着ているということ、目が見えるとか、耳が聞えるということは、
どんなふうに生きて、毎日を突らせるような仕事ができるかに対して考えなければなら
ない。盲目の方で立派な仕事をなさっている方はたくさんおられます。
だから、単に目が見えるとか見えないという意味ではない。
目が見えなければ、花一輪を眺めることはできない。
世界の富をみんな積んでも、花一輪を眺める命のはたらきは得られないが、
花が活着て咲いているその命を、我われも活着ておりますから、命と命、このつながり
を見て、つながり合いで感得することができる。
そういう尊さはお金では何ともできない。
阿弥陀さまとはそのことをいう。
阿弥陀さまがあるとかないとか、信じるとか信じないとか勝手なことを言っているのは、
そのように言ってる人の程度です。

125. P297より続き

マルクス（1818～1883）が宗教は阿片だと言ったから、
宗教は阿片だと考えている方があるけれども、それは少し人がよすぎる。
マルクスは、哲学者として大きな仕事をなさった偉い方です。
しかし、いくらマルクスが偉くても、マルクスの程度でしかわからない。
マルクスはユダヤ人です。その当時、ユダヤ人には、いろいろの束縛があった。

お父さんは困られたでしょう。
マルクスは生活のその窮屈さを、子供として毎日目の前にしていた。
それで唯物論者になったのでしょうか。
唯物論が悪いというのではない。
物は大事だけれども、いくら大事でも、心がさびしくて低かったら、
心が深まってはじめてわかることが全くわからない。

126. P 298より続き

涅槃とはそういう意味です。

インドのサンスクリット語でニルヴァーナ (nirvana) といいます。
インドの言葉といいますが、日常語だけでもたくさん種類がある。
これは、サンスクリットといって標準語です。
地方語のパーリ語ではニッバーナ (nibbana) と違って同じ涅槃でも綴りが少し違う。
お釈迦さまが説教をなさったはじめのお経はパーリ語で書いてある。
最初のお経はまだお釈迦さまがおさとりになって新米ですから、地方語で書いてある。
ニルヴァーナのニルはやむ、ヴァーは吹く、アーナというのは状態です。
だからニルヴァーナとは吹きやんだ状態をいいます。
吹くというのは、マルクスが偉いといったり、また今の国会の論議のようなことです。
国会議員のほとんどは大学を出た方で学歴はある。
ところが、その多くは、わからないということがわからない方たちのようで、ケンカばかりしている。私どもはケンカをするために投票したんじゃない。
我われの生活を守ってくださって、国民みんなが一人ひとり幸せになる、本当に生まれ
てきてよかったというようなお世話をしてくださるために選挙で投票している。
ですから、代議士の仕事は、片手間にできるような仕事じゃない。
国際事情だって経済問題だって、それぞれ日本の将来はどうあるべきかということにか
かわっていますから、どんなに勉強をしても時間が足りません。
しかし、みんな吹いている。つまり自分が思った通りだと考えている。
自分が思った通りだと考えることを迷いという。なぜかというと、自分の考えたことが
その通りだと思っけていても、議論するとみんな違います。

127. P 299より続き

『般若心経』を読んでも、読んでありがたいと思って滝にうたれている方もある。
わけがよくわからないのです。わたくしはいっぺん読んで、これは大事なことがぬけて

いるのじゃないかと疑問がおこった。 サンスクリットという元のインドの言葉で書かれた『心経』が日本にある。 世界中で他に見つからない。

日本の法隆寺にだけ残った。 その資料をみると案の定、大事なことが落ちている。

いくつかおちていますが、 とにかくこの二つが抜けると『般若心経』がわからないという大事なことがある。

128. P 299より続き

はじめの一つに「行行（ぎょうぎょう）」がおちている。

これはサンスクリット語でチャルヤーム・チャラマーノ（caryan caramano）といいます。

チャルというのは「行」で、ヤームという語尾（目的語）にあたるので、「行ヲ」と訳する。 チャラマーノは、チャラ「行」で同じです。

マーノーは動詞（現在分詞）ですから、「行ズル」です。

日本語と同じです。 ところが、中国では「行ズル行ヲ」と語順を反対に書きますから、中国語だけじゃわからない。 日本語ではインドの原語と同じように「行ヲ行ズル」と書く。

129. P 300より続き

行を行ずるといふのはどういうことかということ、念仏をしても座禅をしても、行を行して
いるのです。

南無阿弥陀仏ナムアミダブツと称えると病気が治るとか、お金がもうかるとか、

他人がどう思うかというようなことでナムアミダブツとっておるのじゃない。

行を行ずるといふのは、ナムアミダブツがナムアミダブツをいっている。

花が花を咲いているのと同じです。

花は、花を見る人に綺麗だなあと思ってもらうために咲いているのじゃない。

苦心して咲かせたのだから、今までは五千円で売れたのが明日からは一万円で売れると思
って咲いているのじゃない。

ところが、人間の行いは、大学に入っても、それで就職が楽になるというので選んであ
ることが多い。 これは行を行ずるんじゃない。

簡単にいったら何もなっていない。

わたくしはそんなこと思って東大に行ったんじゃない。

東大でないと勉強できないことを勉強するために行った。

自分でぶつかって、どうしてもとりくまないといけない問題が多くあって、そのために大学へ入った。それ以降こうして毎日勉強している。

それを行が行ずるというのです。

そのことが『般若心経』のはじめに「チャルヤーム・チャラマーノ」と書いてある。

「観自在菩薩行深般若波羅蜜多」(かんじざいぼさつぎょうじんはんにはらはらみつた)がそれです。どうして観音さまになれるのかというと、行を行ずるからです。

これが一つです。

130. P300より続き

もう一つは、『般若心経』を読んでいくと、「シャーンヤターイヴァ・ルパーム」

(sunyataiva rupam) とあるところです。

シャーンヤターは「空」と訳する。

イヴァは「こそ」、ルパームは「色」です。

元のインドの言葉のルパームは形という意味です。

わたくしの顔とか姿とか、わたくしはこういう形をしている。それをルパームという。顔にも色があります。

気分が悪いときは青いような色になるけれども、また少し元気が出れば血色がよくなります。

どちらも顔の色です。

それはそのままわたくしの健康状態です。

そして健康状態は、心で左右される。

例えば腹をたてるでしょう。ムカツとくるともう顔の色も形も変わってくる。

ああ、あの方でもあんなお顔になるのかなあということがあります。

だから色・形は心の状態によって変わってくる。

131. P300より続き

「空こそ色なれ」というのは、ズバリいえば縁起です。

「おかげ」ということです。

お釈迦さまがおさとりになったのは縁起です。

縁起がいいというふうに、みなさんもお使いのことがある、その縁起です。

縁って起こると書いてあるでしょう。

それは、わたくしがお話をするとみなさんが聞いて下さって、

ああ『般若心経』の「空是色」はそういう意味ですかねえと、おわかりになるでしょう。そのわかりは、わたくしの話によって起こった。それを縁起という。ですから、わかった方からいえば話を聞いたおかげでしょう。

132. P302より続き

「かげ」というのはその前に出てこない、その前にいるのは自分だけです。しかし、わたくしがお話させていただく。それを聞いて下さったおかげで、みなさんもわかる。そうすると、わたくしもお話させていただいてありがたい。両方ありがたい。だから縁起・おかげというのは両方が幸福になることです。それを、自分が考え出したようにいうと、それはちょっと自分勝手に、ノーベル賞をもらうくらい偉くなっても動物的では駄目です。なぜかという、そのためにこの地球上はほとんどダメになっている。南極でも北極でも汚染されている。いろいろな工業の公害が地球上にバラまかれますから、予想外のことが南極や北極でもおこっている。海底にまでおよんでいる。これはノーベル賞クラスの学者の功績が、それを利用する人たちの自分勝手によってマイナスとなって起こった。いろいろ電気製品が使えて便利ですが、便利が十あるとすると、そのための破壊が百も千も起こっている。それで地球が駄目になりかけている。そうすると、ない方がいいんじゃないかとなる。それでもあった方がいいのでしょうか。

133. P303より続き

それでわたくしは空外記念館を建てるのです。
記念館を見て下さった方が、おかげを生かしていきられるようになれた
その背景を少しはわかって下さればよい。
おかげを生かして生きる人を、わたくしは「無二的人間」といっておる。
わたくしの目的は、無二的人間に一人ひとりが、一人ひとりなりになってもらわなければということです。そうでないと、この地球がおしまいになるような破壊を防げない。

134. P303より続き

無二的人間の無二というその二は、漢訳すると能取（のうしゅ）と所取（しよしゅ）ということ。能く（よく）取るとは、主観という意味です。

わたくしならわたくしという意味です。

わたくしがこうしてお話させていただいている、これが能取で、聞いて下さいみなさんは所取です。

所というのは受身で、とられるところ、客観のことです。相手のことです。

簡単にいえば、自分と相手ということです。

その二つがバラバラではマイナスです。

わたくし話を聞くと、こうであったとある方がお考え下さるでしょう。

ところが他の方はまた違ったようにわかったと言われるとき、自分の方が本当で、相手は間違いだとか議論をするならば、わたくし話を聞いて下さったばかりに、意見が対立して争うこととなります。それなら聞かなかった方がよいくらいです。

お互い同士がけんかをするとならマイナスですから、ああ、そういう受け取り方もありますねえ、とって参考にする。自分がそれに気づかなかったけれども、そういう考え方もあるとわかる。世の中は自分の思った通りにおしたのじゃ通用しませんから、そこをお互いに活かしあって、世の中を豊かに幸せにしていこうというのを無二という。

135. P304より続き

無二というとき、二つが対立しない。

一如になる。

一如とは、一つの如しと書きますが、如来さまということです。

それで、空外記念館には、世界にこれしかない、

またこれを見て下さらなければ文化はわからないというような必要なものばかりを所蔵、展示するのです。それがまた、一人ひとりで見方があります。

ああ、そういうふうに思いになりますか、そのような点もありましようねえ、と参考にする。そして、自分もまた自分の考えを聞いてもらって、お互いが活かしあって豊かな人生・社会を築らせていこうではありませんか、というのが記念館をつくる目的です。

136. P304より

「行を行ずる」ということと、もうひとつ、「空こそ色なれ」ということとお話しました。

空とは結局「おかげ」ということで、「おかげ」こそ形になるのだから、その形・色が自然の形です。

花が一輪咲いていても、その一輪の中に、咲いている花の形や色彩から咲き方に至るまで、みんな自分勝手にしたものじゃない。

太陽のおかげも、空気のおかげも、土の中から吸いあげた養分のおかげも、みんなその花の色や形になっている。

それから世話をした方の苦心もあります。

花のお世話は、朝早くから夜中まで大変な心遣いです。

その思いやりとか気づかいがみんなそれぞれの花の形や色に現れているのだから、「空こそ色」だというふうに取り組むことができれば、本当に見るもの聞くものみんなに頭が下がる。

これらのおかげこそ、ものの形になっているので、

どんなに自分勝手をしている人も心臓は動いてくれている。

空気をいつでも吸わせていただいている。

だから、空気を吸わせていただかないと、自分勝手もできない。

そうすると、「おかげ」の中で自分一人だけがうろたえていることになりませんが、

そういう「空・おかげでないと、色ではない」というのが、『般若心経』の考え方です。

137. P305より続き

わたくしはナムアミダブツと七十年の間、寝ていてもたやしたことはない。

寝ておられるのは、阿弥陀さまのおかげです。

自分が偉いから寝ておられるのじゃない。

寝られなかったら仕事がものにならぬ。

だから、寝られるということは、ほかのおかげをどんなにいただくよりもありがたい。

息ができるのも、目が見えるということも、手が動くことも、みんなありがたい。

してみると、お金が儲かったことだけを喜ぶのは、ちょっと窮屈な生き方じゃないかと思えます。

よく眠れたということだけでも、もったいないなあ、ありがたいなあと思えます。

そのことを言葉で言えば、ナムアミダブツです。

自分は悪いことをするが、悪いことをした人を浄土へ迎えて下さるのが阿弥陀さまのお慈悲だと手前味噌なことを言ってる方がいます。

そんなことはありえない。しかし、ありえないそのような考えが、平気で現代では通用している。

138. P306より続き

「空こそ色」ということは『般若心経』に書いてある。
おかげをうけてこそ、我われの色・形なのです。
一時間いや十分間でも生きられる。
これはみんなおかげです。
『般若心経』は仏教の根本です。
そこに説かれている縁起の教えがお釈迦さまのおサトリだといいましたが、
縁起とは何か、お釈迦さまのおサトリとは何かというと、般若（はんにゃ）といってもいい。インドの原語でプラジュニャー（prajna）といいます。プラとは向かってという意味、ジュニャーはジュニャーナ（jnana）といって智慧のことです。
今いるところで腰をすえずに、前進していくのが智慧です。
今日の智慧は今日の智慧、明日の智慧は明日の智慧です。

139. P306より続き

昨日まで雨天がちでしたが、今日の法要はこういう上天気で幸せです。
空外記念館の起工式も上棟式も、それから定礎式のときも、その前までどしゃ降りで、これでは式ができないと関係者は心配しておりました。
わたくしは心配ないといっておりましたら、式典の一時間ほど前から雨が降りやんで上天気になった。
いつでもそうです。
今日も朝から長雨でしたらわたくしは出にくかったが、わたくしはひとつも心配しておらない。
それは、空こそ色だからです。
わたくしはおかげをナムアマダブツでよろこばせていただいて生きておるから、色・形がみんなそのようになる。

140. P307より

「無二的人間—空外書道の世界—」の撮影中もそうでした。
何十年も前からしている一年一年の行事を撮影してもらったのですが、

映画の撮影だからというので特別に人を集めたり、何かを用意するといったことは、何ひとつ事前にはせず、そのときにありのままを撮ってもらったのですけれど、一緒に仕事をしてくださった人たちが不思議におもうほど、まるで前から周到に用意をしていたかのようなシーンが撮れて、しかも天候までもが、大変な好都合に恵まれた。ご覧になった方はおわかりいただけだと思います。わたくしの一生、「行を行ずる」一生を映画にした。「空こそ色なれ」を映画として撮影してもらったのです。

141. P308より

阿弥陀（amita）というインドの言葉は、過去受動分詞といって、過去形の受身です。だから計られたのではないということ、簡単にいうと計算ができないということです。わたしくはナムアマダブツと、阿弥陀さまと一緒に朝起きて一緒に本を読むから「般若心経」を読んでも、これは大事なことが落ちているのじゃないかと、阿弥陀さまが教えて下さる。今まで古今東西の大学者の中で、どなたもわたくしが気づいたようなことは、言っておられない。『般若心経』くらい長年にわたって多くの方が読まれたお経はないといってよいくらいです。だが、「行を行ずる」とか「空こそ色なれ」とか、ギリシャ文化の影響などのことは、世界中でわたくしが初めて言った。それは何故か。わたくしが特別に偉いんじゃない。この程度の者はどこにでもいるのだけれど、七十年間、阿弥陀さまと一緒に暮らしておる方はほとんどおられないからです。ただ阿弥陀さまと一緒に暮らしておると、悪いことはしても極楽に往けるなどという、そんな得手勝手な阿弥陀さまじゃありません。していけないから悪いというのです。どこでも、何時でもです。

142. P309より

わたくしが漢訳の『心経』を読むと、そこの書いてあるとおりにあるまいということがわかる。うっかりして、訳し落とすこともあります。だから他人の言うことを鵜呑みにしてはいけない。よく知らないのに知っているように言う人もある。わたくしは知らないことはひとつも言わない。証拠を見届けなければいわない。わたくしの寺には鶯や他の鳥がやってきて子供を育てるのですが、

なるほど小鳥の世話でも行き届いて感心だなあと見てはじめてわかる。
それじゃ鶯のことは半分も今までわかっておらぬということです。
自分で計算して、その時、これだと思って、わかったつもりでも、そうとはかぎらない
ということです。

阿弥陀さまとは、自分の知っていることで全部じゃないということです。
まだ調べて、よくわからないといけないことが山ほどあるということです。
ですから、阿弥陀さまがおられるとか、おられないとかの議論をする方もあるが、
いないとかいるとかじゃない。阿弥陀さましかおられない。

143. P310より続き

自分と相手がお互いに活かしあって、生きられるおかげを受けて、
自分の一生を自分として実るような毎日を、南無阿弥陀仏ナムアムダブツと言って
お念仏と一緒に送っていくことは、死ぬほどありがたい。
そのような暮らしが、自然であるとわたくしは思うし、
みなさんにもそのような生き方をさせていただきたい。
私たちは計ることのできないおかげをうけないでは道も歩けません。
勿体ないくらいです。勿体ないとは身体が無い、自分の力では何ひとつ出来ないという
ことです。それが空ということです。
おかげでないものは何一つしてない。
男子は男子、女子は女子でないと出来ないことがありますから、
どうかみなさんもお一人おひとりが自分自身でなければ全うできない人生を実らせてい
くような 毎日を楽しく生きていただきたいと思います。

144. P313より

お釈迦さまが最初に説かれたのは縁起です。
縁起とはひと言で言えばナムアミダブツです。
お釈迦さまがナムアミダブツと言われたのじゃないけれども、
ナムアミダブツにまともらないといけないように縁起の教えが説かれておる。
お釈迦さまの前にもそれは無論あります。
急にお釈迦さまが縁起を説き出されたわけじゃない。

お釈迦さまが出られて縁起をさとられたわけです。

日本の文化ならば聖徳太子（574～622）というようなことが言えるけれども、インドには悠久の流れがある。インドの文化は世界一です。

145. P 313より続き

それで、縁起は空だといったのはナーガールジュナ（nagarjuna 龍樹菩薩）です。

今、二十世紀ですから、千七百年前、三世紀の方です。

インドで代表的な学者を一人あげると龍樹菩薩しかおられない。

それで、空ということは、龍樹菩薩が偉いから考えたのじゃない。

ギリシャ文化の影響がある。

ギリシャ文化は西洋文化のもとです。

わたくしはギリシャ文化の専門家ですから、

般若思想の空という考えがギリシャ文化の影響を受けているとわかる。

それで、どうしたら我われが、「空の生活」ができるかという問題があるから、

その後、空の思想がずっと発展した。

それから、インドで龍樹菩薩に並ぶような方は世親（せしん）、世の親という方です。

ヴァスバンドウ（Vasubandhu）とインドの原語で呼びます。

三百二十年から四百年くらいのときにおられた。

だから四、五世紀の方です。親鸞聖人（1173～1262）の親の字は、世親の名前に由来する。世親が世に出られた頃から今の真言宗などの発展がはじまり、お経もできてくるのですが、だいたいインドの仏教はこの辺で終わりです。

146. P 314より続き

ナムアミダブツが表に出るのは、中国の善導大師（613～681）からです。

日本の仏教では奈良の大仏さまといえば子供でもわかるくらいに代表的です。

その大仏さまは何を手がかりにつくられたかといえば、奈良の大仏さまができる七十年前に、善導大師が中国の龍門という所で作られた大仏さまを手本にしている。

善導大師は、龍門の大仏さまの製作監督をなさった。

ナムアミダブツといえば、善導大師が代表的な方だけれども、

奈良の大仏さまとは関係ないとおもっている方がほとんどでしょう。

だから、日本の教育はやり直さないといけない。
奈良の大仏さまの話をしらずに日本の教育はできないのですから、
善導大師が大事な方であることを言わずに済ませられないのが本当です。

147. P 314より続き

善導大師を法然上人（1133～1212）が「偏依善導（へんねぜんどう）」といいまして、
ひとえに善導大師の依る、善導一師によるといわれた。
さすがに仏典を十八歳のときから四十三歳まで二十五年間、
読み通しに読まれた方だけのことがあります。
もう二十歳代に、智慧第一と、日本の文化人が無条件に頭を下げた方です。
その方が『大蔵経』という仏教のお経や論書などの全部を集めた文献を繰り返し繰り返し
し読まれた。ほかの人では容易に読めないし、読んでも簡単にわかるものじゃない。
わたくしは、法然上人が二十五年間お経を読まれた比叡山の青龍寺へ行って、
そのときの『大蔵経』が今も残っているからそれを拝見して感慨無量でした。
青龍寺は、天台宗延暦寺根本中堂から奥比叡を横川（よかわ）に下がった谷間に
元黒谷というところにあります。
わたくしが訪ねたとき、そこには、富山からきておられる尼僧さんが一人で留守番をし
ておられた。お話をおかがうと、冬には果物を本尊さまに供えると、あくる朝には芯ま
で凍っている、家庭の冷蔵庫より冷たい。そんな所で、法然上人は、炭火のわずかな火
桶を横に置いて二十五年間の毎冬をすごされた。

148. P 315より続き

法然上人が二十四歳の時に一時、山を降りて、
京都・嵯峨野の釈迦堂へお釈迦さまに会うつもりで行かれた。
そこは今でも残っていますが、インドのお釈迦さまのお木像がまつてある。
その頃、京都や奈良の名高い、一番偉いお坊さまを五、六人訪れたのですが、
みんな法然上人のすばらしさに打たれて大事な本をさしあげましようとか、ほめられる
ばかりです。
そんなにほめられるために行ったんじゃないのだから、
もう、人に会ったのではだめだと、お釈迦さまを相手にされたわけです。
そんな方が、冬は果物が一晩で芯まで凍るような所で二十五年間ご辛抱なされた。
それが文化です。
日本の文化が今でも周囲を照らすようなもとなしているのはそのためです。
今は大学を出たから、就職はいいところへというけれども、それでは文化でも学問でも

ない。

わたくしでもそうです。

本山からどれほど法主（ほっす）にきてくださいと行ってこられても応じたことがない。

お葬式でも、大臣の葬式には行かないけれど、（笑）

どんなに貧しい方のお葬式でも行ってます。

口では平等というのは楽ですが、実際に平等の生活をなさったのが法然上人です。

善導大師とか龍樹菩薩というインド第一、中国第一の方と法然上人は並んでおられる。

149. P 316より

往生は、『般若心経』で揭帝（ぎやてい）と書いてあるでしょう。

「往く（いく）」という意味で、ここではこたれてしまわないということです。

ああ失敗したとか、商売ができないようになったとかへこたれない。

できないならできないでよい。またこれを参考にしてやるといいのです。

それをへこたれて、自分で自分の首をしめるようなことをすることはしない。

なかには自殺する人がいるが、自分のいのちならそれでもいい。

しかし自分のいのちじゃない。わたしたちが生まれてくるまでに少なくとも四十六億年たっている。はじめは地球は熱気のかたまりだったから、今でも地中は熱いけれども、表面の熱さが冷めて、降った雨が川になって流れて海になった。

そして、海の浅い所に、いのちのもとである原始の単細胞ができた。

三重数億年前のことです。

それからだんだん細胞が進化して今の私たちのようになった。

私たちの体には、細胞の数が六十兆ともいわれておるけれども、

それらが一つとして自分勝手をしていない。みんな助け合っています。

胃が悪くなると、胃がよくなるように、心臓が弱い人は、心臓がよくなるように、全身の何十兆の細胞がみんな力を合わせて一つになっている。

それを「如（によ）」という。

如来さまの如、一如です。

150. P 318より

自分勝手をする、自分で自分の首を絞めるようなものです。

とにかく、真実を生きるということしかない。

それを空という。

この空がナムアマダブツという言葉にまとまったのですが、
インドで誰方がはじめてナムアマダブツと言われたかはわからない。

今一番はっきりしているのは、中国の善導大師です。

法然上人は、その善導大師一師による、「偏依善導」といわれた。

そのことからつながりが出てくる。

人間はもう少しまじめに生きなければなりません。

自分の大事ないのちを本当にお金やむかつ腹を立ててだいなしにするのは、勿体ない。

151. P 318より続き

法然上人の主著に『選択本願念仏集（せんちやくほんがねんぶつしゅう）』があります。

本願とは、インドの言葉で、プラダーナ（pranidhana）とって、もともとの願いです。

プラニとは前から、ダーナは置いてあるという意味です。

我われがお母さんから生まれる前からです。

みなさんが今日、通照院へ涅槃法要にこられたのも、お天気だったからで、

雨が降っていたら来ていなかったかもわからぬという方もいらっしゃるでしょう（笑）

しかし、それは関係ない。みなさんが生まれたときから、いや生まれる前から、

今日、通照院へお詣りに来られるということが決まっている。

そういう方でなければ来られません。

みなさんは、生まれる前からわたくしに今日会うことになっている。

その会えるというための条件は一つや二つ、百や二百じゃない。

それを縁起という。縁って起こる、それがおかげということです。

それを説明している時間がないから今はしません。

知らないからやらないんじゃない。知っているから出来ない。（笑）

他力本願とか自力というが、他力でないものがどこにありますか。

今日みなさんがお詣りなさいますのに、お寺の準備は大ごとです。

わたくしもお別時（別時念仏会）とって島根の寺で毎年行っていますが、

その用意だけでも、たくさんの方がたの働きによって漸くできる。

152. P 320より

ここでどうしても知っておかなければいけないことで

「七仏通戒偈（しちぶつづうかいのげ）」があります。

仏教とは何かと、ひとことでいえば「七仏通戒偈」だといってもいいくらいです。

七人の仏さまが共通に、戒めなければならないと説いておられる偈文（げもん）です。

お釈迦さまは七番目の仏さまです。その前の先輩の六人とも共通にいわれた。

それは、みなさんがご存知の通り、「諸悪莫作（しょあくまくさ）」悪いことはどんなことでも作す（なす）なかれ、してはいけない。

「衆善奉行（しゅぜんぶぎょう）」善いことならなんでも行ずる。

そのことを他人が喜んでくださろうが、自分の地位が上がろうが下がろうが、

それは第二のことです。だれでも地位が上がるのにこしたことはない。

しかしそれを目当てにやっていると人間じゃない。自然にそうならなければならない。

153. P 3 2 1 より続き

この「七仏通戒偈」とは、人間が人間になる生き方のことです。

他人からコン畜生といわれても、お金が儲かればいいとか出世できたらいいとかいうのは畜生です。それでコン畜生という。

人間が人間になるというのには、悪いことは何もしないように、善いことなら進んでするようにというのです。それには、「自浄其意（じじょうごい）」といって、この一句が一番大事です。

もとのインドの言葉で、サチッタパリヨーダパナム（sacittaparyodapanam）といいます。

サというのは自分の、チッタはこころ、パリヨーダパナムとは清めることです。

他人のことじゃない。他人は第二です。

自分の子供でも、近所の方でもそうになってくだされば何もいうことはないけれども、

それには自分がまず先にそのようにならなければいけない。

154. P 3 2 1 より

お金が貯まったとかいうのは、人がうらやむだけです。

あの人があんなにお金を貯めるのなら、自分も悪いことをやってでも貯めようかということになる。災難を受ける方はみんなそういう方です。

本当に気の毒です。そんなことになるのなら、しない方がよかったというようなことば

かりですが、それがわかっているつもりです。

同じ世間に住んでいて、そんな災難に遭ったことなど、わたくしは一度もない。

ないどころか、降っていた雨でもわたくしの大事な行事のときになると止むくらいです。

それはそういう行いをしているからです。そんなことは一つや二つじゃない。

わたくしは自慢するのじゃない。ナムアミダブツと称えるのが本当に有難いということ
を、どうやったらわかっていたただけか、それをいっておる。

こんなに言ってわからなければ見込みがない。(笑) これ以上にいうことはない。

わたくしがそのようになったことをその通りに申し上げて、わかっていたらどうとおも
うだけです。ここへおいでになられたのも、祖先に仏縁があるからであって、ご自分ひ
とりの力じゃない。それで、こんなに言ってわからないようでしたら(笑)

もうお話のしようがない。(笑)

155. P 3 2 2 より続き

とにかく、仏教とは何かといえ、自分の心を浄めることです。浄めるとは洗濯するよ
うなことじゃなく、阿弥陀さまの子ですから、気付いてみれば生まれたときからそうな
っている。ですから、自分勝手さえしなければいい。他人には自分勝手にないように思
わせるようにして、実際は自分勝手をする。他人にわからないようにする方が何倍も苦
勞のいることです。それで最後に、「是諸仏教(ぜしよぶつきょう)」これもろもろの仏
の教えなりといひます。仏さまはいろいろいらっしゃるけれど、どんな仏さまでもその教
えは、まず自分の心を浄めることだということです。

156. P 3 2 3 より続き

毎日入るお風呂のお湯でも阿弥陀さまのおかげです。

風呂のお湯は自分でこしらえたものじゃない。

お湯がなければはいれませんから、お念仏せずにはお風呂に入れません。

阿弥陀さまとは計算ができないということでしょう。

計算できないということは、百万円どころじゃできないということです。

お風呂のお水をただの一ぱいも作ることができない。

自然に雨が降って山に水が貯まってくれなければ出来ない。

ですから水を拝まなければ、ナムアミダブツといわなければお風呂にも入れないでし
ょう。とにかく仏教は、これ以外にないということは決まっている。

自分の心を浄めるというのは、いろいろのおかげで生まれてきて、

生きられているということに気づいてナムアミダブツで生きていくことです。

157. P 3 2 3 より続き

世の中では、自分からすすんで損になることばかりしている方が多い。
もうおしまいだというようなことばかりしている。
あげればきりが無い。人間は、目先の物事の一つや二つだけを考えてはいけません。
一つが千になったり万になったりもします。
生きられるおかげのいろいろのつながり合いを手本にして、
自分ができうる限りを生きていかなければいけない。
仏教とは、あるかないかわからぬ仏さまを信ずることじゃない。
自分勝手をしてはいけないということです。

158. P 3 2 3 より続き

南無阿彌陀仏がはじめて現れるお経は、『観無量寿経（かんむりょうじゅきょう）』ですが、その前に『無量寿経』といって阿彌陀仏さまの四十八願を説いたお経がある。
その『無量寿経』をひとつにまとめるとナムアミダブツになる。
『無量寿経』には「波は無量自然（じねん）の妙声（みょうしょう）を揚ぐ（あぐ）。
その所応に従いて聞かざるものなし。或いは仏声（ぶつしょう）を聞き、
或いは法声（ほうしょう）を聞き、或いは僧声（そうしょう）を聞き、
或いは寂靜（じゃくじょう）の声、空無我（くうむが）の声、大慈悲の声、波羅蜜の
声、・・・その所聞（しょもん）に称いて（かないて）、歡喜無量（かんぎむりょう）なり。
・・・ただ自然快樂（じねんけらく）の声のみあり。」
とありますように阿彌陀仏さまの声、般若波羅蜜（はんにはやはらみつ）の声というふうに
声で説明している。それが、ナムアミダブツに結晶する。

159. P 3 2 4 より続き

法然上人までの仏教は、お寺さんが学んだり行じたりすることになっておった。
それを法然上人は、誰でもが、仕事をしながらでもナムアミダブツで
平等に往生できるといいだされた。
それから、どんな方でも、お念仏で仏さまと一緒に日暮らしができるようになった。
つまり、仏教文化が万民に開放された。
人間の誰もが、どんなにお歳を召した方でも、男子も女子も、

平等にとりくめる時代のあり方がデモクラシーという制度であって、今の社会のことだけを言うのではない。
今、流行のカラオケなんかやれなくてもいい。
やらなければ人間になれないということでもないのでから。
まるで日本人といえばカラオケというくらいです。(笑)
わたくしはやったことがない。やれといわれてもできませんが。(笑)

160. P 325より続き

それで、法然上人が『選択本願念仏集』の第一章と第二章では、道綽禪師や善導大師がいておられることを紹介して、第三章からはじめて自説を出されたのは、そのように書かなければ当時はいけなかった。
今日、西洋の哲学もそういう方向に進んで、お互いに争わない。
自分も相手も活かしあって、豊かな幸せを全うしていくようなところまできている。
それを法然上人はすでに八百年前に道を開かれた。
そのことは、『選択集』の最後、第十六章の結びのところに出てきます。
言いはじめは、「速やかに生死（しょうじ）を離れんと欲わば（おもわば）」です。

162. P 335より

ルはフランス語で「再び」、ネサンスとは、「生まれる」という意味です。
いっぺんはお母さんから産んでもらった。
そこにはお母さんの十か月の心得が遺伝されていますから、十か月ずうっと念仏した方の子供に生まれると、必ず念仏するようになる。
わたくしの場合も、母が私を産むときに十か月間念仏をしてくれた。
ナムアミダブツを言えばてきめん呼吸が変わってきます。
その変わった呼吸をじきじきに胎内の胎児が呼吸する。だから、満点の教育ができる。
ナムアミダブツの生活は、自分がするのも大事だけれども、生まれた子供にもしてもらうのがなお大事です。
わたくしの母がそういう心を持っていたからわたくしが生まれたので、わたくしの手柄じゃない。それなら、母の手柄かということ、母だけの手柄でもない。
なぜ母がわたくしを産むときにそういう心になったかといえば、そのお父さん、わたくしからいえばおじいさんが、大莊屋の財産をみんなお寺に寄付したような因縁がある。ばかな、自分のことぐらいもう少し考えたらどうかと言った人もおられたようで

すけれども、おじいさんはそういうことは気にもとめなかった。

そのおかげで母がそういう気持ちになり、そのまたおかげでわたくしがこんなに念仏をよろこべるようになっていく。

163. P 337より

みなさんは、富士山なら富士山を見ても、ああ、富士山なら見たことがあると言われるでしょう。富士山といっても、毎日、毎時間、みんなその姿が違う。

その時の気候によっても無論違います。

わたくしは、以前に三十年間ずっと、富士山を眺めるのに日本一の場所で、

松本市郊外の鉢伏山といいますが、その山頂近くの二千メートル地点で見えました。

その頂点に立つと、富士山のような標高三千メートル以上の山が日本に二十三ありますが、それが東西南北に二十二は鮮やかに頂点を眺められる。

そういうところは日本ではそこだけでした。

そうして、富士山はすそ野なしです。

雲海といって、雲の海です。それもすうっと照り輝いていた。

富士山は赤富士のときが一番美しいと言われている。

赤富士を見なければ富士を見たといううちに入らぬといわれるぐらいに美しい。

それを、わたくしは三十年間で、最初の年の、しかも秋の別時念仏会をしたときに拝んだきりです。が、一回拝んでいるから、味わいはわかっている。

それも、時時刻刻にみんな違う。

また、拝むひとによっても違う。わたくしは七十年、阿弥陀さまと一緒に暮らしているから、阿弥陀さまと一緒に暮らしている心で眺める赤富士です。

そういう心持ちの無い方はない方で、絵の上手な方は絵のセンスの上で、

何か悩みを持っておられる方は、その悩みの心から、ひとつの富士山を眺める。

そのように人と時によってみんな違う。

そうしたら、その富士山が富士山だということは言えない。

164. P 338より続き

南無阿弥陀仏も同じです。アヘンだと言うひともある。

宗教はアヘンのようなところがあります。

アヘンと言うのも一理あるけれども、そうだからといって、宗教はすべてアヘンだといえるでしょうか。仏教も宗教じゃないですか。

そのようにいうひとが宗教をみんな知っているかという、そうじゃない。

カール・マルクス（1818～1883）はユダヤ人だからユダヤ教の、

それも一面だけで、お父さんのときからいじめられた家庭に育ったひとですから、

そういう心持ちから、宗教はアヘンだと言わずにはおれなかったのでしょう。

それをまたお調子に乗って、宗教はアヘンだというような考えでいる人も少なくない。

道理がわからんとか言っておれないほどわからん。

法然上人が「一文不知の愚鈍の身」といわれるのは、そのことを言っておられる。

いくら三十年、富士山を拝んでも、それはわたくしの拝み方で、富士山そのものはわかりはしないということです。

165. P338より続き

富士山は日本の火山のひとつです。

火山もいろいろあるけれども、そのいろいろあるうちのひとつの富士山が、ああいう形で残るような噴火の仕方をした。

自分が拝んだ富士山のように、何千、何万、何億の方がご覧になっても、同じように富士山を拝むことはできぬ。

だから、富士山といったら、わからぬと言ってもいい。

何千万分の一がわかったからといって、わかった中には入らない。

あとはどうして決めるのですか。

眺める方それぞれに決めてもらわなければ決まりようがない。

境遇も違う、教養の程度も違う、くらし方も違うひとが、

大抵そうだろうとおもっても、想像もつきません。

そのことを「一文不知の愚鈍の身」という。

166. P339より続き

法然上人は、十八歳から四十三歳まで丸二十五年間『一切経』をお読みになった。

二十五年間、朝から晩まで仏教の経典のすべてを繰り返して読まれた方は、

世界じゅうに法然上人しかおられない。

それでも、法然上人のわかり方は、漢文しか読めぬのだから、その範囲です。
漢文もとのサンスクリット語の経典なども読めなければわからぬことがある。
『般若心経』という一番普及した経典でさえ、わたくしが漢訳で読むと、
これでいいのかというようなところがある。
インドのサンスクリット語では、漢訳経典のように書いていない。

167. P 339より続き

『般若心経』の一番初めに「観自在菩薩行・・・」とあるでしょう。
その部分はインドのサンスクリット語の経典では、
行を行ずるーチャルヤーム・チャラマーノ (caryamcaramano) と書いてある。
漢文で書くと、行ズル行ヲと、上へ読みあがるので、行という字、
一字に言い間違えているけれども、もとのサンスクリットは、チャルヤーム、行を、チ
ャラマーノ、行ずると書いています。

168. P 340より続き

行を行ずるといふのはどういふことですか。

普通に生活するといふと、儲けるために生活するでしょう。
大学に入るのも、就職がいいように東大に入りたいでしょう。
そうおもって東大に入る学生がある。わたくしはそう思って入ったんじゃない。
そんなことは問題にしておらぬ。
だから、卒業して、そのころ就職は極めて難しいときだったけれども、
就職を言っただけでも、わたくしは断っておる。
就職のために東大に入ったんじゃない。
東大に入らなければ研究ができぬことがあるから入った。
同じに入るのだって、目的がみんな違う。
大学に入るだけじゃない。社会へ出てからも目的が違う。
自分がそうだから他人もそうだと決めたいでしょうが、そんなことはできない。
他人(ひと)は他人(ひと)です。

169. P 340より続き

「一文不知の愚鈍の身になす」というのは、
自分のおもうとおりに他人を考えてはいかぬということです。
そう考えるとそのために、親子げんかになったり、夫婦別れをしたり、
近所とけんかしたり、国と国とが戦争までする。みんな争いはここから来る。
それですから、その程度で平和運動をしても何にもならぬ。これだけわかったらいい。

170. P 340より続き

「一文不知の愚鈍の身になす」というのは、
何でも自分の思うとおりに他人も考える、と考えるはいかぬということです。
法然上人のように世界に例がないぐらいにお経を読まれていても、
それは法然上人の理解でしかない。ほかの人はほかの人のような理解を持つのです。
さきほどの『般若心経』でいう、行を行ずるとは、南無阿弥陀仏ナムアマミダブツと言う
ことだから、阿弥陀さまの智慧や慈悲と一緒に生活できることが第一だということです。
その結果、他人がどう言おうが、自分の地位がどうなろうが、そんなことは第二で、
南無阿弥陀仏ナムアマミダブツと阿弥陀さまの智慧や慈悲に照らされ、生かされて、
毎日の仕事ができることが最高だということです。それが行を行ずるとということです。

171. P 342より続き

いくら『般若心経』を読まれても、行を行ずることはできない。
けんかは人並みにやるし、損得は他人（ひと）以上に考えている。
それじゃ『般若心経』を読んで何になるのですか。
『般若心経』の始まりから、それではだめだと書いてある。
わたくしはそれを感じず。それは一体どういうことかというのと、
はじめに「色空（しきくう）」(rupam sunyata)とあって、その次に「空色」とあります。
これはサンスクリット経典には「空こそ色なれ」と書いてある。
シューンヤターイヴァ・ルパーム (sunyataiva rupam) です。
「空」とは、シューンヤターで、イヴァという語尾が「こそ」と訳せる。
ルパームというのは、「色」と訳すのですが、英訳するときはフォーム (form)・形と訳
します。わたくしの顔はこういう形でしょう。
単なる形だけじゃない、うれしいときにはうれしそうな、心配なときには心配そうな、
その形の中にそれが出てきておる。それを「色」という。

172. P341より続き

空とは自分の手柄じゃないということです。

そのことを無自性（むじしょう）といいます。

自性がない。無自性の上にさらに空です。

「空亦（ま）た復（ま）た空なり」という言葉が一番大事です。

自分の手柄じゃないとは何かというと、おかげということです。

173. P342より

「空こそ色なれ」 みんなおかげです。

わたくしがここでこういうお話ができるのも、みなさんが聞いてくだされなければできない。せつかく来ようとしても、参加される方が少なればできないことになる。

みなさんが聞いてくださるおかげです。わたくしが今日こうなれたのも、母がわたくしを宿している十か月間 ずうっとお念仏してくれたおかげだと先に話しました。

それは母だけの手柄じゃない。おじいさんのおかげです。

また、おじいさんが大庄屋になれたのも、社会のいろいろな関係のおかげがあるでしょう。おじいさんの力でなれるのじゃないから、**というように考えていったら、おかげでないものはひとつもない。それを「空こそ色なれ」というのです。**

174. P342より続き

だから、「空こそ色なれ」という『般若心経』の一句は、世界を照らすような光です。

それさえわかれば、けんかも戦争もないから、水素爆弾をつくる人もいない。

あるいはまだいるかも知りません。そのときは、投げた方が自分に得だという気があるからやるのでしょうが、得というのは大うそです。みなさん、原子爆弾の戦争ができるでしょうか。わたくしは、あの原子爆弾で隣にいた方が即死するというような目に遭っ

ているから、 あんなことは人間としてすべきじゃないし、これからはできないとおもう。

175. P344より

「一文不知の愚鈍の身をなして」というのは、ばかになるという意味じゃない。

法然上人が言っていないさるのだから、ばかという意味じゃないことは明らかであろうはずなのに、 そう思う人はきわめて少ない。法然上人は世界一の智者です。

そういうふうに思うのは、わたくしだけじゃない。どういう本にどう書いてあるのかを、ずっとわたくしは並べて調べてみました。法然上人は絵もかきなさる方です。

そういうことをみなさんは考えられないでしょうが、絵を大事な本にいくつもかいておられます。字が書ければ、絵もかけるはずですよ。

176. P344より続き

法然上人が『選択本願念仏集』をお遺しになった。

これは法然上人の宗教体系をあらわす書物です。

西洋紀元で千十二年に法然上人は亡くなられました。

建暦二年です。建暦は二年までしかないのですが、建暦本とって、その亡くなられた年に本が出た。本は、その当時では世界中で出版の例はほとんどない。

聖徳太子（574～622）の著述もまだ本になっていなかった。

バイブルなど無論のこと本になっておらぬ時代です。

そういうときに法然上人の著述だけは、亡くなられた年に本として出ているわけです。

このころの本は、板にいちいち字を彫るのですから、

一冊の厚い本を作るのに何年もかかります。

だから、法然上人が亡くなられる前からずっと用意されていて、

亡くなられるとすぐに本になって出たということです。

それは重要だから本になるのです。

最近のやたらに売するために作っているだけの本とは違います。

バイブルのような大事な文献でさえ本になっておらぬときに、法然上人の著述は何年も前から用意されて、亡くなられた年の建暦二年に本になって出ている。

177. P347より

わたくしはギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語をはじめ、中国語、フランス語、ドイツ語、英語など みんな自由にできるから、学問の上では、法然上人以上のところはいくらでもある。また、それくらいできなければ、今日では宗教などで発言することができないのではないかと思います。

178. P349より

わたしがちょうどヨーロッパへ文部省から派遣された昭和四年（1929）に、キリストはなぜ生まれてきたのかという、クザーヌスが行ったラテン語の説教原稿が五百年もたって発見され、はじめて出版された。それは同時に、自分はなぜ生きていくかという問題ではないかと、それをキリストの名において説教された大切なものです。また、それはルネッサンスとって、我われ一人ひとりがお母さんから生まれただけじゃ、人生を生きる原点がわからぬということです。ところが、今やっと、西洋でもそれが問題になっている。

179. P349より続き

西洋で偉い方はたくさんおられるけれども、飛び抜けた方はロベルト・ハウプスト教授がおられます。

クザーヌスはドイツ人ですから、ドイツの大学にその講座があるのは当たり前ですが、フランスにも、イギリスにも、イタリアにも、アメリカにも、その他の国ぐにの大学にも、クザーヌス学会がある。その国際学会のトップがハウプスト博士で、クザーヌスが生まれた近くのトリーア大学神学部の教授です。

そのハウプスト教授からつい数日前に手紙が届きました。

世界中でクザーヌスの学科を持つ大学が出しているクザーヌス研究の総合雑誌の十九巻目がこの秋に出る予定ですが、それに、わたくしが一昨年（2005）十一月二十三日に京都の同志社大学で行ったクザーヌスについての講演をそのトップに載せたいといっただけです。日本人で載るのは初めてです。

しかも、わたくしの五、六十年前の仕事ですが、また一昨年した講演です。

これで法然上人や弁栄上人の名前が初めて世界に通ずるわけです。

180. P352より

先年（1980）、全国の大学の書道専門の教授が集まる総会が福岡のハカタ会館であったとき、わたくしは、「一者を書く」という題の講演をした。

一者というのは、プロテーノスのト・ヘンという言葉で、一つの者ということです。一つの者というのは自然です。自然はひとつです。

しかし、その自然のどこを考えてみても、富士山を一つの山として考えても、あるいは雲の動きを考えても、お月さまを雲がさえぎっておればお月さまはないようでしょう。

ないようながら、それは雲が見えないようにしているだけで、お月さまは照らしている。月影の照らさぬところはないとは、それは法然上人は言われているわけです。

雲がかかっているからなくなるのじゃない。

あるのだけれども、雲で見えないだけだ。

煩惱の雲で大事な阿弥陀さまの智慧や慈悲が働くところがぼやけている、と。

181. P353より

弥陀（mita）は計算するという意味ですから、阿弥陀（Amita）は計算できない、数え切れぬという意味です。それに阿弥陀さまがあるとか無いとかいうひとがいる。また、阿弥陀さまの意味を知らずにアヘンだなどといっている。

こういう話ひとつでも、一口でいえば、阿弥陀さまのおかげじゃないですか。

これとこれと条件を挙げていったら、いくら挙げて、これで全部だといえぬ。

それだけのことです。数え切れぬという意味です。

空でもそういう意味です。阿弥陀さまのことです。

空は、先ほどお話しましたようにインドの言葉でシューンヤター（sinyata）といって、無自性だといわれている。自性がない、自分の手柄じゃないということです。

182. P355より

一者というお話で、自然だと申しましたが、みなさん、この指一本でもつくれる人はいない。

いくら工芸の達人でも、これが折れた、代わりをつくってやろうという人はない。
何百万円出しても、お金じゃつukれない。自然のおかげです。
一本の指が動かぬと、ほかの四本じゃ十分な仕事はしにくい。
わたくしは世界一の金持ちになるよりも、このご本がそろっている方がよっぽどいい。
それで、五本でなければできぬような仕事をしている。
だから、我われが生きているということは、生かされているわけです。
生かされなければ生きることはいできない。

183. P 355より続き

空気だって、自分でこしらえて吸わないといけなかったら、大ごとです。
一者とは、そういう大自然の命のありとあらゆる方面から、花が咲くにも、鳥が飛ぶためにも、人間が毎日仕事ができる上にも、どのおかげも受けているということです。
手のおかげも、頭のおかげも、吸う空気のおかげも、照らされているお日さまのおかげも、もうそれは言葉がないから、みんな挙げられはしません。
まだ人間がつける言葉のない自然現象はうんとたくさんある。

184. P 356より続き

だから、アリストテレースの本を読んでも、
言葉が足りない、言葉がないということをいい通しにいつている。
独創的な思想家ほどそのようにいう。
人間が言葉にしているのは、ほんの十分の一もありはしません。
あとは言葉がない。それを心で感ずるのです。
だから、心の感ずる深さとか豊かさは莫大なものです。

185. P 357より

「速やかに生死を離れん」というのは、サトリのことです。
それで、『般若心経』でも、無がたくさん出る。

結局、『般若心経』は、無一サトリのことをいっている。
それは生死を離れることです。
離れるというのは、迷いの中に巻き込まれないことです。

186. P 358より

私どもは、たとえ相手がどういう態度に出ても、それを生かして行って、
そして自分のためにも、世のためにもなるように生きる。
そのことを南無阿弥陀仏といのです。口先だけでは何でもないが、言葉は、心がそういう形をとることですから、お念仏を大事にして、みなさんそれぞれの一生を豊かにする。マイナスの批評をされてさえ、それを生かして、後世もそのおかげをこうむれるような道を一人ひとりなりにつけてゆく。それをわたくしは第二のルネッサンスといっている。

187. P 359より

一人ひとり、みんな自分の程度にしかわからぬ。
だから、他人がそういっているから、そういうものだと簡単に決めずに、他人のいうことはその方のことで、自分は、自分を豊かに、他人さまからたとえ批評されても、それを生かして、そのおかげも実らせていくのが大切です。

188. P 359より

戦争に負けて、わたくしは原子爆弾で死んで当たり前だった。
隣の方は駄目だったのに生かされている。
おかげで、またみなさんにこういう話もできる。
わたくしが原子爆弾に遭わなかったら、お寺さんになっておらぬ。
それまでなっほしいといわれたけれども、ならなかった。
いまもなっほいなければ、みなさんにこうしてお会いできません。
お会いできるのは原子爆弾を投げてくれたおかげです。
しかも、わたくしの頭の上に投げてくれたおかげです。
投げてもらいたい人は一人もいないでしょう。
だが、そのように生かしていけば、何でも生かされぬことはない。
百倍も千倍も生かすことができる。
どうかみなさん、そういうように心豊かにすべてを生かすのです。
小さく争ったり、戦争するといったことは、もう今後一切できないし、やめる。
自分ひとりでもいい。わたくしが、今、そうなっているので、日本中でも、世界じゅうで

も、その道がすでについている。それで世界が決まるじゃないですが、道がついただけは豊かになっていきます。そういう豊かな世界が広まっていけば、本当に文化的と言える生活じゃないかとおもいます。

189. P364より

徳川家康公（1542～1616）の先祖は松平氏ですが、あのころは小競り合いが多くて、何万と人が死ぬ騒動につながって、いろいろ困った現象が起こったときです。その騒動も静まって、松平家四代のときに大樹寺（だいじゅじ）というお寺を岡崎に建てた。今は東岡崎が非常に発達しまして、二つ並んで大きな町になっていますが、大樹寺は、家康公の祖先が祀ってあるお寺です。家康公自身も人質として今川家の大高城にいたときに、今川勢は桶狭間で織田信長公との戦いに失敗した。これはもう殺されるにちがいない。それならば自裁するより仕方がない、自裁するなら、先祖の墓の前がいいというので、大高城から大樹寺へ急いだ。墓の前で死のうと思ったところが、大樹寺の住職 登誉（とよ）上人が偉い方で、むだに死んでも何のことかわからぬ。強盗・野盗のごとき武士ではなく、人々を援け護る菩薩の武士たらんと念仏せよ、と五重相伝の簡単なのをされた。そうして、その寺男、納所（なっしょ）といいますが、七十人力はあるというような力が強いのがいて、山門の思いかんぬきを片手で振り回し、片手で家康公の馬のくつわをとって、門前がもう敵でいっぱいというときに、わざと自分の方から飛び出した。そのかんぬきは今も大樹寺の本堂の左側に祀ってあります。敵軍は、大將が飛び出すぐらいだから、よっぽど多くの兵が寺の中にいると思って逃げ出した。それが、家康公が天下を取るきっかけになった。大樹寺で念仏をされたのがもとです。

190. P365より続き

それ以来、家康公はずっと念仏を忘れなかった。で、また途中で命を拾うのです。「(東)海道一の弓取り」という名声を得た姉川の大合戦（1570）でくたくたに疲れて、野戦陣地の自分の幕舎でついうたたねをしていた。ところが夜中になって、「今夜のお勤めは・・・」という声を耳にしたので、飛び起きて、そおと一人で仏間へ念仏に行った。その後へ、小姓として仕えていたのが飛び込んだ。それまでは、いつも隙をねらっていても駄目だった。夜のお勤めさえ忘れぬ家康公です。その夜はつかれきってうたたねしたから間違いないと思って、布団の上からグサッとやったら、仏間へたつた直後で、ものけのからだった。隣で控えていた警固の侍が、刀を抜いた音で飛び起きて部屋に入ると、小姓が殺しに来ていたので、すぐ押さえた。家康公は、寝所の方が騒がしいと思って帰ってみると、平生かわいがっていた小姓が取り押さえられている。どうしたかと聞けば、日頃から目をかけていたその小姓は、武田家からの間者（スパイ）だった。秀吉公とか信長公なら、無論ぶち切りますが、家康公は、この間者は武田家からいえば、主君の命令に忠実な大事な家臣だから、用心して送り届けてやれ、と命じた。

その一言で、家康公のためなら、どこまでも戦いたいという気持ちを側近の部下が持つようになった。一方、武田家は家康公の度量に畏敬の念を抱いた。それが天下を取るもとです。

191. P366より

縁起を担ぐわけじゃありませんが、

わたくしでも、お念仏のおかげでたびたびそういう類のことがあります。

わたくしは、毎日、原稿を書いています、学生時代と同じように今でも勉強している。

また、それぐらいしないと、読まなければならぬ

本が山ほどある。拾い読みぐらいで間に合うものじゃない。

それが、「ナムアミダブツ・・・」と、本をあけると、

探そうと思うところがぼんと出てくるのが何遍もあって、仕事が何とかまとまってい
く。 日びそういうことに出くわして、命も拾っているし、けがもせず済んでいる。

192. P367より続き

阿弥陀さまの智慧や慈悲に照らされて生きるのだと簡単に言ってますが、

具体的に言うと、そういうことが毎日に何回もあります。

夜中に目が覚めるのも、そういうことで目が覚める。

いちいち申しませんが、家康公がそれぐらいあって当たり前です。

まぐれ当たりだろうと思う方もあるが、それはご自分がまぐれ当たりしか知らないから
です。わたくしは、そういうことがない日はないくらいだから、それぐらいのことはある
だろうと思います。 だから、何事でも、受け取るひとの程度しか考えられない。知らない
ことはわかりませんからね。

193. P371より

英彦山は、昔からの霊場で、わたくしも、そこで念仏会（ねんぶつえ）のお話に行っていたことがあります。また、福岡県下の中学校の先生方が全部集まる会があったりして、講演したこともあります。行ったとき、五、六人の先生方が墨をすっているから、なぜかなと思ったら、講演が済んでから、わたくしに字を書かせるためでした。そこで、七、八十枚書かされました。習字の先生がたくさんおられるから、墨をすったり、版を押したりみんなしてくださるので、わたくしは書くだけです。そういうことも思い出しますが、その英彦山で、二祖上人が追恩の念仏をしておられると、博多湾に善導大師（613～681）という中国唐代の高僧のお木像が流れてきたと、念仏中に感じられた。簡単に靈感といいますが、行ってみると、実際に流れてついていた。それが、今、久留米市にある善導寺という浄土宗の大本山のご本尊さまです。二祖上人が英彦山で念仏されていなかったら感じられなかったかもわからない。念仏をするというのは、阿弥陀さまと一緒にすることです。そうして阿弥陀さまの智慧や慈悲にじかに照らされて自分に靈感が湧く。

194. P 372より続き

靈感というと、あるかないかわからぬとおもわれるかも知れないけれども、簡単に言えば、靈感しかない。

ほかのことは、自分勝手にあだ、こうだ、いい、悪いと思っているだけで、いいと思ったことがちっともいいことはない。

靈感からは後で変なことが出てこぬ。実際、二祖上人が博多湾に行かれると、善導大師のお木像が流れ着いた。それを久留米の善導寺の本尊さまとして、あの大きな寺が建った。いまも続いている。だから、靈感といっても、いいかげんじゃない。

損得で生きている方は哀れなものです。一生涯何もならぬ。念仏で生きてだけが取り柄です。わたくしは七十年間、念仏して、それだけは断言します。だから、みなさんにこうしてお集まりいただいているのはありがたいなあという気がします。

195. P 373より

島根県は日本の文化のひとつの原点です。出雲大社もありますし、あの辺の地名はみんな朝鮮半島の言葉です。生で朝鮮半島の文字が入ってきた。

もう一つは、わたくしが今いる京都府下の寺です。高麗大寺（こうらいおおでら）の跡ですが、その寺は日本にまだ法隆寺さえもできてないときに朝鮮半島からの渡来人が建てた大寺です。相楽郡（そうらくぐん）というのは、音写といって、今のソウル（漢城）

の発音を写している。相楽と書いているから、あい楽しむという意味にしかとりませんが、朝鮮半島の言葉です。

同様に、ナムアマダブツは中国語じゃなくて、インドのサンスクリット語です。ナミはサンスクリット語で曲がる、つまり、頭を下げるという意味です。何に頭を下げるかで、その人の値打ちが決まります。阿弥陀さまに頭を下げるのなら天下一ですが、お金に頭を下げると、そのときは間に合っても、後で何倍も困ることが起こる。それなのに、そうしてもお金の方に頭を下げる。それで、たいていの方が一時はよくても、後はだめです。間に合わせにはいいような気がするのですが、世の中は公平で、後がだめなことは、見かけがちょっといい。見かけがよくないことは、後で実を結んでいく。

196. P 381より

日本の仏教でおもい浮かべるものというのと、例えば、奈良の大仏さまと子供でも言います。まったく奈良の大仏さまは日本の仏教の上で大事だし、だれでも知っているといえば、奈良の大仏さまのことでしょう。

ところが、以前にお話しましたように奈良の大仏さまは、手本となる大仏さまが、六、七十年前に中国にできている。その大仏さまの製作監督をなさったのが、善導大師です。善導大師がおつくりになったのです。だから、奈良の大仏さまといえば、そのもとも考えなければならぬ。勝手にできたのじゃなくて、手本になる大仏さまがあつてできたのだから、そういう歴史的な文化関係を無視しているから、中国に戦争をしかけてみたり、ばかにした。

197. P 382より続き

ばかにはできぬ。日本の仏教といえば、奈良の大仏さま、そのもとは、六、七十年前に中国でできておる。だれがつくられたのか、善導大師です。日本人が一番よく知っていなければならぬ方です。それを、ほとんどの人が知っておらぬ。日本の教育はそういう傾向が強い。それでまた、北朝鮮や韓国の方がたえお軽く見ようとしたり、後で困ることを平気でする人もいる。

それは日本人が悪いんじゃない。日本の教育が悪い。中国や朝鮮半島との文化関係を歴史的な文化関係で教えていったら、悪口を言ってばかにしたりできません。そう教えぬから、知らずに、つい間違ふ。これからは絶対にそういうことはいけない。文化関係は、昔からそういうように、離れぬ関係でつながっている。

198. P 382より

明治時代には、お寺がみんな維持できなくなった。なぜかという、政府が寺をつぶそうという方針だったからです。廃仏毀釈といって、仏教を排斥してぶち壊そうという方針で、政府が真っ先に立って、国分寺というような日本の一番大事な寺をみんな焼き払った。

明治の初めだけじゃない。今度は太平洋戦争に負けたから、天皇陛下をカトリックにするとか、仏教をおしまいにするとかいう政策が占領政策の中にあった。それでも仏教をつぶすことができぬから、こういうように続いている。

そんな自分勝手なことをしようとしても、できるものじゃない。国を挙げてしようとおもってもできないのだから、自分勝手というのは破壊だけです。

ものごとは、多くのはかり知れないいろいろなつながり合いで進んでいるのですから。

199. P383より続き

そのつながり合いのことを阿弥陀さまと言う。阿弥陀さまという仏さまを別に考えるから批評が起こる。自分は阿弥陀さまを信じなくてもいいとか、ナムアミダブツ以外でもいいとかいうことになる。そんな南無阿弥陀仏を一体だれが説いていますか。

わたくしがこのお話をできるのも阿弥陀さまのおかげです。というのは条件が計算されないということです。挙げ尽くされぬということです。それを阿弥陀さまという。絵や彫刻になっている特定の恰好をしている方が阿弥陀さまじゃない。

禅宗で円をかくのがそういう意味です。阿弥陀さまをかいている。

200. P385より

前席で言ったように、富士山といっても、いろんな感じ方、見方がある。富士山を見るというのでも、自分の程度にしかわからないのだから、それを富士山と言っていいかどうか。何千万とあるうちの一つを言っているだけのものだから、それを言った中に入らない。

知らぬということを知らないといけない。わからぬということをわからないといけない。

それでないと、自分の思うとおりにしようという自分勝手にどうしても出ます。それがけんかの元になる。戦争になる。なったら、今はもうおしまいです。昔なら多少のことで済むけれども、もうこれからはおしまいです。

201. P387より

わたくしは昭和四年（1929年）にヨーロッパに行ったのですが、パリの博物館に、始めの頃の仏像が特別に集めて展示してある一角があったので、見に行くと、みんなギリシャ人のような顔をしている。服装までそうです。それは、ギリシャ人がつくったからです。

アレキサンダー大王は、ギリシャから中近東のペルシャやその他の国々を征服の後にアフガニスタンからインドに攻めてきて、インドに一番近いパキスタンのガンダーラというところをまず占領したので、ガンダーラの仏像が一番古い。それは、ギリシャのアポロの神さまに似ている。そのとおりをインド人が作り出すと、今度はインド人の顔に似てくる。（マトウラーの仏像）ものは、ギリシャ人がつくれば、ギリシャ人自身しかつくれない。子供が絵をかけば子供らしい絵しかかけぬ。人は自分の絵しかかけない。他人の真似をすると、真似をしたような絵しかかけない。結局、つくったひとの形です。

202. P388より

仏教の仏像がギリシャ人の影響を受けているけれども、『般若心経』もそうです。

わたくしはギリシャ哲学が専門だから、これはギリシャの影響だと即座にわかる。

それを、ギリシャ哲学を知らぬ方が詠まれると、ああ、これがインドだとか、これが日本の仏教だと思っておられるだけです。手前味噌というのはそういうことを言う。そういう教育をしていると、何もなりません。

203. P389より

観音菩薩という言葉は、国語の教科書に出ています。

『般若心経』を読むと、それは観自在菩薩と書いてある。

どう違うのか。もとのインドの言葉は、アヴァローキティシュヴァラ（Avalokitesvara）です。イシュヴァラというのは、自在、自由ということです。何が大事といっても、自由ほど大事なものはない。それが出ているのに、なぜ観音というのかというと、シュヴァラというと音という意味です。イシュヴァラというときは自由です。それがアヴァローキタとくつつくので、自由か音かわからぬようになる。音で聞いた方では、観音と言う習慣がある。書く字はアヴァローキティシュヴァラ・自由と書いてあるから、観自在菩薩です。もとのインドの言葉を訳したと言われる玄奘三蔵（600～664）の東洋最大の旅行記である『大唐西域記』を読むと、観音というのは間違っていると書いてある。本当に間違っておるかということ、そうとも言えぬところもあるが、とにかく音と自由というのは別のことです。

204. P 395より

今、代議士であろうが、教育者であろうが、実業家であろうが、人間でないような方が多い。そうではなしに、自分も人生を全うしたい、そして人さまにも人生を全うしてもらいたい。自分と相手に対立を超えて、生かし合いを何事にもよらずしていく。

そういう生き方がある。わたくしはそれを今まで七十年しておる。

それで、今度「無二的人間の形成」という趣旨によって空外記念館ができるのです。

205. P 396より

みなさん、野良犬と走ってみなさい。野良犬のほうが速い。水泳が早いといっても、魚とやってみなさい。魚でも、野良犬でも、人間より何倍も速いのに、刺激剤まで飲んで金メダルをもらったといって、それが文化ぐらいに思っている方もおられるが、それは文化じゃない。好きなものをする事まで邪魔する必要はないが、人間が人間になるには、魚や野良犬にはできぬことをしなければなりません。全宇宙を挙げて人間の進化をここまで進めてくれたのだから、そのために動物にはできない、人間で初めてできることをする。

人間で初めてできることというのはどういうことか、無二的人間になるよりほかない。相手を生かし、自分も実りを全うして、この大宇宙が本当に人間のあるおかげですばらしいというような世界にしていけるのだから、していこうじゃありませんか。

206. P 400より

『和語燈録』は、日本で最初にできた平仮名まじりの板本だから、出版の歴史で一番有名なはずですが、日本人で知っておられる方は少ない。その原本（元享元年・1321）が京都の龍谷大学に残っております。すばらしい本です。

わたくしは。昭和十五年（1940）ごろ、それを写すために毎月、龍谷大学に通っておった。なぜかという、今、出ている本は、間違いが多いからです。もとの本があるのだからそのとおりに修正した。そうして神田の本屋へ印刷に出して三校をすませて本になる直前になったとき、米軍機の東京空襲で原稿も本も焼かれてしまった。そういう例は他にもたくさんある。

わたくしは西洋哲学者ですが、東洋や日本のこともその専門の学者がおやりにならないほどやっている。何も出まかせを言っているんじゃない。そこまでしておらなければ仏教の話はできない。

207. P401より

承安五年（1175）に、法然上人が善導大師に会われた。

善導大師は唐の時代の方ですから、そんな五百年も前の方と会えるかなと思われるでしょう。しかし、法然上人は、四十三歳からずっと八十歳で亡くなるまで、南無阿弥陀仏ナムアマダブツで、阿弥陀さまの智慧や慈悲に照らされ通しの生活をなさったから、五百年前でも、千年前でも、お釈迦さまとでも会うことがおできになる。永遠を生きる方だから、そのときの自分勝手に間に合わせをした方じゃないから、お釈迦さまに会うこともできぬことはない。我われは、お釈迦さまに会えるような仏教しか考えておらぬ。善導大師にお会いしても、ああそれに限る、それしかないというような仏教しか説いておらぬ。

そういう生活をしておれば、五百年離れていても、法然上人が善導大師に出会いなせる心境を、わたくしは納得できる。自分がそういう生活をしているからです。

ただ、自分勝手をして、他人はどうでも自分さえよければいいというような生活をしてると、そのひとの程度でしか物事はかわらぬのだから、わかるはずがない。

208. P405より

人間の心は、声として言葉にならなければ、文化とはならない。

言葉にならなければならぬことがたくさんある。しかし我われが言葉をつけているものは、十のうち一つも当たりはしない。つかまえることができない。言葉ができぬのです。

だから、人間が言葉として今、取り組めるもの以外、これから取り組まなければならぬことにも取り組んでいるのが有力な学者です。そういう方は、言葉が足りぬ、言葉がないということ、しばしば言っています。プロテーノスも、一者を挙げるときに、一者について言えることは、そうじゃないということしか言えぬと言っています。

209. P406より

『観無量寿経』を書いたのはだれかわからない。お経はだれかが書いたのだけれども、

どのお経も、サインをしておらぬ。お経が書ける方は、ノーベル賞ぐらいのものじゃない。ノーベル賞の学者をみんな集めても、『般若心経』のひとつも書けはしません。なぜかという、言ったことがすぐつまらぬことになる。今でもやり直さなければいけないことが多い。やっていると欠点が出てくる。人間の生活を邪魔するような影響が出てくる。

お経は違います。どのお経でも永遠の文学です。永遠の哲学です。あれ以上の表現はだれもできません。『法華経』など特にすばらしい。世界一の文学者が書かれたのでしょ。しかし、だれが書いたのかわからぬ。

仏像でも、本当にいい像はだれが彫られたのかわからぬ。奈良にある特級の仏像は、つくられた方の名前はだれにもわからぬ。鎌倉時代ぐらいからわかるだけです。

だからサインは要らぬものです。例えば、空外といったところで、わたくしを知っている方ももうすぐいなくなる。何も名前を書くことはない。空外でもだれでも構わない。ゴッホのだからいいといって、調子に乗ってお金を出して買いなさが、それよりいいものは他にたくさんあります。文化とはそういうものです。

210. P410より

極楽とは、インドのサンスクリット語で、スクハーヴァティー (sukhavati) といいます。

スはい、クハーは空(そら)、おてんとうさまという意味です。インドは農業国ですから、おてんとうさまのおかげがないと作物ができぬ。つまり、生きていけぬ。

日本のような狭いところは、すぐ隣から助けてくれますが、大きな国ですから、ひとに助けてもらうことはできない。作物ができなければ、死ぬだけです。命にかかわる大事なことで、おてんとうさまがよくなければ、毎日が暮らせぬ。それで、おてんとうさまのよいのが一番楽しいことになるので、スクハーを、楽しみと訳する。ヴァティーは、有(あ)一(いつ)持(も)つ(つ)ですから、楽有(らくう)と訳してあります。

そういう楽しみがもてるというのは、自然のおかげを受けられること、自分の生活が恵まれることです。

それが一番大事だというので、極楽と意識したわけです。

211. P411より続き

極楽とは、お浄土ともいいますが、それは自然の恵みですから、いい人も悪い人も平等におかげを受けていく。極楽のもとのインドの言葉を知らないと、極楽というところが別にあって、そこへ行くような気が起こるけれども、そんな極楽はインドでは説いていない。おてんとうさまの自然の恵みが命を保っていく上に一番大事なことから、それ以上の

楽しみはないという意味です。

それなら、貧しい人でも、悪い人でも持つことができる。

お金持ちだけが独占するような楽しみは、楽しみと考えない。

お金があるから人に殺されたり、何倍もひどい目に遭うこともある。

自然のおかげを得られさえすれば、みんなが命の心配なしに生きられる。それを言う。

わけを知らぬ人が勝手に、極楽なんてあるものかと言うけれども、そんなことはだれも説いてはおらぬ。あるというのは、どこかにあるという意味じゃない。

212. P 413より

空気は、みんなと一緒にしか吸えない。水でも、降った雨を自分だけが勝手にするわけにはいかない。地球がとまると、みんな死ぬわけですから、回るおかげを自分ひとりが余計に受けるというわけにはいかない。

自分の生きられるおかげは、好きなひとに対しても、嫌いな人に対しても平等なわけです。それを浄土というのですから、自然はそのままが浄土です。

自然というと、自然科学とかいうものですから、その方の傾いた考えがあるのですが、そうじゃない。自然は、科学的に取り組める方面もあるが、科学的に取り組める方面は、人間の計算できる程度ですから、万分の一もない。知れたものです。それくらいなことでものごとを決定はできぬ。だから、科学本位の教育は、教育にならぬ。

我われが生きているのには、科学的方面のことも大事だけれども、それはほんの一部分です。自然は、そういう一部分の科学的な方面だけじゃなしに、すべての人がどんな場合でも平等におかげを受けている。命のそのものにつながる自然のことをいう。

老子が言っているのもそうです。仏教では「ジネン」と読みますが、同じことです。

213. P 418より

広島大学で哲学の教授をしている方が、わたくしが毎月、広島市内の妙慶院でしていた講演を十年間ずっと聴かれて、その筆記を本にして、わたくしに記念にくださった。

ドイツの有名なカトリックの学者がわたくしが講演するというので、復活祭の大事な仕事があるのに、それを他人に頼んで、わざわざ妙慶院へやってこられた。話の後で、一生懸命質問されているところへ、その哲学の教授がこられて、わたくしが仏教とはこういうことだと西洋哲学の立場から説明していたのを筆記された。そして、わたくしの講演を聞いた後、大学に帰ってカトリックの学者といろいろ話をしたとき、キリスト教の問題の解決に取り組むのに非常に幸せでしたといって喜ばれた。

だから、対立的に見る方もおられるが、キリスト教の学者の中にも、相通じて自分の立場を深め、仏教の重点も生かしていく方もおられる。わたくしだけがそういうことをしているわけではない。だから、一人ひとりの思想の深さじゃないでしょうか。自分勝手に考えるのにあえて従わなければならないことはない。

214. P 425より

聖徳太子（574～622）が「世間虚仮、唯物是真（せけんこけ、ゆいぶつぜしん）」と言われた。

世間虚仮というのは、どういうことか。朝日新聞を読むと、こんなになるかなと思う。日本経済新聞を見せていただくと、嘘を書いているわけではないが、やはり現代の新聞です。いろいろな方がどれが本当だとか、どうでなければならぬということをいろいろに言っているけれども、それはその方の程度で言うことです。

地球上には西洋も東洋もあって、みんなお互いに影響しあって進まなければならぬのだから、全体がわからなければ行く手もわかりはしません。全体を知るためには、昔の西洋も東洋も知っておらぬと、これからどういうふうに進むかはわからない。

215. P 425より

我われにできることは、世間虚仮といわれるような、お互いに対立したり、自分勝手をしたりしたくない。

犬でも好きなものをやれば尾を振ります。五億円もらって尾をふっているのは人間じゃない。人間だから、人間になった方がよい。犬のまねをするために我われはここまで進化しているのではないのですから。いくら進化しても、動物的な本能はあるけれども、動物でもやることを、ごまかして自分勝手をしていることが、人間の面目ではない。人間として生まれた値打ちじゃない。それをいっぺん考えなければいけません。

216. P 427より

言葉を、意味を知らずに、わけがわからず使っているなら、それでは人間の値打ちがな

い。

人間の値打ちはどこにあるかということ、言葉を使うことです。ただほえたり、鳴いたりするだけなら、動物でもしておるけれども、言葉を使うのは、人間にしかできない。しかし、人間の使う言葉は、昨日も言ったように、百必要なうちでまだ一つにも足りていない。それぐらい人間は幼稚なのです。だから、進んだ方は、言葉のない世界に取り組んでいます。

218. P 427より続き

プロティーノスは三世紀の方ですが、わたくしは、西洋の古代ではプラトーン、アリストテレースの次に人間らしい方だと思います。プロティーノスは、初めは新プラトーン主義といって、アイデアの超越を問題にして、昇り途（みち）をきて、それがひと通り済んでから、アリストテレースの研究に入った。アリストテレースは降り途で、仏教でいえば法身（ほっしん）、真言宗などの立場です。念仏は報身です。いっぺん昇らなければ降りることもできない。だから、プロティーノスはいっぺん昇って、それから降りて、一者を考えた。

ギリシャ語でト・ヘン（to hen）といいますが、ヘンというのは一です。ただ一と言っていたのでは、一、二、三の一だと思ってしまうので、一なるものと中性の定冠詞であらわしている。それを法身、報身、応身で説くのが、仏教の立場です。

みんな阿弥陀さまからきているのだから、花一輪でも、鳥一羽でも、人間一人でも、すべて自分勝手になっておるのじゃない。大自然の命のおかげの条件がすべてそろって、花として咲いておるのですから、一輪の花が咲く中には、大自然の命の条件がみんなある。

花だけには雨が降らぬでもいいとか、お日さまが照らさぬとか、地球は回らなくても構わぬということはない。人間が生きていくにも、その条件は同じです。

219. P 428より続き

それを、プロティーノスは「パンタヒュー」到るところにありと言った。

一人ひとりがそれぞれに、大自然の命の条件が備えられていなければ、毎日の暮らしはできない。上下はない。昨今、差別などを問題にしているが、わけがわからずに言っている。だれが差別できるかということです。

命の条件を十が十、千が千、みんなそろえていなければ、花一輪も咲きません。

ですから花を見ておっても、拝みたいような気持ちになる。どの花でも仏さまです。野

菊は野に咲いているけれども、その咲き方は、いくら鉢植えで気張って植えても、それよりもずっとよい趣きを持っています。人間が手を加えるだけ安物になる。なぜかという、人間を大自然の命と比べればもの数ではないからです。谷間に咲いている藤の花を見ると、大自然そのものを見るようです。

220. P 428より続き

それを「パンタヒュー」到るところにありというのですが、それだけ、どこにもない。それはそうじゃないですか。野菊の咲いているのも、全宇宙の咲く条件がみんな備わらなければ咲かぬのだから。花一輪が咲くのと、人間一人が生きるのとは別はない。人間も、その花一輪が咲く条件をみんなそろえなければ生きられぬ。しかし、人間はまた人間で、ここまで進化して、言葉まで使えるのですから、人間が人間になれるような条件は、花にも、鳥にも、魚にもない。だから、どこにもないのです。

221. P 438より

どこにもないけれども、到るところにある。
なぜなのかという、わたくしが生きるために、話すためには、全宇宙の命の条件がみんなそろわなければいけない。しかし、全宇宙をじかにぶつけることはできません。わたくしは花じゃないので、花の咲く条件は人間にはわからぬ。植物学者は、千万分の一ぐらいはわかるけれども、ノーベル賞をもらってもわからぬというのが、正しい言い方で、わかったように思っているのは、お人好しです。

その証拠に、電気のおかげで便利になったけれども、その電気を使うためのマイナスが、今日、地球をおしまいにしている。地球をおしまいにするぐらいなら、電気なんか使わなくてもいい。それをどうしたらいいかが問題になっている。後になって気がつくのだから、少し遅い。

222. P 446より

法然上人だけです。ナムアミダブツを説くのに、速やかに生死（しょうじ）を離れるとおっしゃったのは。生死を離れるとは、何度も言うように、サトルことです。
生まれて死ぬだけなら、動物と同じで、人間の値打ちはないから、それを迷っておると

いう。

わたしは迷っておらぬと言う人がほとんどですが、たいていは迷っておる。

生まれて死ぬまでの間に、自分勝手をして、よかったと思ったのが悪いことになったり、悪かったと思ったのがいいことになったり、わけがわからぬ一生で終わっている。

そうでない人をだれかご存知なら、どなたがおられるか考えてみなさいませ。

たいていの方がわけのわからぬ一生です。

223. P450より

一生涯の仕事は、自分が何になるかが問題です。

いくらお金を貯めても、それはお金に値打ちがあるので、その方に値打ちがあるとはかぎらない。人間は、その人間自身に値打ちがないとだめです。総理大臣になって、えらい方だというけれども、総理大臣という役が最高だから、値打ちがある。なった方の中には、ろくでもない人や感心せぬような人もある。値打ちがあるのは、その役とかお金じゃない。それを持っている方の中には値打ちがある方もなさるが、ない方が多いぐらいのもので、家の中ではけんかが絶えぬ。世の中も争いばかりです。

わたくしはなるべく他人とは争わない。原子爆弾を投げられても、あんなものに遭いたいことはないが、そのおかげでお坊さんになれて、お坊さんにならなければできない仏縁を見直していくことができ、ありがたい。災難に遭ったおかげを生かして、世のためになり、自分もましになると、そういう生き方でなければ、人間の値打ちはない。

それを無二的人間というのです。

224. P458より

女子は女子として、男子は男子として、老人は老人として、青年は青年としての生活が全うできる。青年に老人のまねはできないけれども、老人が青年のようにはいきません。ひとによって、元気な方もあるし、いろいろです。一人ひとりです。自分ひとりが、自分なりに実りのある生活を全うしていく。また人さまにもそうになっていただけるように、お互いの関係でつながり合う。自分勝手をする、他人と相反しますから、他人に邪魔をされることもある。

簡単に言えば、人間は、十里歩けるところを一里ぐらいしか歩いておらぬ。それではもったいない。そうでなくても、百年ぐらいしか生きられぬのに、十里歩くところを1里しか歩かず暮らしたのでは、生きた甲斐がない。それでわたくしは他人と対立することは一切せぬ。自分にできることに取り組んで邁進するだけです。

225. P 461より

法然上人、二祖鎮西上人、三祖記主禪師と、お三方とも日本人ですけれども、曇鸞大師（どんらんたいし）（476～542）は中国の方です。善導大師は、初めからずっと特別のつながりがありますけれども、中国では、曇鸞大師の方が先輩で、それから善導大師になる。曇鸞大師が千四百五十年前、善導大師が千三百年前の方です。曇鸞大師が亡くなられたのが五百四十二年で、善導大師は六百八十一年、六十九歳で亡くられました。

曇鸞大師は北魏（ほくぎ）の方ですが、「四論宗の祖」といって、先ほど『大智度論（だいちろどん）』を挙げましたが、他に、『百論』『十二門論』『中論』という四つの論の学者です。『中論』は、『大智度論』と同じ龍樹菩薩の著書です。だから、インド仏教最高の思想家龍樹菩薩の研究をされたわけです。

ところが、曇鸞大師は、体が弱くて不老長生の法を求めておられた。五十一歳（527）のとき、揚子江の南で陶弘景（とうこうけい）（456～536）に長寿の法を聞き、名高い仙人の本をもらった。そして、帰郷途中に洛陽でインドの仏教学者の菩提流支三蔵（ぼだいりしさんぞう）（Bodhiruci）から『観経』をいただいた。ナムアミダブツをすれば、無量寿、永遠のいのちですから、この世の命の長短は問題じゃないというわけで、その不老長寿の仙人のお経を捨てられた。そして、念仏の先輩として、親鸞聖人が、鸞の字をもらわれるような、中国で代表的な浄土系仏教の権威になられたわけです。

226. P 462より続き

賛題で「『業道経（ごうどうきょう）』にいわく」といって、経典の名前を出していますが、このお経が、今、『一切経』を調べてもありません。このときはあったが、紛失したのでしょうか。

『業道経（ごうどうきょう）』では、「重き者まず牽く（ひく）」という。はかりにかけると、重いものがまず引くのだから、もし我われが世間でしたいろんな自分勝手に重ければ、地獄に引かれて極楽から遠ざかる。

地獄というところがあるのではない。ただ自分勝手をして、自分で四苦八苦ししている。

極楽もそうです。極楽という場所はない。ナムアミダブツといって、阿弥陀さまと一緒にいれば極楽です。なぜかという、阿弥陀さまの智慧や慈悲に照らされますから、自分の力ではどうにもならぬことが、何倍も広うに、深うに、明るく暮らせる。それを極楽というだけです。

曼荼羅絵では、いかにもあるように画いてあるけれども、自分の心の模様をああい図にしたのです。インドの言葉でマンダラ（mandala）とは道場という意味です。人生は道場ですから、やはり自分の取り組み方ひとつです。いつも阿弥陀さまと一緒になら、たとえ

病気をしているも極楽です。

227. P 464より

わたくしは胃癌でも、痛みはひとつもない。それでかえって危険です。わかったときは、取り返しのつかぬことになるという場合もあります。だから、わたくしも、本当におしまいになっても仕方ないけれども、不思議にこのようにお話までできる。

世の中は、そう心配したものじゃない。自分が自然に生活していれば、どこからでもおかげを受ける道が自然に開ける。わたくしが無理に頼むんじゃない。頼んでも、そう簡単に診てもらえるものじゃないでしょう。そういうわけで、病気をしておっても、別段痛みはないですから、何ということはない。ただ危ないだけのことです。(笑)

228. P 465より続き

例えば、飛行機に乗って落ちる方もあるし、自動車に乗っていてぶつかる方もあります。わたくしは、鉄道がストライキしていても、その特急列車だけストライキ中でも出て、行けたのです。向こうは、ストライキだから来れないと思っておられるのに行ったものだから、びっくりされた。だから、人間は自然に生きておれば、本当に心配はない。

わたくしが知っている方に、弘法(こうぼう)さんという方で、息子さんが良寛という名前の方がおられますが、その方の主人が、北海道で舟に乗ろうとしていた。ところが、これは沈没すると思ったから、どンドン列をなして乗り込んでくる乗客をかき分けて外に出た。そうしたら、案の定その舟は沈没してみんな駄目だった。それを、押し分けて乗るひともある。(笑)

229. P 466より続き

飛行機が落ちたあるときも、子供は乗らぬ、と言ったのに親の慈悲だ、いっぺん飛行機に乗せてやろうとして、乗せたら、親子とも一緒に亡くなった。自分勝手はするものじゃない。子供が乗らぬと言ったら、乗らなくていい。慈悲は押しつけるものじゃない。子供の

言うようにしてやった方が子供も喜ぶのです。自然ということを知らぬ。

だから、『業道経』では、「重き者まず牽く（ひく）」という。自分勝手は、いかにも重い。そのときのわがままで、落ちる飛行機に勝手に乗ったり、沈む船に乗っているわけです。これは、たとえ死んでも、それまでのことです。他人を恨むことはない。

そのことを曇鸞大師（どんらんたいし）は、何とか説明したいと思われた。

「五逆十悪の繋業（けごう）等を重しとなして・・・」とおっしゃられています。

230. P 466より続き

『観経』を読むと、人間の品格は、上品（じょうぼん）、中品（ちゅうぼん）下品（げぼん）とあって、上に上中下というようにまた三つづつ上中下とありますから、九品の浄土というのですが、浄土が九種類あるわけじゃない。人の生き方に別をつけることはないけれども、二重に考えて、念を入れている。一心十界ですから、それぞれの心持ち、その人の癖がどこかにある。

それで、下下品（げげぼん）ですが一番自分勝手をする人が、ナムアミダブツと言ったところで始まらぬという考えがある。

「十念をもって軽しとなして、罪のために牽かれてまず地獄に墮して、三界に繋在（けざい）すべしというは」

と。繋在（けざい）とはつながれることです。三界というのは、欲界、色界、無色界です。

「今まさに義をもって軽重の義を狭量（きょうりょう）すべし」

軽いとか重いとかいう筋を明らかにしていく。

「心にあり、縁にあり、決定（けつじょう）にありて」

と。心は無論大事です。しかし、自分の心だけかということ、もうひとつは縁、つながりです。

自分は乗ろうと思っても、友達に乗るなど引っ張りおろされたから、助かることがあります。

友達が引っ張ってくれるというのが縁です。

それから決定と、その三つの点から考えて、「時節の久近（くごん）多少にあらず」というのです。

P 468より続き

長い間、自分勝手をしておったのだから、今、五重相伝を受けても、ナムアマダブツと言ったぐらいでは心がそのように決まるものじゃない。聞いているときはそう思っても、あさってになると、また自分勝手をする。

長い間の癖だから、止みはせぬとおもう方もある。

曇鸞大師はそれを本気になって説明してくださっている。

それはそうだと言っておられる。

ご自分の健康が心配なものだから、わざわざ北魏から揚子江の南まで行き、陶弘景に会って健康法を習って長生きしたいぐらいに思っておられたから、十分説明すれば、わかってもらえるというお気持ちがある。

それで、第一の心という問題、二番目の縁という問題、三番目の決定という問題を説明された。

P 4 6 8 より

最初の心を説明すると、

「云何（いかん）が心にある」

「彼（か）の造罪の人は自ら虚妄転倒（こもうてんどう）の見に依止（えし）して生じ」

とあります。

自分が勝手にそう思っているだけで、何もそういうようになるわけではない。

五億円もらえば、得だというように思っているだけで、そこだけつまみ出せば、五億円もらうのだから得ですが、もらったためにどういうふうなつながりがついてくるかということを考えておらぬ。これは浅はかなものです。

そのときだけは得だろうけれども、こうなりはせぬかというようなことを考える友達が一人いてくれると、馬鹿なことをするなと止めてくれます。秘書でも、それはだめですと言うひとがおればいい。とにかく、腹を決めて止まると、止まらぬことはない。それを秘書までが一緒になってやる。しかし、秘書が悪いのじゃない。

それを虚妄転倒（こもうてんどう）の見というのです。

自分がそう思っているだけで、ひとつもよりどころがありはせぬ。

P 4 7 0 より

『般若波羅蜜多心経』は、般若の智慧です。

波羅はパーラ（para）というインドの言葉で、彼岸と訳せる。蜜多（mita）というのは到れた。行くであろうではない、着いたという過去形です。だから、パーラ・ミタとは彼岸

に到れたということです。

それが肝要ですから、人間は彼岸にいかなければ、生きている中に入らぬ、うろうろして、迷っていることになる。損だ得だと言っていたら、死ぬまで迷っている。

なぜかという、世の中には損だ得だということはない。

世の中には因縁（いんねん）しかないというのがお釈迦さまの説です。

一つつまめば、多い少ないということがあるけれども、今少なくとも、後で百倍になることがあります。今は他人の十分の一でも半分でも、ありがとうと言っていたら、あの方は本当に自分勝手に言わぬ方だということになって、他人（ひと）さまが信用しますから、後で百倍千倍になるかもわからぬ。

名古屋で一番の木綿問屋があります。なぜ一番になったかという、雨が続いて木綿が仕上がらぬというときに、どうしても要る方があった。そのとき買いに行くと、番頭が出てきて、値段はちょっと主人に聞いてきますと言った。買いに行った法は、雨が長く降っているから、高く売りつけるのじゃないかと思っていたら、番頭が相談して戻ってきて、主人が言うには、雨が長く続いて相場がわからぬから、前の値段で買ってくださいといった。そのひと言で、あの店は不思議なほど信用できるということで、名古屋で一番の木綿問屋になった。

そのときは損です。倍ぐらいには平気でだれでも買うのだから、そのときだけ考えれば損のようだが、何百倍という得になった。損得というのはありません。

そのときだけ引き離して勝手に考えればあるようだけれども、損得は絶対はない。

物事は続くものです。そうしたことによって何が起こるかです。

あいつは油断がならぬということになったら、自分が得られる利益でも得られないようになる。

それぐらいのことは、子供じゃないのだから、人間ならわかって当たり前です。

お釈迦さまがサトラレタというのは、それです。

235. P 471 より続き

縁起といって縁（よ）って起こることでひとつだけというものはない。

つながり合うということです。

たったそれだけですが、それがナムアマダブツという言葉になる。

そのかわり合いというもの、ここまでということはない。どこまで続くかわからぬ。

それを念頭から離さなければ、阿弥陀さまがおられるもおられぬもない。極楽があるもないもない。

そんなことを言っているのじゃない。心で決まる。

236. P 472より

初めは靴と糶（もみ）かえるというように交換していたのが、面倒くさいから、お金ができたまで、マルクスの『資本論』（1867）にもそう書いてある。

それを、お金がいかに大事なことに思うのは、迷いだと思います。

「この十念は善知識の方便、安慰（あんい）に依りて実相の法を聞くことによって生ず」
わたくしがこうして五重相伝でお話させていただいているのは、実相の法です。

簡単に真実といってもいい。それをお釈迦さまは縁起といわれた。

縁って起こるといのは、つながりが、ある限界までというのじゃない。

どこまでつながるかわからぬから、後になると、その縁起のことを空（くう）と言いつつ出した。

また、おかげだから、阿弥陀さまとも言いつつ出した。

みんな内容はつながっているのですが、お釈迦さまのときはまだナムアムダブツという言葉ができていなかった。

237. P 474より

わたくしの大事な念仏の友人で、一橋大学出身、全世界の統計学会のメンバーになっていて、日本で代表的な学者ですが、わたくしが神戸に来ると、いつも立派なホテルでごちそうしてくださっていて。ところが、孫と団子を食べたまま死んでしまった。それで、神戸にきてもごちそうしてくれる方がおらぬ。惜しいことをしました（笑）

だからわたくしは、お団子を出されると気をつけている。念仏しながらよくかんでいただく。それぐらい気をつけないといけません。ちょっと心を使えば、そういうことを逃れることができる。だから、団子なら団子、お金ならお金というような物の方で考えても始まらぬ。

「この十念は善知識の方便、安慰に依りて実相の法を聞くによって生ず。一つは実（じつ）なり、一つは虚（こ）なり」

と。ちょっとした違いのようですが、こちらはおしまいになって、こちらはおかげで生きられるのですから、「相比ぶることを得んや」比較にならぬということです。

その例が名高い。

「例えば、千載の暗室に光若（も）し暫（しばら）く至れば、即（すなわち）明朗なるがごとし。闇の室にあること千載なれば去らずということを得んや」

と。千載の暗室とは千年も親代々にわたって身勝手な、自分で自分の首を絞めるような生き方をしているということです。つまり、長い間、部屋を閉め切って、真っ暗やみの中で迷っているのだから、ちょっと障子や戸をあけても明るくならぬかということ、千年や二千年、閉めていても、ちょっとあけさえすれば明るくなる。

これを在心（ざいしん）と名づく」

と。心にありというのです。

在心というのは、自分の心遣い、心がけひとつで、千年間、暗い部屋でも、一枚の障子か窓をあけさえすれば、明るくなるようなものだということです。

238. P 476より

光という言葉は、ギリシャ語でフォースというのですが、プロターティノスの文献を読むと、どのページにもフォースが出てこぬことはないぐらいです。光の哲学です。

クザーヌスの先輩は法然上人だといいましたが、近世ルネッサンスの道をつけたクザーヌスのバイブルの解釈は、どう考えても、みんな光だと言っています。

239. P 476より続き

『ヨハネ伝福音書』が名高い。わたくしは自坊の玄関にヨハネとパウロの有名な絵をかけているのですが、その『ヨハネ伝福音書』の名高い句に、キリストが「自分は道だ」とある。

つまり、二河白道（にかびやくどう）の白道、清らかな道です。

ギリシャ語でホドスといいます。ギリシャの首府アテーナイ、ホドス何何、ホドス何何と書いてある。

何何通りという意味です。

キリストは、ホドス一天国へ行く道だというわけです。

240. P 476より続き

そのホドスも光のことだとクザーヌスは説明しています。結局、我われは自分勝手をする
と、わかったら困るし、真っ暗やみです。本当に真っ暗やみの地獄で生活をしているよ
うなものです。

宗教といっても、光のことです。

今まで自分の心が暗やみでも、窓さえあればいいじゃないかというわけです。

それは阿弥陀さまに通じるころの窓です。

キリスト教も、仏教もない。そういう思想の根本に取り組めるような人の考え方は、古
今東西みんな通じています。仏教がいいとか、キリスト教がいいとかいうのは、素人が言

っていることであって、広うに、深くに考えると、みんな通じている。

真実はひとつしかない。

それは、簡単には心の窓を開くことです。少し大きな心になることです。

241. P 479より

『法華経』がいいとか、『般若心経』がどうだとか、何干とあるお経の中で気に入ったの
を一つ取り上げて考える考え方があります。それも一理あるけれども、ごく下品な言葉
を使うと、お経をつまみ食いしている。

経典成立史という学問が、西洋人の研究で初めてできた、それまでは、日本ではつまみ
食いしていた。

経典は、まずこれができて、その問題点が明らかにされ、またいま取り組んでいる論
点で不十分なところをさらに展開させていく。膨大な経典は、そういうようにつながって
発展したものだという考え方が生まれたのは、西洋人がお経のもののインドの言葉で読ん
だからできたのです。

それまでは、お経は漢文を訳したのを一つひとつ読むより仕方なかった。どれが先で、
どれが後かもわからぬ。そういう読み方を明治時代までしていた。

242. P 480より続き

オックスフォード大学のマックス・ミュラー教授（1823～1900）はドイツ人ですが、イン
ドはイギリスの植民地でしたから、ドイツ人では不便が多いので、イギリスに帰化された。
ミュラー教授はもののインドの言葉で書かれたお経をみんな読まれた。そうすると、この
お経でこれを初めて言い出した、そして詳しくなった、また新しい問題が起こって、これ
取り上げられたといった経典の発展的な系列がほぼわかった。

それを経典成立史といいます。そういう経典成立の考え方は、それ以前にない。自分の
気に入りそうな、手に当たったのを読んでみて、これがいいとか、あれはつまらぬとか考
えていたわけです。

243. P 480より続き

その後、マックス・ミュラー教授の蔵書のすべてを三菱財団の岩崎男爵家が買い求めたのを東大に寄付してもらいました。それでわたくしは東大に行った。それを見なければ、仏教の研究はできぬ。そうしたら、関東大震災で東大の図書館が焼けました。わたくしが一年生のときです。文学部が焼けましたから、私たちは医学部の焼け残った教室で卒業まで授業を受けていた。

こういうことはどうしても考えないとだめです。いまだにつまみ食い程度の宗派が多い。マックス・ミュラー教授が言ったようになかなかできない。

244. P 481より

仏教から仏像は離されない。日本の仏教も、奈良の仏像をみんなとってしまったら、京都の仏像をみんな無くしてしまったら、半分足らずのようなものです。

仏像はどうしてできたのかというと、前にも申しましたが、ギリシャ人がインドの西北、ガンダーラというところを征服した。アレキサンダー大王が占領して（BC326）ギリシャ人が何ヶ月もいた。アレキサンダー大王はもっと東に行きたかったのですが、部下がこれから先へはもう行かぬと言ったので、ガンダーラまでで引き上げた。そのあとに残った人びとが、アポロというギリシャの神さまを模してお釈迦さまの像をこしらえて拝んでいた。それをアポローン型仏像という。仏像としては一番古い仏さまです。それをインド人もつくり出して、インド風の顔になった。中国人がつくり出して、中国人のような長手の顔になり、日本人がつくり出すと丸顔になるわけです。仏さまが長手の顔をしておられたり、丸顔であられるのじゃない。つくった人の顔の形がそうなのです。

そのとおりの仏さまが極楽におられるというような考えをいまだに持っている方がありますが、そんなことを考えていたのでは、いつまでたっても、ものにならぬ。

245. P 482より続き

仏さまだけじゃない。『般若心経』を読んで、自分は『般若心経』を読んだと言われるけれども、それは読んだ方の程度で読んでいるだけにすぎない。わたくしが読むと、これはどうもおかしいと、もとのインド語を読んで調べてみると、おかしいと思うところが漢訳ではそのとおりに書かれていない。それでおかしくないように、もとのインドの言葉のとおり『般若心経』を漢訳したり、日本語訳もしています。わたくしはそれをすでに発表しているのだから、学会に対しては責任が済んでいるわけで、そのうちに認められるでしょう。

246. P482より続き

お経を読んだといっても、自分の程度に読んだということを考えないといけません。

お経に限らず、文学書を読んでも、歴史に取り組んでも、みんな同じです。

歴史家が言ったとおりの歴史じゃない。ノーベル賞をもらうような偉い方が言われたことでも、また次の時代で進歩してくる。歴史というのは発展的に取り組まれる。

だから、そういう考えを持たないと、いつまでたっても、何をしているのかわからぬことになります。

「いのちの賛歌」山本空外講義録246 [山本空外上人]

246. P484より

龍樹菩薩は、インドで一人名僧を挙げろと言うと、よほど特殊な考えの方以外は龍樹菩薩を挙げるといふほどの方です。この方が空ということを考えられた。空でまとめるという意味で、空観派（くうがんは）と言われていました。

しかし、それは龍樹菩薩の独創かという、そうはいかない。ギリシャの思想の影響ではないかとわたくしは思っています。仏像自身がギリシャの影響ですから。仏像は何をあらわしているかという、空をあらわしていなければ、あらわすものはない。

空は、おかげという意味です。自分の手柄じゃないということです。

空を無とあらわされることがあります。『般若心経』では、空や無ばかり言ってますが、

「無自性（むじしょう）のゆえに空なり、空復た亦た（またまた）空なり」

というのが、空の一番有名な定義です。自分勝手がない。自分勝手にしないということです。『般若心経』の解釈ではたいてい空を無という意味にとっているでしょう。そういう意味ではない。それを何もわからずにいる日本の思想はそのような点で乱れています。自性とは、わかりやすく言えば、自分の手柄ということです。

空は無自性ですから、自分の手柄じゃないということです。

247. P486より

山口県の萩市から海の方へ行くと、西円寺というお寺がある。

西円寺のことを知らなかったら、日本人じゃない。

なぜかという、マッカーサー元帥が、第二次大戦が終わって、占領軍の司令官として日本に上陸したときは、天皇陛下でも殺す権利を持っていた。ヨーロッパ風に考えると、戦争に負けたときは、みんな殺されるのです。イタリアのムッソリーニは引き出されて殺

されているし、ドイツのヒトラーは、自殺だというけれども、自殺しなかったら殺されていたでしょう。そのような権利を持って、マッカーサー元帥はやってきた。

南京事件をみなさんは十分ご存知ではないかも知れぬけれども、わたくしは、実際に関与した何人ものひとたちから聞いています。それで、マッカーサー元帥は、南京事件のようなひどいことを起こす日本人とと思っているから、信用せぬ。西洋風にやってしまう所存だった。それで、当時の関係者は何とかしようといろいろ考えて、仕方ないから、山口県長門大日比の西円寺や長門海岸の青海島の向岸寺へ案内した。日本人は、ああいう南京事件をやるような人間ばかりじゃないということの証拠を示すためです。証拠を見るといくらかでも考え直してもらえらるだろうと期待した。

248. P 486より続き

西円寺は今から三百年前、賛誉（さんよ）上人が開創された念仏道場で、開山の後、百年あまり後に三師上人が相次いで住職に入られた。三人とも学者です。それから一世紀近い年月、念仏の聖地として土台をつくられた。

賛誉上人は、鯨のお墓を建立したことで有名であり、青海島の向岸寺にも住した上人は、本堂に鯨のお位牌や過去帳までもつくっておられる。これが、日本人はこういう性質の民族なのだというひとつの証拠をだしたことになる。発願されたのは賛誉上人で、その後、志を継がれたのが、大日比三師や向岸寺の歴代住職方です。

日本人というのは、こうなのだと言ったら、初めて、そういう方面があるのかということマッカーサー元帥は理解して、占領政策が当初と変わった。それで、天皇陛下もそこに行かれました。

空だから、一人や二人の力ではないが、そのうちのひとつにこれがある。日本はそのおかげで、今日のような経済発展の道が開けた。西洋風にやって天皇陛下が殺されておいたら、今、どんな日本になっているか。マッカーサー元帥はその後、陛下に会われたとき、側に人がおらないと抱きつきたかったというような感激を受けた。

249. P 489より

二河白道などの説明でも、彼岸と此岸と二つあるのは、絵をかくときに、一つところへかいたのではわけがわからぬから、離して画くだけで、あるのは此岸だけです。みんな損得でけんかしたり、戦争したりしている。

その中であって、周囲を照らして、マッカーサー元帥でも、西円寺へ案内すれば、考えを幾分かでも変えてもらえたというところが、地獄の真ん中にある。

それを彼岸、極楽という。

250. P 490より続き

到るところにありというのは、ギリシャ語でパンタヒューといいます。

地獄の真ん中にもある。花の中にもある。鳥の中にもある。人間の中にもある。山の中にもあるのだけれども、山は山で、山が川になれるものじゃないし、人間になれるものでもない。だから、山だけというには、川もある、人間もある、ほかの星もあるということも考えれば、ものの数ではないから、どこにもないということになる。

山にもなる、花も咲かず、鳥になって飛べる、魚になって泳げる、人間になって、こういう五重相伝もできる。これはみんな阿弥陀さまのおかげです。

到るところにあるのだけれども、どこにもない。

全宇宙が数え切れない条件で、命の真実をあらわしている。

こういうあらわし方は、古代ギリシャの末期に、エジプト人のプロテーノーノスが、「到るところにあるが、どこにもない」と言った。すばらしい名句です。

251. P 490より続き

真実は、西洋といっても、東洋といっても、別のものじゃない。ただ、そのあらわし方が、科学が進むような西洋の思想と、科学は進まぬが、自然が何とはなしに暮らしの中に融けている東洋の考え方がある。お茶席に通っても、茶花といって、ちょっとのこころづかいで、茶席を何倍にも引き立てるような花をいけることができる。

ああいう日本人の心は、ほかの国にはない。

西洋人のまねもいけれども、日本人でなければできぬ方面もたくさんある。

そして、それを向こうは感心してくださるのだから、そういうふうな生活をこれからみんなができるだけしていけば、日本をばかにする外国人はおらないとおもいます。

252. P 492より

二河白道は、『涅槃経』が原点じゃないかという説もある。

涅槃はサンスクリット語でニルヴァーナ (nirvana) といって、簡単に言えば、サトリのことです。ニルヴァーナのニルはやむ。ヴァーナは吹く、アーナは状態という意味で、吹き

やんだ状態を涅槃と漢訳した。漢訳すると、漢字自体にも意味があるものだから、もとの言葉の意味がわからぬようになってしまう。

吹くというのは、自分勝手に幅をきかすことです。吹きやんだ状態というのは、自分勝手にしない状態です。自分勝手にしないのだから、自然の状態です。風が吹いているのは、何も風が自分勝手をして吹いているのではない。吹かなければ、その周囲が、実りもできぬし、衛生上も悪い。いろんな風が吹くおかげで、我われは生活ができるようになっていく。お日さまが照らさなかったら、みんなおしまいです。

自然現象は、ちょっと自分に都合が悪いようでも、それがないと我われが暮らせないようになっている。虫がいるのも、その虫がまた害虫を食べてくれるから野菜もできるようなもので、虫が何百匹あっても、要らぬ虫は一匹もおらぬと言われています。

人間だけが自分勝手をして、後で他人も困るし、自分もマイナスになるようなことをしている。

吹きやむというのは、簡単に言えば、自分勝手にやめるということです。

253. P 493より続き

自分勝手と、自分勝手にしない世界と二つあるようだけれども、ひとつです。

自分勝手をする中で周囲を照らしていく。それでなければ、何もならない。

だから、『維摩経（ゆいまきょう）』を読むと、高い山の上にはハスの花は咲かぬ、下の泥沼にしか咲かぬとあります。ハスの花は清らかで、人間のさとりに準じて考えられる花ですが、そのハスの花は高い峰には咲かない、どん底の泥沼にしか咲かぬというのは、『維摩経（ゆいまきょう）』の名句です。

254. P 493より続き

これは維摩居士（ゆいまこじ）の説になっていますが、聖徳太子は『維摩経義疏（ゆいまきょうのぎしよ）』を著して、これを解釈なさった。

『法華経義疏（ほっけきょうのぎしよ）』とあって、『法華経』も解釈なさった。

さらに『勝鬘経（しょうまんきょう）』の解釈を『勝鬘経義疏（しょうまんきょうのぎしよ）』とあって、勝鬘夫人（しょうまんぶじん）という女子がお釈迦さまのかわりに説教をされたお経の注釈もある。女子を仏教では隔てをするように思う方がいるが、それは仏教全部を知らぬからです。

聖徳太子は『三経義疏（さんきょうのぎしよ）』とあって、『勝鬘経』と『維摩経』と『法華経』の三経を解釈なさった。これが日本思想の原点です。

255. P 502より

昨日、在心（ざいしん）をお話しましたが、心が重点です。

我われは自分の心の程度でいろいろな世界を生きているわけですから、心がましにならぬと、ましな世界を生きるわけに行かぬ。お金だけあっても、それはお金は大事で、お金がなければ困るけれども、お金だけで十分じゃない。泥棒でも持つことができる。持つ人によってお金が生かされていく。人によっては、持たぬ方がいいこともある。だから、どちらが重点かといったら、やっぱり心の方で、持ったために殺されることも、だまされることも、子供が連れていかれることもある。

そんなことはない方がいいですから、起らぬような持ち方をしなければいけません。

それは心による。だから、心にある、在心は大事です。

256. P503より

今読んだのは、第二番目の在縁（ざいえん）です。

心だけが働いているわけじゃない。その心が動く背景、つながり合いがある。お釈迦さまがさとられたという縁起の縁です。縁起というのは非常に多種多様ですから、お釈迦さまはそれをさまざまに、広く深く大きく、いろいろな方面を、いろいろな深さ、つながり合いで考えていかねばならぬことを教えてくださったのですが、なかなかまとまらぬでしょう。一口にはどういうことですかということ、空ということになった。これはギリシャ文化の影響です。ギリシャ人は、概念的な把握が非常にすぐれているから、概念的に縁起を空としてまとめた。そのような能力が科学の進歩のもとになる。

257. P504より

日本語にはすばらしい言葉がございまして、日本語でなければ言えない方面が思想界にはたくさんある。それを怠っている。簡単には「おかげ」という。

陰だから、表に出ておらぬでしょう。それで、空とか無とかいうわけです。これが空だというものはないけれども、みんなおかげです。わたくしがお話させていただくのも、みなさんが聞いてくださるおかげです。みなさんがご病気だったら来れませんから、病気でないおかげです。それは、みなさんが賢いから病気にならないわけじゃない。賢い方でも病気になることもある。食べたものぐあいに当たることがない。同じようなものを食べても、当たる方は当たります。心配している人が食べるのと、喜んでいる方が食べるのとでは違います。科学的に言えば、その食べ物はどういう栄養があるのかということは分析できるけれども、それをいただいたために病気になる方があり、反対に元気になる方もある。

258. P504より続き

そういうことは電子計算機などでは計算できぬ。今日では、電子計算機で軍備一切、産業界もすべて。教育界まで影響を受けているけれども、それは受け過ぎだと思います。いくら影響を受けてもいいが、電子計算機では計算できぬ面がたくさんある。それを縁といいます。それをお釈迦さまは重視されたのだから、昔のことで、今に関係ないというものじゃない。同じ軍備をしておっても、日本のように戦争をやりだしたこともあるし、やり出さないで済むこともある。できることならやり出さぬ方がいい。それはどういう軍備の持ち方をこころがけるかという心と縁の方にある。

259. P504より続き

そういうことは教育上、一番大事なことです。

無二の一無とは空のことですが、無二的人間形成でなかったらお金を持つほど、科学が進歩するほど、人間が殺風景になってしまう。計算できる方面だけに気をとられるからです。わたくしは自然科学者と話したことがあるけれども、何かもう少し考えようはないかなと思います。

260. P505より

今日、科学本位になっておりますけれども、その科学をまっとうさせていくためにも、科学で取り組めない方面を掘り下げていかねばいかぬ。そうすると、科学が倍も値打ちを持ち出す。どんな科学的軍備をしておっても、戦争をせぬのですから、すばらしい。

今、戦争をやると、地球も人間もおしまいになるのだから、せぬ方がいい。

軍備が十分だからせずに済むというわけにはいかぬ。十分だからやり出す場合もある。これはやらない方がいいのだから、そういう軍備の持ち方はどうしてできるかということ、持っている人間の心がけです。そういう意味で、科学や軍備のためにも、こういう教育が必要だと思います。

261. P506より続き

お釈迦さまは、お金を持ったのであのような働きをされたのではない。弘法大師も貧乏であられた。お金がなくても、お金を持った方以上の仕事ができる。

結局、一番大事なのは、心とか、これから話す縁ということです。

縁をこのように説明しています。「云何（いかん）が縁に在る。彼（か）の造罪の人— 罪をつくる人、悪いことをする人— は自ら妄想（もうぞう）の心に依止（えし）」と。

目先の、人が見ておらぬからやるというような間に合わせでやっていることを妄想というのです。依止するというのは、それによりかかってしまうことです。

つい見ておらぬからとか、わからぬからとか思うけれども、そのときはわからなくても、後でわかることもある。とうとうわからぬ時もありますが、じゃあ、わからなければ得かという、そうはいかない。死ぬまで、わかったら困るという心配を背負わなければならない。それが毎日頭から離れることはありませんから、わからなくてもこれはマイナスです。何をしても、そのことが片隅にあるわけですから、うっとおしい。たとえ死ぬまでわからなくても、死んだ後にわかることもある。そこまで心配を続けるということは、いくら泥棒がうまくできて、得にはならぬ。それを得と考えるのは、そのときだけしか考えないからです。下品な言葉を使えば、それは、つまみ食いしかできない人です。そのような人を、家庭の教育、学校の教育で矯正できないことはない。

263. P507より続き

「云何（いかん）が縁に在る。彼（か）の造罪の人は自ら妄想（もうぞう）の心に依止（えし）して、 煩惱虚妄（ぼんのうこもう）の果報の衆生（しゅじょう）に依り生じ

る」ちょっと得だ、わからないからと思ってやるのですが、すぐわかることもある。わからなくても死ぬまで心配がある。そういう負担があると、その人がどんな仕事をして、ろくな仕事ができない。中身がない。ブレーキになる。そういう心の人、教育者になっていても、政治家になっていても、実業家になっていても、ごまかししかできません。努力しても、結局、何にもならぬに決まっている。

264. P508より続き

なぜかという、いくら子供だといっても、何十人が教えておれば、ばかになりませんから、自然にまともなことはわかる。お母さんのおなかの中におっても、お母さんの考えたりしたことを、十が十、全部子供は知っておる。そのことがそのとおりに心臓の動きに出てくる。ナムアミダブツと言うときの心臓の動きと、腹を立てるときの心臓の動きは違いますから、その自然の動きで子供は、十が十、百が百、満点にキャッチする。

だから、生まれたら七分どおりは一生が決まっている。十ヶ月でそれほどキャッチするのです。お母さんのおりになる。あとはまた、いろいろな関係で、よくもなるし、悪くもなりますけれども、おなかの中におってさえ、全部キャッチできる。

265. P508より続き

それが、学校へ生き出すと、いくら小学校だといっても、大勢いるのですから、先生が自然の命のつながりの原点に立って、無二的な教育をしてくだされば、それは十倍も二十倍の値打ちがあります。仕事の実るから、卒業してからも慕われたり、あの先生のためなら何か尽させてもらいたい、尽すことができるならありがたい、というぐらいの気持ちがだんだん出ます。

月給が同じだから、どうでもいいというわけにはいかない。月給は同じであっても、後の潤いというか、実りの段が違ってきます。そういう先生に習った子供は、先生のために尽すことが喜びになる。相手も喜ぶ。自分も幸せと、両方が清らかになっていくような生活ができないことはありません。それを一息で言える言葉がナムアマダブツです。

縁というのは、自分一人であるのではない。つながり合いで起こる。

「煩惱虚妄の果報の衆生に依って生ずる」です。

266. P509より

「此の十念は無常の信心に依止して、阿弥陀如来の方便莊嚴（しょうごん）

眞実清浄（しょうじょう）無量の功德名号（くどくみょうごう）に依りて生ずる」

方便というと、何か間に合わせのような気がしますが、インドの言葉でウパーヤ（upaya）といいまして、わたくしならわたくし、みなさんならみなさん、子供なら子供、病人なら病人、それぞれに通ずる道があります。子供には子供に通ずる道があります。老人に通ずるような道では子供には通じません。その道のことをいう。どうしても方便でなければ通じない。

うそも方便という言葉があるから、言い方が悪いですが、子供にわからなければ、本当じゃないことを言って戒めることはあるけれども、それはほんの間に合わせで、そういうのは方便ということの筋じゃない。その方にはそういう道でなければ通用しない。例えば、貧乏な方に金持ちの思うようなことを言っても通用しない。お金のない方には、お金がなくてもできる道を考えないとね。

莊嚴とは飾るという意味ですが、飾るといっても、その方でできる道さえ通じれば、それは、その方の最高の生活の実りが期待できる。方便と莊嚴がつながる。

そして、「真実清浄」とありますから、それこそ真実なものですし清らかです。
その方ができる満点の仕事ですから、これ以上のことはない。

267. P510より続き

試験を受けても、落第するときもあるし、合格するときもある。その学校へ入らぬのがその人の一生にとっては大事なことだったかもしれない。下手に入ると、一生涯、間に合わせになることがある。そういうときは、落第しても、何も苦しめることはない。

真実は清らかです。

それがその方の一生にとって一番大事なことです。就職といっても、その仕事に就けなくて、別の仕事に取り組んだところが、非常に力をあらわされることはありますから、就職がおもうようにいなくても、もうだめだというような気持ちを持つことはない。

そして、「無量」、無量の量は、計算するという字ですから、これと決まって考えられないということです。入学しても、落第しても、どちらも満点のことはある。入学できて、本当にその方が一生幸せになれることもあります。ただ、形式上の入学や落第で、いいとか駄目とかいうことは言えぬ。

それが無量です。計算できない。

268. P511より続き

「無量の功德の名号」、名号とはナムアマダブツのことを言っているのですが、それは無量の功德、これだと決めるわけにはいかない。ひとによると、念仏を称えても、病気が治らぬじゃないかと考える方がありますが、それは、治ることもありますけれども、治りにくいときもあります。長く養生しておった方が今後の生活の上でもいいし、体の上では無論いいというときは、治らぬのがありがたい。早く治ってまた仕事をし出して、今度は取り返しのつかない結果になることはある。

それを無量という。これと決められないが、とにかく自分勝手にしない。間に合わせをやらない。

270. P513より続き

有間心（うけんじん）というのは、今だけはこれで済まされるというような間がある。

ところが、そうはいかない。物事は何でも一つのことをまた他につながり、ずっと続いていく。自分はそう思わなくても、自分のあさはかな間に合わせで決めるだけのものです。後はどうにかなるとか、その間にごまかせるとかというような考え方は、一時の出来心みた

いなもので、それは、自分勝手な考え方です。ですから、仕事がみんなおしまいになる。

271. P513より続き

「この十念は、無後心（むごしん）・無間心（むかんじん）に依止して生ず」
後はない。それはそうでしょう。今、わたくしがこうしてみなさんにお話させていただくことは、前にも後にも今だけしかない。

またみなさんのどなたかにお会いしたときに言うておけばいいというようなものじゃない。これだけ多くの方がたに話しているのですから、あのときああ言ったけれども、実際はこうだというような言いわけは、自分の気が休まるかもしれないけれども、相手はそうはいかない。その方は、今さら何をおっしゃるかと思っても、けんかはしたくないから、わかりましたと言うてくださるかもしれぬ。けれども、みんなにそう言うことは到底できません。話を聞いてくださった方は、またほかにこういう話があったとってお伝えになるかもしれぬが、それが十や百や千、万になっていくので、絶対に間に合わせはしてはいかぬ。それが無後心です。今しかない。

272. P514より続き

宗教とか、芸術とかいう最高の文化は、今を生きることです。

それで、『阿弥陀経』には、初めに全部のお経のまとめが出ている。

そのまとめが三十字ですが、三十字は少し長いから、五字にまとめて、

「今現在説法」（こんげんざいせっぽう）の五字を説くと言われていた。

この五字が最後に来て、前に二十五字あって、三十字を説く。

『阿弥陀経』はどういうお経かというのと、その三十字をいうのですが、しかし、もう少し絞ると、「今現在説法」今、現に在って法を説く。阿弥陀さまは今、説法をなさっているということです。

わたくしの話すことがそうです。阿弥陀さまにかわって申している。

だから、仏教とは、死んでからのことをいうのだとか、死ぬときのことだとか言うが、そんなことがどこに書いてあるか。

273. P515より

下関の称名庵に、わたくしは何十年もお世話になりました。

前の庵主さまの岡崎円明法尼が昭和五十年三月三日、百歳で亡くなられたのですが、亡くなられる前の十年間ぐらいは、お別れするとき、いつも帰るわたくしの車にすがっては「もう死に別れかわからんから、どうか私に回向をしてください」とおっしゃってました。

その円明法尼のお師匠さまは、山口県豊浦郡安楽寺の岡崎法寛上人で、上人には男子の弟子が五十人、女子の弟子が二十五人、合わせて七十五人の弟子がおりまして、毎年一月十五日から、弟子だけを集めて五重相伝と授戒をしておられた。

それで、法寛上人が亡くなられる年にも、一月十五日から五重相伝と授戒をされた。その後みんな帰るでしょう。円明法尼は、萩の自坊へ帰られた。一月だから、雪が多くて、今日のように乗り物が便利でないですから、本当に容易じゃない。ようやく帰り着いたと思ったら、お知らせがあつて、「これから往生するから、来れる者は戻ってくれ」と。それで、ほとんどの弟子が再び安楽寺に戻ってみると、お元気なのです。はばかりもきちっとすませ、「これから往生する」「死ぬときは鉦（しょう）をたたくとみんなが怖がるから、鉦はたたいてはいけない。ここに紫雲たなびいて仏さまが来ておられるから、みんなまじめにやってくれ」と弟子におっしゃった。

そして、「その仏さまがお前たちにわかるか」と尋ねられたので、「わかりません」と答えると、「もったいないから、隣の部屋へ行っておけ」とおっしゃって、亡くなられた。

そのような臨終を見聞された円明法尼が、その後、住職をされた称名庵には、今でもそういう影響があるから、わたくしが話に行っても、いまもなおその雰囲気が続いているのがよくわかります。できぬことはない。

274. P 516より

そんなことはあるかというようなことが実際にある。

ないとおもうのは自分が知らないだけです。それで縁は大事です。

人間は知らなければならぬことは知っておいたほうがいい。大抵の人が知らなくてもいいことばかり知っておる。学校の教育がそうです。教えなくてもいいことを教えて、教えなければならぬことをきちんと教えておらぬ。どうしてああなのか。もう少し考えたらどうかと思います。

275. P 517より

今だけを毎日生きている。明日の今は、また明日の今です。

もう五重相伝が済んだのだから、何をしてもいいというわけにはいかぬ。やはり明日の今も、今日の今と同じ今ですから、二度とない。それを本当に自分なりに全うしていこうと思うと、ナムアミダブツしかあるはずがない。

損だ得だ、いい悪い、といくら考えたところで、何がいいか、何が損かということで、

わけがわからぬ、寝言を言っているようなものです。

276. P517より続き

今を真実に生きることです。

我われが自分なりに自分の生まれた甲斐を突らせていくような生き方の真実とは、命の原点の阿弥陀さまと一緒に生きねばできぬ。自分がいくらこれがよかろうと思っても、いいことになっておらぬ。これが得だと思っても、得になっておらぬ。

阿弥陀さまのおかげで、花も咲き、魚も泳ぎ、人間も生きていられる。お日さまが照らしているのも、心臓が動いているのも、空気が吸えるのも、みんな阿弥陀さまのおかげですから、おかげも突るような生き方をどうしてもしなければならぬ。寝ているときは、寝ているときが今です。それでわたくしは寝ていても念仏させてもらっておる。本を読んでも、字を書いても、何をして、お念仏をさせていただいている。

それで自分しかできない仕事も突っていくわけです。それを決定（けつじょう）という。

277. P524より

今日、自由平等というのは、意味が違う。たいていの方は、平等という言葉を知らない。

平等という言葉は仏教にしかない。西洋ではイクオリティー（equality）という言葉はありますが、同じという意味です。二と三を寄せると五に同じということです。平等ではない。平等という言葉は、ギリシャ語にも、ラテン語にも、ドイツ語にも、フランス語にも、英語にもない。男子と女子、老人と青年、富裕な方も貧乏な方もおられる。生活条件がみんな違う。同じ家に住んでも、その家に一旦入ると、道具の置き方も違うし、花の好きな方は花を生けたりして、みんな違います。人間が違っているのだから、同じにはできない。

同じということは、けんかをするときの材料にはなるけれど、本当はどこにもない。

言っているだけのことです。

278. P524より続き

平等とは、一人ひとりが、一人ひとりなりに自分の生活を実らせて全うしていくことです。十突るのに半分しか突らさずに、ほかはけんかをしているとか、人のまねをしているとか

いうのじゃない。それは祖先も違うので、遺伝が異なりますから、同じことをお話しても、受け取り方が違う。

わたくしは、四十年間、大学で教授をしておりましたが、同じ講義をしても、学生の回答はみんな違います。頭のすぐれた学生は、わたくしが言った以上につけ加えて書き添えている。十分でない学生は、半分しか書いていない。その半分が正しい半分ならいいが、間違っていたりする。同じ講義をしておっても、聞くのは同じとは限らぬ。百人おれば、百人が一人ひとりみんな違う。だれも疑うことはないのに、なぜそれを考えないのでしょうか。総理大臣になれば誰もがいいと思うかということ、いくら頼まれてもなりたくない方もあるし、ひとをやめさせてでもなりたい方もいる。そのこと自身が一人ひとり違うじゃないですか。

279. P 525より続き

この間、九州から立派なお医者さんがわたくしのお寺に見えました。その方は真宗ですから、わたくしのいる寺が本願寺のように大きな寺かと思われたらしい。そうしたら、これでも寺かというところにいるもんですから、どうしてここにいなさるのですかと聞かれた。わたくしは法蓮寺（ほうれんじ）が最高で、大きな寺に行くと、自分の仕事ができぬ。寺の用でいっぱいになる。わたくしには自分のしなければならぬ仕事があるから、その仕事ができるのには、このような寺がいいのですと申しました。

280. P 525より続き

そういうふうに、みんな違うのに、一律に考えたいのです。それが間違いのもとです。

一人ひとりが一人ひとりなりに、その人で全うできる仕事がある。その人にそういう仕事をしてもらえれば、ほかの人が及ばぬような仕事ができる。それを、他人（ひと）のできる仕事へ入ったりするから、半分しかできない、つまらぬ、ばかだということになる。

そうじゃない。みんな満点の生活ができる。自分がみのらせることが出来ても、他人（ひと）にはできない仕事がある。それを平等というのです。

281. P 526より

隣や向こうを見て、そのとおりにやろうとか、他人（ひと）のやる形をまねしたりするか

ら、往生できない。往生とは、ごたごた他人（ひと）と争ったりするのではなく、そのようなところをいっぺん離れて、自分でできる仕事を果たせ切っていくような生き方です。あるひとは十の仕事をするのに、その仕事を他のひとにさせれば半分しかできないとことがあります。兄弟は、親は同じでも遺伝が違う。お父さんに似た者、お母さんに似た者、おばあさんに似た者、みんな違いますから、自分の働きをやらせていけるような仕事をする。そうすると、みんな満点です。

欠点の者はあらぬ。わたくしがそういうひとに出会いますと、無条件に頭を下げる。

平等往生とはそういう意味です。往生しなければ平等ということはない。それを、損だ得だと言っておれば平等ということはないのに、なぜ平等という言葉を使うのでしょうか。平等ということの意味を知らぬ。同じ（同等）ということに取り違えておる。

「いのちの賛歌」山本空外講義録 282 [山本空外上人]

282. P 526 より続き

ひとの月給と同じだけ自分にもほしいとかいって、月給をもらうでしょう。ところが、それで何をかうのかは、ひとによってみんな違う。わたくしなら本をかう。そうすると、一万円で買った本だって、自分が読ませていただければ、またみなさんにも話ができるし、何倍にも生かして、実らせて、仕事につながっていきます。

ところが、同じだけのお金でも、競馬にでかけて、借金ができて、帰りに泥棒したりする。かえって、もらわなければ泥棒しないで済んだというようなことになる人もありますから、マイナスです。

平等ということをもう少し教育すると、日本の社会も、日本人の将来も、もっとよくなると思います。

283. P 527 より続き

世界の文化史を見ると、平等が一番大事です。そういう意味で、文化史の講義をきいておれば、大学を出ても、出た甲斐のあるような、その人のできる生活を実らせて、世のためにもなるし、その人も楽しい一生を終わることができる。

同じということしか考えなかつたら、それはできない。それで、西洋では、ギリシャの昔から戦争ばかりしている。今もそうです。競技だって、走る競争をしたり、ああいうことだけしか知らぬ。それを今、日本はまねをしてるだけのことです。

284. P 527より続き

しかし、西洋にもいいところはある。同じという考え方は、科学を進歩させるのに大事なことだけれども、それは簡単に言えば数学的です。二と二をたすと四になると、それは言ってみただけで、二とは何かということです。

人間が二人して、もう二人たして四人になるといっても、芸術のできる方もある。商売の上手な方もある。たして四といっても、何もならない。

本当に数学を考える方は、一とは何かということで、どうしたらいいかわからないぐらいのものです。人間の一人と植木の一本とは違いますから、ありもしないものを一と言っているわけです。数字で一というのは、同じ一ですから、そういうものはどこにもありません。

285. P 528より続き

そういう点から平等ということを考えないと、仏教は全然わからぬ。仏教は平等しか説かぬ。そのことをひとつお話しておかないと、へこたれたように思うでしょう。そうじゃないので、見かけだけで競争したり、損だ得だと言っていると、見かけは元気にやっているようだが、中身は、やらなくてもいいことをやっていることになる。わたくしは、世間的にやっていることは一つもやらぬ。自分でなければできないことしかやっておらぬ。それで、この年齢まで済んできた。わたくしは、大学生の頃、いっぺんも洋服を着たことはない。朝、着物を着て、あそこは袴をはいてありました。寝るまでそうです。本を読み出したり、考え出したり、原稿を書き始めたりすると、洋服に着がえる時間がない。それで済んだ。自分で出来ることに取り組んで、それを実らせて、自分も楽しい、人さまのためにもなる。そういう生活をするのが建前だということを知らなければいけません。事と次第によってはそうばかりとはいかないけれども、仏教で平等というのはそういう意味でございます。

286. P 531より

『選択本願念仏集』のラスト第十六章の最後に、すでにみなさんにお話した、
「速やかに生死を離れんと欲わば」（すみやかにしょうじをはなれんとおもわば）

という句があります。

これは、欲う（おもう）ならばという可能性です。おもわなければ問題にならぬ。

速やかというのは、今ということになる。

今といっても、今日の今と明日の今は違う。朝と昼でも違います。そのとき、そのときです。今日の今を放っておいて、明日のことを考えたところで、それは抽象的です。具体的な今をずっと我われは一生涯、生きていくのですから、その今を最高に生きていかなければ、最高の人生は全うされません。今の今を放っておくが、明日は一生懸命やるというのではない。速やかにというのは今だけです。それが一生涯ということです。

287. P532より続き

迷っていて、自分勝手をして、人からも非難されたり、またその言いわけをしたり、けんかまでする。そういうことを人間は、民族の歴史としても、個人の歴史としてもやっている。大抵の人がやっている。わたくしは一遍もしたことがない。それでわたくしの一生は少し充実している。

法然上人もなさらなかった。非難した人はいた。だから、七十五歳という高齢で土佐へ流刑にされた。島根県の隠岐島とか、四国の土佐へ流すというのは、その当時では死刑の一手手前の重罪です。それは、ナムアミダブツを勧めたからでした。

今では、こうしてわたくしがいくら一生懸命にお話しても、どこかへ流されません。だから、昔はおかしい。それを、天皇の命令で土佐に流し、またやれば殺すというわけです。そんなのが歴史です。過去の日本は、今、考えると何をしておったかというようなこともある。現在でも、そういう生活をしている方も多い。

288. P533より続き

今、それは永遠の今です。死ぬときも今です。死んで後も今です。

生死といっても、ただ生まれて死ぬだけなら迷いです。人間に生まれてきた値打ちはない。損だ得だ、いい悪いと、やらなくてもいいけんかや戦争までしている。それを離れるとサトリです。けんかはひとつもせぬ。それが条件で、生死を離れんと欲すればどうしたらいいかという、しばらく差しおく。ナムアミダブツをするという決め手の前に、しばらく差しおく「閻」という言葉を使って、今に取り組んでいく。

*（閻と書いて「さしおく」と読む）

289. P 533より続き

カントは、十二の範疇（はんちゆう）をつくりましたが、その最後のをモダリテート（modalitat）という法然上人のなさったように可能性、その次に必然性、そして現実性となれば、一番いい。

しかし、カントは、可能性の次に現実性を持ってきて、その次に必然性を持ってきた。

可能性（Möglichkeit）、現実性（Wirklichkeit）、必然性（Notwendigkeit）

で十二の範疇のしめくくりをつけようと思ったのですが、現代の哲学では、この順序は間違いだと言っている。

必然性が次にきて、現実性は最後だといっています。

290. P 533より

法然上人は、「速やかに生死を離れんと欲わば」と可能性をまず第一にして、必然性を第二にして、現実性を第三にした。現代の西洋哲学では、そうでなければならぬという方向に位置づけておる。

法然上人の「略選択」は、『選択集』の全体を二、三行にまとめたところですから、一番大事ですが、その「略選択」の数行は、現代の西洋哲学に対しても、教えてあげられるような内容です。

そういうことを、わたくしが哲学論文に書くから、外国からの反応もわかるのだけれども、法然上人のお考えは、そういう組織的、体系的な構造です。ただひとつの考えの思いつきや見方ではないので、全体構造の組み方が、まさに我われ専門家が見て哲学的です。

291. P 534より続き

法然上人は西洋哲学を知っておられるわけではないが、そうなおるのが、かえって尊いじゃないですか。そうなおらねば、我われの日常生活を自分なりに実らせ切っていくことはできない。必ずしようと思ったところで、そうならなければだめだから、現実に、真実に、自分がそれをするために生まれてきたように生きておる。それが真実性、現実性です。

292. P 534より

たいていは、現実といっても、ただ人まねをしてみたり、ごまかしてみたり、本当にうろうろしているだけです。自分は何のために生まれてきたかを考えなければいけない。昨日

も言ったように、キリストさまは何のために生まれてこられたかを初めて哲学的に取り組んだのがクザーヌスです。それで近世ルネッサンスの道が開けた。

ドイツ人は何のために、フランス人は何のために、イギリス人は何のために、イタリア人は・・・、と各民族が自分の民族の方向を近世の初め、四百年前に考えた。

今日は、こういうように世界中どんな民族でも行ったりきたり、またその国のひとと結婚したりしているから、民族的な単位ではなしに、一人ひとりが何のために生まれてきているかを考えなければならないようになってきている。

それは第二のルネッサンスと、わたくしは言っておる。そのときに、平等ということがいよいよ生きてくる。一人ひとりなりに生まれてきた値打ちを实らせていく生き方です。

だから、法然上人は、第一にルネッサンスの道を開いたと同時に、第二のルネッサンスを打ち出した方です。

293. P535より続き

平等は、民族的にも無論言えます。朝鮮民族は日本民族と同じように考えることはできませんから、民族ごとにそれぞれの生き方の特色がある。それはいい。

ところが、同じ日本人といっても、いろいろな方がいなさるから、一人ひとり自分が生まれてきたわけを实らすことができるような生き方ができなければ、その人は半分も、三分の一も自分の生きる値打ちを实らすことができないでしょう。十が十するにこしたことはない。そういうことを平等というのですから、法然上人の平等往生の中には、民族的な考え方は無論可能だし、一人ひとりが生きるその方向も含まれている。

終わり